
G・ガール！

りき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G・ガール！

【Nコード】

N0908D

【作者名】

りき

【あらすじ】

高校の夏休み中の爽汰は、初恋の理沙子と野球観戦に出かけた。しかしそこで不運にもファールボールが当たってしまった理沙子は意識を失ってしまう。やっと気が付いた理沙子だったが、何か様子がおかしい。なんと、夏休みに爽汰が帰省するのを心待ちにしているはずの祖父が、理沙子に乗り移ったというのだが！？祖父はどうして理沙子に？爽汰の初恋の行方は？これを読んだら、あなたもおいちゃんに会いたくなるかも！？

G・ガール！ 1

一日目

夏休みも半分を過ぎようとする頃。

蝉の鳴き声と共に、太陽が地面を焦がす音が聞こえてきそうな暑い日だった。

「本当に来ないの？ 後から父さんと来てもいいのよ？」

母は玄関先で、靴を履きながら何度も繰り返した質問をもう一度だけ聞いた。

「きつと喜ぶと思うわよ、あなたの顔見たら」

これから実家へ向かう母を見送りに出て来た爽汰は、睨むようにして息子の返事を待つ目を見られずに答えた。

「……よろしく伝えて。また今度遊びに行くからって」

母は、はあと大きくため息をついてから、諦めたように荷物を手に持って玄関のドアを開け出て行った。

お盆休みの時期に入っすぐの帰省。朝、会社に向かった父も、仕事を片付けたらその足で母の後を追う事になっている。

母が急ぐのには、理由があった。

実は、母方の祖父が脑梗塞で倒れたと言う電話が昨日の朝方かかって来たのだ。命は取り留めたが、余談を許さない容態であると言う。

元々もうすぐ帰るつもりだった母は、予定を早めて一人先に向かうと言う訳だ。

唯一の孫である爽汰は、夏休み中にも関わらず、頑なに帰省を拒み、両親もとうとう根負けしたのだ。

これから自分の間は、爽汰一人で留守番することになる。

「ごめん、おじいちゃん」

誰も居なくなっただ家で、爽汰は遠く離れた母の故郷にいる祖父へ

「でも、わかってくれるよね」
謝った。

G・ガール！ 2

二

「とうとう今日だな。緊張してるか？」

一人での留守番を始めて二日、爽汰のクラスメイトである悟が家に遊びに来ていた。

悟とは、小中と同じ学校に通った地元の友達で、家も近い。高校に入って初めての夏休みも、暇だと言ってはよく爽汰の家にやって来ていた。

冷房を強めに効かせた爽汰の部屋で、悟は背をベッドにもたれ、床に座りパソコンのゲーム画面を見ながら言った。

「何時からだっけ？」

カチカチとマウスを動かす音が六畳の部屋に響く。

気がつけば、さっきから暫く何も声を発していない爽汰に、悟はしびれを切らしゲームを一時停止して、ベッドの上に座っている爽汰を振り返る。

「爽汰？ おい、爽汰。おまえ、大丈夫か？」

窓から見える、まるで平面であるかのように真っ青な空に顔を向けたまま、爽汰は固まっている。

悟が何度か呼びかけてやっと、抜けていた魂が帰って来たような顔をして爽汰は振り向いた。そして、おもむろに叫ぶ。

「今何時！？」

呆れた顔で一度ため息を投げかけてから、悟は腕時計を見た。

「二時半過ぎだけど」

爽汰はそれを聞き、ああと呻いて頭を抱えた。見ていた悟も堪らずに肩を叩いてなだめる。

「まあ、緊張するわな。一ヶ月も前から準備してた初めてのデートで、相手は理沙子ちゃん。おまえが俺でもきつとそうなると思う」
そう言って、悟は目をつむり、うんうんと頷きながら同情してみ

せた。

石崎理沙子。爽汰と悟と同じクラスの女子の名だ。

黒くまっすぐな艶のある髪を肩まで伸ばし、斜めに分けた前髪から覗く、大きくビー玉のような瞳。鼻と口元は、派手すぎない品のいい作りで、顎から耳の下へと彫刻のように美しいカーブで輪郭を結んでいる。

一見、美人特有の冷たい印象を受けるが、その丸い目を三日月のようにして笑うと、彼女の優しく明るい人柄をすぐに証明してくれる。

そんな理沙子に二人が会ったのは、数ヶ月前の入学式の日だ。

式を終え、初めて入った教室は、五十音順で席が決められていた。黒板に張られた席順を確認し、青山爽汰の席につこうとした時、一つ後ろの席に座っていた石崎理沙子と目が合った。

「席、ここ？」

理沙子は、近づいて来た爽汰に、自分の前の席を指で指しながら、控えめな笑顔を作って聞いた。

その瞬間、爽汰は理沙子の存在自体に五感全てが集中してしまうほど、彼女の魅力に惹き付けられていた。

ぎくしゃくと頭をやっと上下させ、肯定の意味を伝えてからやっと、自分がずつと息を止めていた事に気づいた。それ程、爽汰は舞い上がっていた。

そんな爽汰の不審な動きを怪訝に思う事もなく、理沙子は先ほどよりも目を細くしてもう一度笑った。

「私、石崎です。よろしくね」

爽汰はその後、その日一日をどうやって終えたかわからないくらい、後ろに座る理沙子を意識してしまい、頭が真っ白だった。

矢野という名字のお陰で教室の反対側にいた悟は、爽汰の様子を見ていなかったが、学校帰りに「一体この気持ちはなんだ」と相談され、爽汰が理沙子に「一目惚れ」をしたのだということを知

った。

理沙子は知る由もないが、それは爽汰にとっての「初恋」でもあった。

それからというもの、爽汰はろくに後ろを振り向く事すらできなかった。声をかけるところか、真つすぐ顔を見ることも、緊張が邪魔して出来ないのだ。

それでも、爽汰は席順のお陰で、毎日のように理沙子の近くに居ることが出来、声を聞くことが出来る。傍から見れば、もどかしいと言われるかも知れないが、爽汰自身は、こんな恋が自分には似合っている、満足に近い気持ちでいた。

話すことはできなくても、友達と話す会話から漏れる理沙子の情報は、ますます爽汰の想いを募らせた。

理沙子には中学生の妹が一人いて、最近色気づいて来て困っている。

読書が趣味だそうだ。最近映画化された、悲しい恋愛小説を読んで、泣いてしまったということも聞いた。

そして、その会話の最後には爽汰を有頂天にさせるオマケまで付いてきていた。

「あーあ。私もあんな素敵な彼が欲しい。私のことを守ってくれるやさしい人」

ばかね、と冷やかされる声に、理沙子は笑っていた。

しかしその会話に背中を向けて聞いていた爽汰は、嬉しさのあまり泣きそうになっていた。自分には無理だが、そんな奴、このままずっと現れないでくれと願ってみたりもした。

しかし、ある噂を悟から聞き、そうも言ってられない気持ちになっってしまう。

明るく可愛い理沙子の評判が、クラス内はともかく、他のクラスや高学年達にまで広がっているというのだ。

そつえば、ここ何日か、教室のドアの外から、こちらの方を覗き込んでコソコソしている男子の姿を見た。それも一人二人では

ない。

このままでは、いつ目の前で誰かが彼女の気持ちをかつさらいに来るかもわからない。

爽汰は腹をくくる決意をした。

ただの憧れでもいい、片思いで終わってたっていい。でも、友達にすらないで、こんなに近くでいつも思っていた自分の目の前で、どっかの誰かに心奪われていく様を見せられるのだけは嫌だ。そんな終わりは、あまりに情けないと思ったのだった。

決意をしてからすぐのある日、悟が爽汰の席に走って来て、今がチャンスだと、こそつと言いに来た。

わざと一度席を離れ、何がチャンスなのかと遠くから見てもみると、珍しく理沙子が、休み時間に一人で、席に座って何かを読んでいたのだ。普段は友達に囲まれ、なかなか話しかけるチャンスがなかった爽汰にとっては、願ってもない状況だ。

すこすことまた席に戻り、一度大きく深呼吸をした。そして、安いおもちゃのロボットのようなきこちない動きではあったが、なんとか後ろを振り返り、爽汰は理沙子に声をかけた。

「な……、何読んでるの？ 石崎さん」

机に置いた雑誌に夢中になっていた理沙子は、突然前の席の男子に話しかけられて驚きはしたが、顔を上げ、これ？ と言ってから、恥ずかしそうにその表紙を爽汰に見せてくれた。

「青山君も、好きなの？」

爽汰は驚いた。

まずは、爽汰の名前を覚えていてくれただけでなく、親しみを込めて「青山君」と呼んでくれた事だ。存在を認めてくれていたのだと思うと、嬉しくて涙が出そうだった。

それともう一つ。

それはプロ野球の情報雑誌だったのだ。別に野球が好きな女の人 が珍しいという訳ではないが、理沙子のイメージからは連想しにくい。

しかし当の本人は、好きな野球の話が聞かれたのが嬉しかったらしく、爽汰に色んな話をしてくれた。

理沙子の祖父はプロ野球好きで、小さい頃からよく試合を見に、球場に連れて行ってくれていた。そのせいで、気がついた時には理沙子も野球が好きになっていたと言う。

だが、五年前にその祖父を亡くしてから、球場に行く事がなくなってしまったという話をしてくれたときに、ほんの一瞬、笑顔から寂しい瞳を見せた事を爽汰は見逃さなかった。

「両親も妹も、野球には全く興味ないし、女の子の友達にはなかなか付き合ってもらいづらくて。最近ほとんどテレビ中継だけなのだから、たまには雑誌も買って情報収集してるんだ」

爽汰は、野球が特別好きな訳でも、詳しい訳でもなかった。

しかし、その日以降、毎日スポーツニュースを欠かさずチェックし、朝一番で昨日の試合結果を理沙子とあーだこーだと話す事が出来るようになるまでになった。

爽汰にしては、それだけでも十分だと思っくらの進歩だった。

目も見られなかった以前に比べて、今では顔を合わせれば笑いかけてもらえる程にまでなれたのだ。

しかし、爽汰はどうしても一つの願望を考えずにはいらなかった。

連れて行って上げたい、球場に。

理沙子のおじいちゃんの代わりに、自分が連れて行ってあげたいと思っていたのだ。しかし、それをそのまま口に出れる程、爽汰は度胸も経験もなかった。それはまさに、デートに誘うのと同じことだからだ。

もしも、下心があると思われて、せつかくのこの関係まで壊してしまうのではないか。それとも、俺となんか行きたくなくても、優しいあまりに嫌々承諾させてしまう事になりはしないか。あるいは……。

爽汰の頭には、一つとして良い事は思い浮かばなかった。

それでも、どうしても理沙子を喜ばせてあげたいと、必死に頭を働かせ、なにかいい方法はないかと考えていた。

そんなある日、二階の自分の部屋から飲み物を取りに階段を降りようとしていた爽汰に聞こえて来た、新聞屋の勧誘と母のやり取りが、爽汰に一つのアイデアを与えた。

「もううちは何年も毎朝新聞さんをお願いしてるから。今更変えるつもりもないんですよ。ごめんなさいね」

母がなんとか帰ってもらおうと断るが、その営業マンも必死にある手この手で気を引こうとする。

「でもね、奥さん。何ヶ月かだけでもいいですよ。今なら、三ヶ月のご契約頂いたら、洗剤セットか東京ドームのジャイアンツ戦の指定席チケット、差し上げますから」

「本当にうちは結構ですから……」

これだ、と思った。

わざわざ買って来たチケットを持って誘えば、断りづらいだろう。でも、たまたまもらったチケットなら、どうせ元はタダだと、気軽に受け取ってもらえる。

それには、買った物を偽ってもだめだ。すぐバレる。招待券と書いてなければ。あの新聞社からもらったものでなければ。

そう思った爽汰は、三ヶ月分の新聞代を稼ぐべく、生まれて初めてのアルバイトを早速始めた。週末を使って、日雇いの引っ越し屋での肉体労働。一人では、少々心細かったので、気乗りしない悟をなんとか拝み倒して誘っての、二日間。

初めての「仕事」は、汗だくになり体中が筋肉痛になるほど疲れたものの、渡された封筒の中に、必要な一万円をとうとう手に入れることが出来た。

お年玉や、小遣いでその程度の金額を見たことがないわけではないが、その一万円は今の爽汰にとっては、光る金貨のようなものに見える程、価値のあるものに見えた。

大切にその封筒を抱え、疲れているはずの足は小躍りするように、近所にある新聞社の営業所へ向かった。

子どもが自ら契約をしに来るなんて、驚くほど稀なケースなので、営業所にいた事務員のおじさんも啞然とした様子だったが、話をするうちにその真意を察知した。

手元にある中で、一番良い席のチケット二枚を爽汰に渡して最後に笑って聞いた。

「野球が好きなんだね。楽しんでおいで」

爽汰は、ニツと笑って答えた。

「大好きです」

定価ならもつと安く買えるはずのチケットをやっと手に入れ、爽汰は思った。

自分と行くのが嫌そうな空気を感じたら、すぐさまこのチケットだけでもあげてしまえばいいのだ。タダだと言えば、快くもらってくれるだろう。それでもいい、満足だ。

少しでも気負いをなくそうと、そう思うようにして、次の月曜、早速切り出した。夏休みに入る直前の事だった。

それに対する理沙子の返事は予想外だった。

「本当に？ いいの？ 私、一緒に行ってもいいの？」

見るからに高揚した理沙子の顔は、これまで見た笑顔の中でも、とびきりだった。気が遠くなりそうな緊張から解放された爽汰の気持ちだが、尚更そう見せたのかもしれない。

そして、今日この日がその約束の日なのだ。

夏休みに入ってから二週間以上、理沙子には会っていない。それが必要以上に緊張を煽る。

悟は、今日の日にこぎつけるまで、どれだけ爽汰が努力し、気を使い、何より楽しみにしていたか全部見て来たので、爽汰の取り乱しがおかしくもあり、応援せずには居られなかった。

「楽しんでこいよ。夏休みのいい思い出としてさ」

すると、思いあまつたような顔で爽汰は悟にすがりついた。

「なあ。今日おまえ行ってくんない？」

「ばーか！ 何言ってるんだよ。理沙子ちゃんだって、おまえと一緒に行くつもりで、今日くるんだぞ？ おまえが逃げてどうするよ」

弱々しい顔を上げて、爽汰は一度深呼吸をした。

「そうだな。俺が行っていいんだよな。俺で、いいんだよな」

爽汰は、自分を奮い立たせようと必死だった。

しっかりしなきゃ、じいちゃんに怒られるよな。

そう。爽汰が祖父の命の危機にも関わらず、見舞いに行こうとしなかったのは、この日をキャンセルする訳には行かなかったからだ。それを思うと、爽汰も胸が痛まなかった訳ではない。

G・ガール！ 3

三

小さい頃はよく家族で帰省し、祖父には、とてもかわいがってもらったのを思い出す。

なかなか子宝に恵まれなかった爽汰の両親は、三十代半ばでやつと爽汰を授かり、大変な喜び方だったと言う。

それは、両親だけではなく、祖父母達も同様だった。

特に母方の祖父母にとっては、親元を離れ、東京に嫁いだ一人娘の産んだ初孫。待ち望んだ末の事だっただけに、その喜びは大きかった。

母の生まれ故郷は、東北の山の中。昔ながらの茅葺き屋根で、大きな平屋建ての一軒家。家の周りは原っぱだらけで、軒先に広がる砂利の庭から、目の前に聳える山までの間に境目はない。見渡せる範囲は全て、私有地だからだ。だからと言って、大地主なわけではない。このへんの家は山一個持っているくらいは、普通なのだ。自然が豊富と言うよりは、自然以外の物はこの家だけのような場所。そしてここには、小さい子どもなら誰でも喜ぶものが揃っている。

ゲーム機もなく、インターネットはおろか携帯の電波すら入らないが、子どもの遊び道具は、自然がたくさん提供してくれる。元氣と好奇心さえあれば、飽きる事はない。

そんなときに、自然との触れ合い方を教えてくれたのも、男の子は勉強なんかしないで、外で怪我して遊んでればいいと言ってくれたのも、祖父だった。

そんな祖父が大好きで、幼い頃の爽汰は、この田舎での生活をとっても楽しんだし、また来られる事を心待ちにしていたものだった。

しかし、変わっていったのは爽汰の歳が十を超えた辺りからだっ

た。

友達との時間を優先するようになり、親と出かける事も徐々に減ってきた。洒落っ気が出て来て、髪型やファッションにも気を使うようになった頃。

普段、あまり朝は話さない父が、朝食の席で爽汰に話しかけて来た。

「爽汰。母さん言ってたけど、今年の夏休み、田舎行かないって本当か？」

寝癖を直すのに洗面所に十五分も籠っていたせいで、急いでパンにかぶりついていた爽汰は、突然の父の質問にまず目だけ動かして反応した。

「なんでだ。友達とどこか行く約束でもしたのか？ それなら、少し位は日程ずらしてもいいんだし」

母も心配そうな顔で台所から父子の様子を見ている。爽汰は牛乳で口の中の物を流し込んでから答えた。

「父さんと母さんで行って来ていいよ。俺、留守番してるから」

「一人で何日も置いていけるわけないだろう」

「じゃあ、東京のおばあちゃんのとこ行ってる」

東京で生まれ育った父の実家は、今住んでいる神奈川の自宅から、電車で二十分ほどの近さにある。

父は一度うーんと、唸ってから言った。

「毎年家族で行ってたろう。お爺ちゃんもお婆ちゃんも、楽しみに待ってるんだ。顔見せに、行ってあげたらどうだ」

父は持っていた新聞を、横の席の上に置き、爽汰に向き直って言うていた。しかし、当の爽汰は既に気持ちが決まっているらしく、あっさり言い返した。

「毎年行ってるからこそ、今年くらい行かなくてもいいでしょ？」

夏休みは来年も再来年もあるんだから」

父は面食らっていた。

最近仕事で忙しくしていたせいで、息子とゆっくり話す時間がな

かった。最近どうだ、と時間を作って話をしようと思っていたが、今度、また今度と先伸ばしていた。しかし、その時間は確実に息子を大人にしていた。子どもだ子どもだと思っていたわが子が、親を黙らせる程筋の通った言い訳が出来るまでに。

テレビを見ている息子の横顔に、複雑な気持ちで父は言った。

「じゃあ、来年は……一緒に田舎行くんだぞ」

爽汰は横を向いたまま、黙って頷いた。

しかしその年以降、爽汰は親と田舎へ帰る事は一度もなかった。その都度、両親はあの手この手で息子を連れて行こうとしたが、結局大した理由すら聞けずに諦めざるを得なかった。実際、大した理由などなかった。爽汰にしてみれば、ただ両親の目のないところで、思い切りゲームをしたい、友達と遊びたいから、という思春期特有の親離れだったのだ。

普段はテレビゲームを一時間もやっていれば、母親の茶々が入る。夜が遅くなれば、連絡をしるだの、変な遊びをしているのではないかだのと、逐一電話が入る。

せっかくの夏休み、束縛から逃れてみたいという気持ちが強くなつたのだ。

だが、さすがにそれを言えば無理にでも連れて行かれるだろうと思ひ、理由はあえて言わずに気が乗らない振りをしていた。

そのうちに、爽汰の夏の恒例だった、母の田舎への帰省は、どんな遠のいてしまつていったのだ。

そんな爽汰に、祖父がたまの電話で言うのはいつも決まっていた。

「今度の夏休みはこっちさ来んだべ？」

爽汰はそれを聞かれる度に、胸がちくりと痛む。会いたがつてくれているのを、知っているから。

「うん。たぶんね」

その祖父が、倒れたというのに、デートの約束を優先している自分を爽汰はむず痒く思っていた。

しかし、祖父が昔言ってくれた言葉を思い出して、きつと祖父でもこうしろというだろう、と思うのだった。

まだ小学二年生の爽汰を相手に、河原で釣りをしながら祖父は真面目な顔で語った。

「いいが、爽汰。男はな、女にした約束だけは、絶対に守んねばなんねーんだ。わかるか？」

爽汰は、川面の浮きの動きを追いながら、適当に受け答えていた。「わかんない。なんで？」

祖父は、いたって真剣に続けた。

「女にがっかりされるような男には、なつてはならねーって事だ。わかったか？」

もちろんその時の爽汰に、その言葉の意味などわかるはずなかった。

それっきり、その時の事などすっかり忘れていたのだが、なぜか祖父が倒れたと聞いた次の瞬間にその言葉を思い出したのだ。そして、それはきつと、祖父から爽汰へのメッセージなのだと思います、見舞いに行かないと決めたのだった。

ごめん、じいちゃん。

爽汰はもう一度、心の中で祖父にそう言った。

「よっしゃ」

爽汰はやつと、重い腰を上げた。

「お？ 行く気になつたか？」

必死で気持ちを奮起させる姿を、悟はずつと見ていた。正直、あまりにも真剣に悩んでいるので、かわいいやらおかしいやらで笑いを堪えていたところだ。

しかし、そこから、何を着ていくかでまた頭を抱えて悩み始めたところで、悟はとうとう声を出して笑いだした。

四

待ち合わせ場所は、球場の前だった。

爽汰と理沙子のそれぞれ住んでいる方角が、丁度球場を挟んで二手に別れているせいで、現地集合になったのだ。

それも後から考えると、爽汰にとっては良かったのかも知れない。理沙子と二人で電車に乗る事を考えたら、また意識が飛びそうに緊張してしまったからだ。

ナイター開始の三十分前に、チケットに書かれたゲート前に集合の予定。爽汰はその更に三十分前に待機していた。

しかし、理沙子も負けずにその十分後には現れた。

「青山くん！」

芋洗状態の混雑する球場周辺の人ごみの中から、手を上に振りながら理沙子は跳ねて声をかけて来た。

いつも見る、セーラー制服姿の理沙子とは違い、ピンクのTシャツ、デニムのミニスカートにスニーカーというカジュアルな服装で、髪を後ろに一つに束ねている。

「早いね！ 待ち合わせまで、二十分もあるのに。絶対私の方が先だと思ってた」

溢れるような笑顔と共に、理沙子は爽汰を見上げて言った。

近くで見ると、ほんのりメイクもしているのがわかった。瞼の上に淡いピンクのシャドウと、唇に透明のグロスを塗っているようだった。学校よりも少し大人っぽい表情の理沙子に、爽汰はぼくと見とれてしまった。

「ねえ！ あれ、買わないと！」

理沙子が指差したのは、野球の応援には欠かせない、プラスチックのメガホンだ。

ついさっきまで、大人びた表情を見せたかと思うと、今は子ども

のようなキラキラした目で、売店に夢中になっている。

爽汰は、息苦しいような気分だった自分を少し恥じながら、気分を変えることにした。一緒に楽しもうと決め、そして、言った。

「メガホン、買いに行こう。俺、タオルも買っちゃおうかなー」

あ、なら私も、と笑いながら、二人は球場の奥へと向かって歩いて行った。

球場の中は、双方の応援団で埋め尽くされるスタンド席がカラフルで、お祭りのような盛り上がりだった。夏休みという事もあり、家族で応援に来る人や、子ども達の姿も目立った。

球場の周囲に広がる通路には、焼きそばやお弁当、様々なスナックを並べる売店が連なり、ついつい持ちきれない程買い込んでしまふ。

ここにいてだけで、野球に詳しくなくてもなぜかわくわくさせる雰囲気がある。勝手に気分が盛り上がってくるのだ。

二人の席は、一塁側のなんと前から三列目というグラウンドからすぐの所だった。これには、野球観戦になれている理沙子も驚いた。「わああ、こんな近い、すごい！　ねえ、ここなら、選手の表情もはっきり見えるよね？」

爽汰は嬉しかった。もちろん、この恵まれた座席の事ではない。理沙子がこんなに喜んでくれている。たとえ、その気持ちは爽汰とは一切関係のない感情であっても、もう構わないと思った。

「頑張つて応援しないと、選手にも見えちゃうな。気合い入れないと！」

そう言う爽汰に、理沙子は破顔して答えた。

「プレイボール！」

試合は始まった。

G・ガール！ 5

五

夏の遅い日没を終え暗くなった頃、爽汰の父、拓治は義理の父の運ばれた病院にようやくたどり着いた。

拓治は、タクシーを降り、病院の裏側にある夜間受付に行くまでに、一度大きくぶるつと震えた。

「寒いな」

昼に東京を出てから、半日以上かけて来たとはいえ、ここ東北の夜の涼しさは、同じ日本とは思えないくらいだ。

急いで仕事を終え、用意もそこそこに来てしまったせいで、軽装を悔いた。

必要最低限の明かり以外は電気も落とされ、人気もなく薄暗い病院内を、案内された病室を探しながら進んだ。

目的の番号の部屋を見つけ、ネームプレートに書かれた名前を見る。

高橋 徳二郎、ここだ。

拓治は義父の名を心の中で確認してから、そつとドアを開け静かに中を覗く。

先に来ていた妻、幸恵がベッドに寄り添っている背中を見た。

「幸恵」

拓治は小さく驚かさないように声をかけた。

「あなた」

振り返った幸恵は、少し疲れたような顔で立ち上がった。

その後ろに見えるのは、ベッドに横たわる幸恵の父の姿だった。

「どうだ、お父さんの様子は」

拓治は、音をたてないように鞆を床に置き、幸恵の方へ近づいて言った。

幸恵は胸の下で腕を重ね、静かに寝ている自分の父を見やった。

「手術は成功したって。今の所落ち着いてはいるけど、お医者様も、意識が戻らないとなんとも言えないそうよ」

「そうか……」

拓治はゆっくりベッドの脇に歩み寄る。

鼻には細いチューブが差し込まれ、腕には痛々しくも見える点滴が繋がっている。拓治は、その光景に胸が詰まった。

「何か、話かけてやって。きっと、聞こえると思うの」

拓治はうん、と頷いてから、白い布団の上に置かれた徳二郎の手を優しく握った。

「お義父さん。ご無沙汰してます、拓治です。心配しましたよ」

「お父さん、ほら、拓治さん、来てくれたわよ。良かったわね」

意識がないままでは、聞こえているはずがないだろう。それでも、伝わって欲しいという気持ちだった。

拓治は、ごく軽くだが、思いを込めて握った手に力を入れて、ゆっくりベッドに置いた。

ふと、拓治は幸恵の顔を見る。

部屋が暗くてよく見えなかったが、疲労がにじんでいる。昨日の夜も、心配であまり眠れなかったのだから、当然だろう。

崩れるように椅子に座る幸恵に、拓治は肩に手を置き言った。

「きつと大丈夫さ。こんな事でどうにかなるお父さんじゃないだろう？」

幸恵は力なく、でも笑って答えた。

「……そうね。そうよね」

静まりかえった病棟で、声が漏れて迷惑にならないようしながら、拓治は妻の気持ちを少しでも和ませようとして聞かせる。

「だって、ほら。雪の積もった真冬でも、ランニング着て乾布摩擦する人だぞ、なあ？」

以前、家族で正月に帰郷したとき、酔っぱらった義父と一緒にやるぞ、と驚く拓治を誘って外で乾布摩擦を始めた事があった。拓治はその無謀で元気な義父の人柄が好きだった。

幸恵も吹き出した。

「……本当に。元気だけが取り柄だもの。庭に植えてある大根やら人参やらを、ひっこぬいてはそのまま食べちゃうような人なのに。まったく似合わないったらないわ。こんなところで寝込んでるなんて。まったくだ、と拓治も笑ってしまう。」

「大丈夫さ、お父さんなら、すぐ元気になるさ」

「ええ、そうね」

そう言って、微笑みながら父の顔を覗き込んだとき、夫婦が聞いたのは、寝言なのか、うわ言なのかわからないものだった。

「爽快、やつと見つけ……」

意識が戻ったのでは、と驚く夫婦の呼びかける声に、そのまま何事もなかったように、徳二郎はまたまったく反応を示さなくなった。

六

試合は打って守って、打たれて守られての接戦だった。見る方にしてみれば、一番盛り上がる試合だろう。

理沙子の影響で、選手の事も、チームの事もよく知っていた爽汰は、より楽しんで観ることができた。

そして、野球観戦がこんなに興奮できるものだを知ることができて、今日ここに来て本当に良かった、と思っていた。

ここまで同点で来た両者の攻防も、九回表でジャイアンツがソロホームランで一点差をつけ、とうとう九回裏になった。ここで敵チームが無得点ならば、ジャイアンツの勝利になる。

球場中が一球一球を見守る山場を迎えていた。応援団の声援も、このままで終わるなという気合の入ったものになっていく。

バッターボックスには、いよいよ最終回の打者が姿を現した。

「とうとう最終回ね」

一人目は三振。二人目はセンターフライ。三人目がフォアボールで、一塁に出たが、すでに二死。ここで一発出なければ、試合終了だ。

ここまでくると、ほぼ試合は決まった、という雰囲気立ちこめてくる。スタンド席では、早くも混雑を避けるために帰り支度をする姿も目立ち出した。

そんな中、ジャイアンツファンの理沙子は、上機嫌でバッターの動きを見ていたが、不意に話しかけてきた。

「青山君」

試合中ずっと、大きな声で声援を送っていた理沙子の声は、少し枯れている。でも、そんな事は気にしていない様子で、理沙子は爽汰に顔を向けた。

「ん？」

爽汰も、楽しい時間を過ごせて満足だった。自然と顔も笑顔になる。

理沙子は、楽しむ笑顔とは少し違う、微笑むような表情に言った。

「今日……誘ってくれたの、私が祖父の話したからでしょう？」

四人目のバッターはその時点でツーストライクにまで追い込まれていた。

「いや、そう言う訳じゃ……。たまたまタダ券もらえたから……」

「いいの、わかってる」

理沙子は、爽汰の話を遮るようにして言った。

「ただ、ちゃんと言ってなかったから、ありがとうって」

爽汰は、思いもしなかった理沙子の言葉に、なんと言っていていいかわからず、もごもごと口を動かしていた。

バッターの響かせた快音は、惜しくもファールボールになって、

二階席の方に飛び込んで行った。

理沙子は、爽汰を見ていた目をそらし、あのね、と小さく言ってもう一度爽汰の目を見つめた。

「私、夏休みになってから、なんだかずっと青山君の事考えちゃってて。なんでかなって思ってたんだけど。多分……わかったの」

爽汰の心臓が、口から飛び出てどっかに飛んで行ってもおかしくないくらいに伸縮した時、またもバッターボックスから飛んで来たファールボールが、今度は爽汰と理沙子の席の上空に飛んで行った。そして、二階席の壁にあたり、落ちて来たボールはすぐ脇の通路にバウンドして、もう一度高く上に跳ね上がった。その放物線の先は……。

もう試合の事は頭から離れていた理沙子はまっすぐ爽汰の顔を見ていた。

「私、青山君の事、す……」
ゴン。

爽汰は、一瞬何が起こったのか、さっぱりわからなかった。

「……す、ゴ、ン？」

G・ガール！ 7

七

二人は、球場内にある医務室に通されていた。そこは、通常は関係者しか入れない地下のスペースにあり、日常的に怪我の伴うスポーツ選手のいる場所だけあって、数台のベッドと小さな診療所くらいの設備は整っているようだ。

バウンドしたボールは、その勢いこそ失っていたものの、理沙子の後頭部を直撃した。

自分の胸に倒れ込んで来た理沙子に、爽汰はパニックになる事しかできなかったが、係員が飛んで来てここに運んでくれ、すぐに脳波やら心電図やらの検査をしてくれた。

理沙子は頭を打って一旦は気を失ったが、幸い、大きな異常は見つからず、暫くここで安静にしてから、目が覚めて時気分が悪くなければ帰れるだろう言う事だった。

試合もとくに終わっており、さきほどまで部屋の外で聞こえていた人の気配もだいぶ減ってきた。医師達もドア一つを隔てた向こうにいたので、ここにはいま二人だけだった。

爽汰は心配そうな顔で、ベッドに横たわっている理沙子の顔を覗き込んでいた。小さな寝息を聞いていると、いつか止まってしまわないかと、妙に怖くなる。

早く目を醒まして欲しいと願いながら、爽汰はただただ待つしかなかった。

すると、ベッドの上に軽く置いていた爽汰の手に、小さな振動が伝わって来たのに気づいた。

爽汰は、安堵して理沙子に優しく話しかける。

「石崎さん、わかる？」

理沙子はゆっくりと瞼を動かし、目を開いた。

「ここ、球場の医務室だよ。ファールボールが当たっちゃって、石

崎さん、気を失っちゃったんだよ。覚えてる？」

爽汰は、きつと理沙子は今の状況が理解できないだろうと思い、安心させようとした。

理沙子はぼんやりとした瞳を、徐々に天井から爽汰に移し、じっと見つめた。

その瞳が、何か今までと違うような気がした爽汰は、理沙子の容態が良くないのだと感じた。

「ああ、気分が悪いんだね？　待って、今先生呼んで……」

爽汰が立ち上がり、ベッドの側を離れようとした時、理沙子は言った。

「……爽汰」

「え？」

今、理沙子が「爽汰」と呼んだように聞こえた。

鼻からそんなはずはないと思う爽汰は、なんと言ったのかも一度聞き直さなければと思った。

「何？　どうした、石崎さん？　大丈夫？」

ベッドに乗り出し、自分の耳を理沙子の顔の前に近づけて聞いた。すると、理沙子はさっきよりもっとはつきりとした口調で、もう一度言った。

「大丈夫だ、爽汰」

数秒、爽汰は理沙子を見つめてしまった。

なんだ？　この状況で冗談を言っているのか？

と考えている爽汰に、理沙子は弱々しく笑った。そして、ゆっくり体を起こそうとする。頭が混乱していた爽汰も、すぐにその背中を支え、ベッドの上に理沙子を座らせた。

目で見える限りは、理沙子に異常は見当たらない。しかし、何かがおかしい様子に、爽汰は急に心配になってきた。

「……石崎さん？　だいじょうぶ……ぶ？」

爽汰は恐々聞いてみた。

理沙子は、ぷつと吹いてから答えた。

「まだわかんねーが。まあ、この格好だったら、仕方ねーがもしれねーな。ワシだよ、爽汰」

この話し方、どこかで聞いた事がある。誰だかはすぐに思い出せない。が、理沙子のものではないことは明らかだ。

「え……？ わからないって、何が？ わからないよ」

ネタ明かしでもするように、得意げな顔で理沙子は言った。

「鈍いなあ。おまえのじいちゃんでねが」

爽汰は口を開けたまま、固まった。目で見ているものと、耳から聞こえる言葉が、脳で噛み合わないエラーが発生している。

声は確かに理沙子だ。話しているのももちろん理沙子。でも、その口から発せられる東北訛りの台詞は、間違いない。爽汰の祖父にそっくりだ。

「どうして……。いや、そんなの、あり得ないよ……冗談でしょ？」
パニク寸前の爽汰は、立ったまま頭を抱えた。

祖父だと名乗る理沙子は腕を組み、落ち着いた声で続けた。

「おまえに会いたくて、ちょっとだけこのお嬢ちゃんの体を借りただけだ。すぐに元に戻ってから、そんなに驚くでねえ」

「そんな……本当に、じいちゃんなの？ でも、どうやって？」

眉間にしわを寄せ、疑る目で見返す孫に、祖父の徳二郎は優しく言った。

「なんだべ、じいちゃんな、脳梗塞つてので倒れてしまつて、今意識がねんだ。んでな、じいちゃんも初めて知つただけど、意識が無い間、人間つてのは自由に好きなど行けんだわー。これ、多分あれだべ、ユウタイリダツつての。魂だけがふわーっと、な」

ここであつはつはと、理沙子ならぬ祖父は笑った。こんな笑い方、決して理沙子はしない。

憑依。

爽汰には、そんな言葉が浮かんだ。信じ難い事だが、今話している相手が、爽汰の知る理沙子とは別の人格である事は、否定はできない。

「ほんで、死ぬかもしれないねーんだば、最後に爽汰の顔さ見てえと思つてよ。東京さ来てみたんだ」

いつもと何ら変わらないように見える理沙子の口元から、立派な東北弁がここまで流暢に出てくると、今聞いたとんでもない内容の話も、信じざるを得ない気がしてきた。

爽汰は、そう考えながら、黙って聞いていた。

「やつの事で、爽汰を見つけたと思つて近づいてみたら、おまえと一緒に居たこのお嬢ちゃんが突然、体からぴょんと飛び出してくんだもん、びーっくりだよ」

爽汰はどきつとした。一気に汗が体中から出てくる。

「石崎さんは、大丈夫なの？ 死んだりしないよね？ ねえ！？」
理沙子の中の徳二郎は、目を瞑って首を縦に数回振った。

「大丈夫だ。この体をちよつと貸してくれるって言つたのは、このお嬢ちゃんの方なんだで」

その言葉で少し安心しつつも、すぐに爽汰は不思議に思った。

「じゃあ、じいちゃん石崎さんと、魂同士で話したってこと？ 意識がない同士で？」

「んだ。今さっきまでここだな。心配そうにしてるお嬢ちゃんに声かけて、ワシが爽汰のじいちゃんだって言ったら、喜んでくれてな。話さ聞いてもらったら、爽汰と話してやってってくれてな。いい子だなやー、この子は。なあ、爽汰。さすがおまえのガールフレンドだ」「ガ、ガール、フレンドじゃ……、ないって！」

爽汰は言ってから、つい大声を出してしまった事に気づいて回りを見回した。

どうやら、誰にも聞かれていないようだ。

頬が赤いのを自分でも感じながら、必死に恥ずかしさを抑える。

「じゃあ、石崎さんは戻って来れるんだね？」

「んだ。そつたら長々と借りるのも悪いし、そろそろ戻んねばなんねーけど、いやー、死ぬ前に爽汰に会えたいし、話も出来て、来て良かった」

あ、つと爽汰は思った。

久しぶりの会話なのに、一言も祖父への言葉をかけていない。

「ちよつと待つてよ。じいちゃんは？　じいちゃんはどうなの？

死んだりしないよね？　俺、来年こそ、本当に田舎行くからさ。だから、死んだりしないでよ？」

祖父だという理沙子の顔は優しく笑う。

「それは、自分ではどうにもなんねんだ。体が頑張れるかどうかは、無意識だもんで」

爽汰は何かを言おうとしたが、言葉が見つからなかった。そして目を伏せた。

「じいちゃん……」

徳二郎である理沙子は、につこりと笑い最後に言った。

「元気でな、爽汰。父さんと母さんと仲良くすること。このお嬢ちゃんの事も、優しくしてあげねばだめだよ？　いいな？」

爽汰は静かに頷いた。

「……最後じゃないんだから、そんなに湿っぱい言い方、止めてよ」
はっはっは、と豪快に笑い、徳二郎は手を振った。

「じゃあな。ワシは戻るぞ、爽汰」

「……うん。またね、じいちゃん」

爽汰も手を振り返した。そして、爽汰の見る前で、徳二郎は体を横たえ、目をつぶり、寝入ったように力が抜けて行った。

爽汰はなぜか涙がでてきて、困惑していた。

不思議な時間だった。

本当に、今のは祖父だったのだろうか。

にわかに信用できないが、でも話した内容は、祖父とそのものだった。ずっと会えなくて、心にしこりを持っていた爽汰にとっては、少しではあるが慰めになったような気がする。

きつともう、自分の体に戻って、病氣と戦っているのだろうと思うと、今度こそ本当に田舎に行かないと、と爽汰は思っていた。

すると、暫く動かなかった理沙子の体が、またぴくつと動いた。

「……！ 石崎さん！？」

やっと、理沙子に戻ったのだ、と爽汰は瞬間に思った。
じいちゃんの事、お礼言わなきゃ。でも覚えているのかな。そんな事言つて、頭おかしいと思われないよな？

常識では考えられないような事だっただけに、なんて言い出して
良いかわからないが、今は理沙子の体の方が心配だ。

「石崎さん、具合どう？」

先ほどと同じく、ぼんやりとした目で爽汰を見ている。理沙子も
また、混乱しているのだろう、と爽汰は思った。

「ああ、急がなくていいよ。ゆっくりで」

体を起こそうとする理沙子に、爽汰は徳二郎だった時と同じよう
に手を差し伸べた。

不思議そうな顔の理沙子は、困惑した様子で、一言発した。

「あれ？」

爽汰は優しく聞き返した。

「ん？ どうしたの？」

理沙子は自分の頭に右手を当て、困ったような顔で言った。

「どうやったたら、戻れるか、わかつか？ 爽汰」

爽汰は、顎が外れて、膝まで伸びるくらい、驚いた。

八

自分でも気づいていないが、爽汰の顔は真っ青だった。

「大丈夫かな……あああ、心配だああ」

地元の駅を降りて、自宅まで帰る道ので、まず何をどうしていいかを考えようとするのだが、てんで考えがまとまらなかった。

ただ、どうしようという言葉だけが口から出てくるだけで、気持ち焦るだけだった。

あの後、何度も理沙子の体から抜け出せるように、頭を振ってみたり、もう一度眠り込めるように目を瞑ってはみたりしたもの、何度聞いてみても、中身は徳二郎のままだった。

はじめは、理沙子が騙しているのではないかと、爽汰は半信半疑だったが、そんな事を一時間も続けているうちに、そんなはずがないと思い始めていた。

やむなくそのままの状態で、隣の部屋にいた医師を呼んで、目が覚めたことを伝えた。

聴診器を当てたり、目にライトを当てて動きをみたりして、一通りの検査をしてから、医師は理沙子に向かって聞いた。

「うん、特に異常はみつかりませんね。問題ないと思います。ただ、打った所が頭ですから、もしも数日して痛みを感じたり、気分が悪くなるような事があったりしたら、すぐに近くの病院に行ってください。いいですね？」

理沙子は、小さく頷く。それを見て、使った道具をしまいながら、医師は言った。

「その他に、何か気になる事がありますか？」

もちろん、理沙子も、カーテンの外で話を聞いていた爽汰も、中身が違う人間になったまま元に戻れなくなった、とは言えなかった。

時間も遅くなってしまったので、何も手を講じることなく、支度をして渋谷球場を後にした。

駅に向かいながら、きつと理沙子の家でもそろそろ心配しているのではないかと、爽汰は言った。

「一度家に電話しといたほうがいいんじゃない？　もう結構遅い時間になっちゃったから」

すると、理沙子は立ち止まり、きよろきよろと辺りを見回した。

「どうかした？」

爽汰も足を止めて聞いた。

「電話はどこさにあるんだべなと思ってな」

爽汰は、額に手を当てて唸った。

「そうか……。じいちゃんなんだよな。ごめん」

そう言って、理沙子の元に近寄り、理沙子が持っていた鞆の中をまさぐり始めた。

「ごめんね、石崎さん」

小さく謝ってから、理沙子の携帯電話を取り出し、「自宅」と登録してある電話番号を探し出し、手渡した。

「はい、これ使って。ここを押すと電話かかるから」

受け取ったものを、ひっくり返したりしながら感嘆の声を上げる。

「いやつともは。これがケイタイ、か？　はああ！　こんな薄っぺ

らいので、電話がかかるのかい？　長生きはするもんだなやー」

爽汰は、苦笑いを浮かべながら理沙子兼祖父に言った。

「じいちゃん……嬉しそうなところ悪いんだけど、いいから電話して。っていうか、何言うかわかる？　今から帰るから心配しないでって言うんだ……」

「もすもす？　もすもす、聞こえてますか？　こちら理沙子ですけ

ど、メーデー、メーデー……」

「メーデーって……じいちゃん！」

爽汰の話を聞かないうちに、祖父は通話のボタンを押していたのだ。しかも、無線と勘違いしているのか、とんでもない事を言っ

いる。

「……なんだべ？」

びつくりした顔で電話を顔から離した隙に、爽汰がそれをもぎ取った。

「ちよつ、ちよつと代わつて！ あ、もしもし。石崎さんのお宅ですか？ すいません、僕、理沙子さんと同じ学校の……」

爽汰は、母親らしき電話口の人物に、出来る限り家族に不審がられないように、そして驚かさないように気をつけながら、球場での出来事を説明し、遅くなった事を詫びた。

そして、さつきは理沙子が、倒れた事で混乱して、変な事を言つたようだ、と作り笑いをして伝えた。

なんとか、納得してもらい電話を切った爽汰は、立ち止まったままだったのにも関わらず息が上がっていた。それほど、取り繕うのに必死に捲し立てたのだ。

「はああ。もう、じいちゃん。じいちゃんは今、石崎さんなんだよ？ だめだよ、もすもすなんて言ったら。石崎さんは東京の普通の女の子なんだから」

ぽかんと口を開けて、懸命に説明する孫の顔を見ていた徳二郎は、改めて自分の姿を顧みた。

「……そうか、ワシは今、若いお嬢ちゃんなんだな。道理で体も軽い訳だ」

暢気な様子の祖父の話し方に、一つため息を吐いてから、爽汰は言った。

「ねえ、じいちゃん。さつき、石崎さんと話したって言ってたよね？ 石崎さんが、体を使わせてくれたって」

「んだ」

「今は？ 今は石崎さんと話せないの？ だって、どうやって戻れるか、石崎さんならわかるかもしれないだろう？」

徳二郎は、首を横にゆっくり振った。

「それが、話をするどころか、全くもって見えねんだわ。ワシがお

嬢ちゃんの体に入った途端に、気配も感じなくなってしまった」

「そんな……じゃあ、一体どうしたら……」

自分はどうしたらいいのか、わからないのに、何かをしなければいけない気がして爽汰は落ち着かない。

こんな事になるなんて分かっていたら、野球なんて誘わなかったのに。

後悔をしている場合じゃないのに、思い浮かぶのはそんなことばかり。焦る気持ちを抑えながら、きつと答えがあるはずだと、爽汰は考えを巡らせていた。

駅まではもうほど近い、大通り沿いを歩く二人の目の前で、小さな喫茶店の看板の電気が消えた。閉店らしい。

それを見て爽汰ははっとする。

「やばい。もうこんな時間だ。電車がなくなっちゃう！」

今日のところは、とにかく理沙子の体だけでも家に戻さないと、家族に迷惑をかけてしまう。それに、自分の家でゆっくり寝かせれば、朝起きた時、理沙子に戻っているかもしれないという、僅かながらの期待もある。

東京に不慣れな徳二郎にわかるように、何度も何度も降りる駅を覚えさせ、駅に降りたら、迎えに来てもらうように理沙子の携帯で電話をするように教えた。

爽汰が送り届けたいのは山々だが、爽汰自身も帰る手段がなくなってしまうので、そうせざるを得なかったのだ。

「あああ、じいちゃん、ちゃんと石崎さんの振りできてるかな……」心配することは後から後から湧き出てくるが、今夜は爽汰にできることはもうない。

そう言い聞かせては、また悶々とするのを繰り返し、とぼとぼとした足取りで、夜道を自宅に向かって歩いていった。

ピッピピ、ピッピピ。

ジーパンの後ろポケットに入れてあった爽汰の携帯電話が鳴った。

爽汰は、もしや理沙子に何か問題でもあったのかと、生きた魚を掴むように慌てふためいて、携帯電話を開いた。

電話をしてきたのは、母だった。

『もしもし、爽汰？』

爽汰は、ほつとするのと同時に、両親が祖父に会いに行っていた事を思い出した。

「母さん？　じいちゃん、どう？　やっぱり意識ないまま？」

『やっぱり？　やっぱりって、変な言い方ね。ええ、まだ目は覚めないの。ただ、今は安静にしてるわ。大丈夫よ』

爽汰は、まさか理沙子の意識が徳二郎の体に行ってやしないかと、恐ろしい想像をしたが、さすがにそこまで状況はひどくないようだ。『それより、あんた、まだ外にいるの？　家に電話したけど出ないから。一日家にいるとは言わないけど、留守番なんだから、夜は早めに帰ってくれないと困るのよ？』

「ああ、ごめん。でも、もう今、家のすぐそばだから。……うん、わかった、鍵はちゃんと確認する。……うん。わかったって。じゃね」

大きなため息をついて、電話を切った。

祖父はまだ意識が戻っていない。祖父だと語る理沙子の口からでた話と一致する。

「本当……なのか」

何かの間違いであってくれと、僅かにすぎる希望も薄れる一方だ。どうやら、あれは現実の出来事らしい。

「ああ、疲れた……」

家に着き、誰もいない静かなリビングで一人ソファーに倒れ込む。こんなことなら、初めから祖父の見舞いに行っていればよかったのかも知れないと、自分の行いを悔いてもみたが、すぐにその考えは押しのけられた。同時に爽汰の血が一斉に引いていく。それは別れの理沙子を思い出したせいだ。

「標準語？　ああ、まかせろ。近所の若いもんにも、じいちゃん、

標準語うまいなーって、よく言われんだから」

どんなに理沙子を装っても、その東北弁だけは隠しきれないから、出来るだけ話さないようにしろ、と注意した時の返事がこれだった。無理だ。生粋すぎる。

自分が東北弁を話しているという意識がない人に、標準語が話せる訳がない。話し分ける事なんか出来る訳がない。

きっと今頃、石崎家では理沙子の奇言・奇行に、家族が戸惑っている頃だろう。

今晚、どうにか大事にならずに終わってくれ。

「お願いします！」

神頼みなんて、今までした事のなかった爽快が、初めて手を組んで空に拝んだ。

G・ガール！ 9

二日目 一

自分の部屋ではなく、リビングのソファで、空が白むころにや
つと眠りにつけた爽汰を起こしたのは、玄関のチャイムが鳴る音だ
った。

昨日着ていたままの、Tシャツにジーパンのままで寝ていた爽汰
は、夢と現実の境目で、耳に届いたその音に気づいた瞬間、飛び起
きた。

壁にかかった時計を見ると、七時を五分過ぎたところだった。

「……誰だ？」

両親が帰るにしても、早すぎる。まさか？ いや、さすがに。

焦点の定まらない目を何度もこすりながら玄関に走り、ドアノブ
に手をかけゆっくり開けた。

「なんだってば、まーだ寝てたのか、爽汰」
危なかった。

頭に血が廻ってない時のどつきりは、体に良くない。

あと少し足に力が入るのが遅かったら、後ろにひっくり返ってい
た。

ドアの外には、理沙子が立っていた。開口一言目があれでは、中
身が徳二郎である事は、確認するまでもないようだ。

「じいちゃん……」

新築時以来、久しぶりにこの家に来たと喜んでいる祖父は、どし
どしと音を立てて、中に入って行った。

爽汰は、徳二郎がどうしても飲みたいというので、台所で緑茶を
探しながら、昨夜の話を聞いていた。

予想通り、その訛りの強い話し方を注意されたいが、今好き
な野球選手が東北出身なの、と納得いくようでないような言い

訳で乗り切ったと言う。

しかも、問題はそれだけではなかった。

「それで、どうしても風呂さ入れって言うもんでよ。どうしたもんかなーと思っただけで、変に思われんのもまずいんでねかと思っ
て……」

「入ったの!？」

爽汰は勢い良く、見つけ出した茶筒を床に落とした。

「それがな。何にも覚えてないんだわ」

「ええ!？ 覚えてないって、どういう意味よ」

散らかったお茶っ葉をかき集め、そのまま急須に入れようとしていた手を止めて爽汰は聞き返した。

さっきまで爽汰が寝ていたソファアの上に正座し、勝手に郵便受けを開けて持つて来ていた新聞を広げ徳二郎は言う。

「なーんで、新聞が二冊もあんだ？」

爽汰は、一瞬どきりとしたが、構わず続けた。

「そんな事いいでしょ、どうでも。話の続き！ 覚えてないってどう
いう事？」

「まあ、そんなに興奮すんでねえ。あのな、ワシもしょうがねーと思っただわ。普段通りにせねばなんねと思っつてな。それで、風呂場さ行つて、さあーて裸になんべと思つた所から、記憶がなくなつて、その次に気づいたときは、体も髪もピッカピカで、パジャマ姿でまた風呂場の前さ立つてたんだべ」

湯気の立つ熱いお茶を差し出して、徳二郎の横に腰を降ろしながら、爽汰は眉を潜めた。

「じゃあ、じいちゃんが知らない間に、勝手にお風呂で体も髪の毛も洗つて、拭いて、服まで着てたつて事？ んな、まさか。じいちゃん、気をきかせて嘘ついてるなら、そんな必要ないよ。俺はそんな、その、体とかに興味ない、から。うん」

わざと嫌な顔した爽汰は、ついでに自分の分も入れたお茶にぎこちなく口をつけた。

「ワシも、そうなら嬉しいんだがの。本当なんだわ、残念ながら」
「本当に……本当なの？ その間の記憶だけが、全くない？」

「ずずずと、いい音をたててすすったお茶を、木のローテーブルにゆっくり置き、徳二郎はこっくり頷いた。

「うんだ。そこだけ、ぜーんぜん。ワシは、そんな時だけ、お嬢ちゃんが戻ってきたんじゃないかと思うんだけど、どう思うね、爽快」
ガタッとテーブルの上に置いた湯のみから、数滴のお茶がこぼれた。

「戻って来た？　じゃあ、お風呂に入っただのは石崎さんって事？
いや。でも、もしそうだったとしても、おかしいよ。石崎さんが自分の体に戻れたなら、わざわざまたじいちゃんに体を貸すとは思えない。そのままでもいいじゃない」

ふむ、と相づちを打ってから、徳二郎はこう返した。

「お嬢ちゃんもおなごだべ？　もしも、どうしても見られたくねえっていう、強い思いでよ、その間だけワシの意識を抑えられたって事はねえか？　どうだ？」

「強い思いが……抑えた……？」

爽快は、祖父の言った内容を自分の頭の中で噛み砕いてみる。

祖父の意識は理沙子の体にあっても、理沙子の意識が祖父の体に移った訳ではなさそう。昨晚の母の電話で、まだ祖父の意識はないと言っていたから間違いないだろう。

ならば、理沙子の意識は今どこか。

祖父の言うように、抜け出た意識が自分の好きな所にいけるのなら、理沙子はきっと心配で自分の体を見ているのではないだろうか？

もしそうなら、女の子の理沙子が、いくら年寄りだとしても、知らない相手に裸を見られそうになったら、思う以上の力が出てもおかしくはないのでは……。

「ああ……じいちゃん、そうかも知れないよ。きつと石崎さんは、どうしても耐えられないって強い気持ちで、自分を守ったんだ。じいちゃんの言うとおり、その間だけは、石崎さんの意識が戻った

のかもしれないし、もしかしたら、その間のじいちゃんの記憶を、石崎さんが消したってことも考えられるけど、どちらにしても、それは石崎さんの意思なんじゃないかな」

そう思うと、見える訳もないのに、今日の前にいる理沙子の姿をする祖父の頭上に目が行ってしまう。

もちろんそこには、何も浮いてなど居ないのだが、爽汰は語りかけずには居られなかった。

「ねえ、石崎さん。いるのかな？ もし、そこで見ているなら、安心して。絶対に元に戻るようにするから。俺、絶対石崎さん、戻してみせるから」

それはまるで、すぐ側にいる人に話しかけるような、大人しい声だった。爽汰には、大声なら聞こえるという訳ではないと、なんとなく思っていたのだ。

逆に捉えれば、そういつた限られた状況でだけだが、体に戻った理沙子とコンタクトを取れる可能性があると言う事。きっと、元にもどる為のきっかけもそこで得られるだろう。

爽汰は、自分を納得させるべく、小さく何度も頷いた。

待つてて、石崎さん。

そんな爽汰を、徳二郎は、十代の女の子では絶対見せないはずの、孫を思いやり、誇らしく思う顔で見つめていた。

逆境こそ、男の真の力が発揮される時。

徳二郎は孫の成長を何よりも嬉しく思っていたのだ。

視線に気づいた爽汰が言った。

「ところで、じいちゃん。よく来れたよね、ここまで。石崎さん家からだ、二回も乗り換えあって結構複雑なのに」

「あ」

「あ？」

徳二郎は一つ忘れていた事があった。

「いやっともはー。うーっかり忘れてたわ」

「忘れてたって、何を？」

「ワシ、あつちの家出てすぐんところから、タクシーさ乗って来たんだった」

爽汰は驚いた。

「タ、タクシー!？」

電車で不便と言うだけでなく、直線距離でも相当な距離がある。それをタクシーで来たのなら、料金もそこそこかかるはずだが。

「結構かったでしょう、ここまで」

「んだあ。手持ちがなくなつてよお、外で待たせてあんだ。爽汰、代金さ払つてくんねが」

「おおおい、嘘だろ!？」

ソファアのすぐ横にある窓から、家の前の通りを覗いてみると、運転席で待ちくたびれて居眠りしてしまつたらしい運転手が乗るタクシーが一台、停まっているのが見えた。

「じいちゃん!」

爽汰は怒鳴つて振り向くと、徳二郎はペロつと舌を出し、肩をすくめて謝つた。

「すまねえ」

怒鳴りたい爽汰だったが、見れば理沙子のその仕草は、中身が爺だとわかつていても、腰が砕ける可愛さであつた。

「……はああ、もう!」

爽汰の負けだった。

母が、両親の居ない数日の間に万が一の事があつた時の為に、と仕舞つておいてくれていたお金を、嫌々取り出し、外で寝ていた運転手に渡し、なんとか事なきを得た。

「すまないねえ、爽汰。今度返すっからよ」

爽汰は、母になんと言い訳をしようかとため息を吐きながら、祖父を睨んだ。

「本当だよ? このままじゃ、また引越し屋のバイトしなくちゃならなくなるよ……って、その顔しないで、じいちゃん! 怒れなくなる」

徳二郎は、また肩をすくめて、小首をかしげていた。

爽汰は顔を背けて、少し悔しそうに言った。

「それ禁止だからね。じいちゃんなら、絶対そんな事しないじゃないか、まったくもう」

がつはつはと笑い、徳二郎はソファアの上にあぐらをかいた。爽汰は横目でその姿を見ながら口を尖らせて言う。

「今日の、その、その服はどうしたの。朝着替える時は、じいちゃんのみまでしょ」

今日の理沙子は、白いキャミソールの上に薄いグリーンのサマーニットをざつくりとかぶり、昨日と同じデニムのミニスカートの下には、膝下丈のスパッツを履いていた。

それを聞いた徳二郎は、にやつと笑い、吹き出しそうになりながら言うのける。

「なんだべ、気になるのけ？　どうやって着替えたかが、か？　んん？」

「ち、ちが、ちがうよ！　じ、じいちゃんにしては、センスが良いつて、その、褒めてあげようと思ったんじゃないか！　……　まったく何言い出すんだよ」

明らかに動揺した様子を隠せない爽汰は、真っ赤になっていた。

わつはつはと理沙子の声でもう一度大きく笑い、祖父の口調が響き渡る。

「安心しろ。昨日、風呂から上がったときに、もうこのシミーズとズロースは下に着てたんだ」

「シミーズ……、ズロース……？」

「んだ。だから、なんも見てもいねから、心配すんな。それで、その上に適当に箆笥にあったもん着て来たんだ」

「そ、そう。べ、別にいいけどさ……」

無駄に、書棚の本を出したり入れたりしている自分の挙動に、はつとして、その様子を悟られないように、爽汰は声を上げた。

「さあつてと。じいちゃん、朝飯食べたら、出かけよう」

「ほお。どこさ行くんだ？」

爽汰は、徳二郎に向き直り、真面目な表情で答えた。

「俺、じいちゃんが石崎さんの体から抜け出すには、きっと何かきつかけが必要だと思うんだ。それが何かは……わからないけどさ。とにかく、この家に居てもしょうがないだろ。だから、適当にブラブラして……」

「デートけ？」

爽汰はまたもや、顔が真っ赤になった。

「デ、デートじゃ、ないでしょう？俺はただ、じいちゃんを……！」

「冗談じゃよお」

徳二郎は可笑しそうに目を細めた。

「爽汰の言う通り、ここに居てもなんも変わんねと、ワシも思う。さ、まずは飯だ。若者は、消費が激しんだかな。腹が減ってしょうがね」

からかう祖父を、キッと睨んでいた爽汰だったが、徳二郎のその言い草に、思わず吹き出してしまった。

「……わーかったよ。待ってて、今なんか探すから」

二

ぬか漬けよこせだの、みそ汁はないのかだの、散々なリクエストをしてはみた徳二郎だが、結局爽汰が用意した、トースト二枚と牛乳を胃袋に入れてともかく家を出た。

爽汰の提案で、まずはバッティングセンターに行ってみる事にした。

「なんで、バッティングセンターさ行くんだ？」

二人は海に近い大河の上に架かる橋を渡りながら、その対岸に見える大きなスポーツセンターに向かい歩いていった。

「うん……。この事態が起きた発端は、昨日の球場でしょ。だからなんかバットを打つ音とか、ボールの匂いとか、そういう昨日と似た雰囲気近づいたら、もしかして、と思ってたさ」

川の上空に吹く強い風に思いのほか体を取られ、足踏みをした爽汰は、そこに居るはずの理沙子の姿が見えない事に気づいた。

「あれ？」

そのまま振り返ると、数メートル後ろで、橋の手すりに体を持たれて立っている理沙子を見つけた。

「石崎さん……。じゃないや、じいちゃん、どうしたの。……って、ちよっと！」

来た道を歩み戻ろうとした爽汰の目に写った光景は、その足を思い切り走らせた。

徳二郎は、手すりの上部に飛び乗り、そこに腹部を乗せ天秤のように頭と足でバランスを取っている状態だった。そのまま、外にすこし体重をかければ、大きく深い海のような川へと落ちてしまう。

「おっとっと……」

足をブラブラと浮き上がらせながら、徳二郎は真下に見える川面をわざと見ていた。

駆け寄ってきた爽汰に、その手を想いつきり握られた徳二郎は、特に慌てるようでもなく、トンと地面に飛び降りた。

「何やってんの、危ないだろ！」

怒鳴る爽汰を、驚くような顔で見返す徳二郎は言った。

「何って、おめ。ここから落ちそうになつたらよ、びっくりしてお嬢ちゃん出てくるんでねかと思ってよ」

爽汰は大きく息を吐く。

「もう、じいちゃん……。その、何か試してみようと思ってくれた気持ち嬉しいけどさ、出来たら、一声かけてからにしてくれない？ いたるところで自殺まがいのことされてたら、俺、心臓持たないよ」

徳二郎は、何を思ったか急にしおれた顔をして、涙声になって言った。

「うつつ、爽汰。おめは、そんなにじいちゃんの事心配さしてくれたのか。わかった。爽汰がそんなに言うてくれんなら、じいちゃんも気をつける」

びしつと約束してくれたのはいいのだが、爽汰としては、心配した対象は理沙子の体だっただけに、少々複雑になりながらも頷いて言った。

「まあ、どっちにしても、死なれたら困るし……」

「どっちにしても、ってなんだべ」

「……なあんでもない」

そんなこんなで、二人はスポーツセンターの屋上に設置されている、バッティングセンターに改めて向かった。

午前中の早い時間にも関わらず、全国的に休暇モードに入る時期だけに、数人のお客さんがバッティングマシンで各々快音を鳴らしている。

二つ空いている打席は、一つが初心者用と書いてある六十キロ。もう一つは、大リーガー用と銘打たれた百四十キロの速球だそうだった。

爽汰はその二つを見比べながら言う。

「さすがに、大リーガーは、無理か」

いい音でホームランクラスの球を打ち返し続けている、中年の男性を惚れ惚れ見ていた徳二郎は、口をあんぐりあけながら聞く。

「言つとくが、ワシは野球なんかやった事ねえぞ？ 昔はよくテレビ中継さ、観てたがなあ」

「別にやった事なくても、大丈夫だよ」

そう言う爽汰は、初心者用の打席に入って行った。

「こっちにしようか」

どうするのかと見ていた徳二郎を、手招きする。

「爽汰。ワシは打てなんだよ？」

緑色の防護ネットをくぐり、打席の中に入って来た徳二郎は、もう一度念を押した。

それは問題ではないとばかりに、聞き流しながら、爽汰は後ろのポケットに入った財布から、小銭を取り出した。

チャリン、チャリンと百円玉を二枚投入口に入れると、まっすぐ先に見えるバッティングマシーンが、離れた所で起動音をあげる。

徳二郎はもちろん、爽汰もバットを手に持たないまま、さっそく第一球目が投げ込まれた。その球は丁度二人の間を通り抜け、後ろのネットに当たり地面に転がった。

元来た方向に加速しつつ戻って行くその球を、目で追うものの徳二郎は未だ要領を得ない。

待った無く、次の球が投げ込まれたのを見ながら爽汰はあっさり言った。

「じゃ、当たつてみて」

徳二郎は何か、聞き間違いだと思った。

最近になって、遠くの声がなかなか聞き取りづらいと、歳を感じてきたところだ。

いや、でも今は、十代の若者の体のはず。

「なんだべ？」

爽汰は真剣な表情で、今度はもつとはつきりと言い直す。

「だから。後頭部に、ボール、当ててみて」

「殺す気か！」

広々としたバッティングセンターに、その大声は響いた。定期的に刻まれていた、打音がその時だけはぴたつと止まる程。

「だって！ 石崎さんが意識を失った時と同じ刺激をもう一度与えたら、今度は元に戻るんじゃないかって、普通思うでしょ！？」

「こつたら早いボールに当たったら、意識が戻る前に命が無くなんべ、ばかもん！」

爽汰は、なかなか引き下がらない。

「だから、初心者用にしたじゃない……」

「あのなあ。バットで打つなら、初心者用のスピードでも、頭で受けるとなれば、十分、全盛期の江夏並のスピードだ」

爽汰は、ん？ とちよつと戸惑う。

「豪速球つて事だべ」

今で例えるなら、クルーンと言うべきところだろうが、徳二郎のボキャブラリーだとそうなるらしい。

「まったく……。とんでもねえことを言い出す孫を持つと、驚かされる」

先ほどの川に飛び込もうとした自分の行動は棚に上げ、ひどい事をさせる、などと悪態をつきながら打席から出て行く。

「ちよつと、じいちゃん。待ってよ……」

こちらも、橋では危ないと怒ったくせに、なぜボールを頭に当てるのはいいと考えたのか。

簡単に言えば、似た者同士と言う事なんだろう。

三

スポーツセンターを後にした二人は、目的もなく、なんとなくさつき橋を渡った川岸に下り、歩いていた。

家に居た所で何も期待はできないが、外にいれば解決の糸口に辿り着けると言う訳でもない。

日差しは時間を追うごとに強く照りつけるが、川で冷やされた風が気持ち良く、幾分暑さをしのげる。

二人はどちらからともなく、川のすぐ側まで来て、砂利の上で足を止めた。

「……どうしようか」

爽汰は言った。

徳二郎は、静かに流れる大河を、目を細めて眺めながら黙っている。

しかし、爽汰は口から焦る気持ちが溢れ出てくる。

「ねえ。なんかいい案ない？ 川に飛び込むとか、ボールを頭に当てるとか、そういう危ないことじゃなくて……。そうだな、なんか霊媒師さんとかに頼んでみたらどうか。あ、でも、霊媒師ってどうやって探したらいいんだろ。電話帳に載って……る訳ないよな……ねえ、じいちゃんどう思う？ 聞いているの？」

徳二郎は、何一つ身動きせず、ただ川面を見入っている。

「なんだよ……。ここでいつまで川見てたって、石崎さん戻ってこれるわけじゃないんだよ……」

爽汰はすこし不貞腐れて、その場に座り込んだ。腰掛けた下の大小の石からは、ひんやりとした感触が伝わってくる。

「爽汰」

黙っていた徳二郎が、突然声を出したかと思ったら、何やらかがんで足下の石をまさぐっている。

訝しそうな顔で見ている爽汰を尻目に、いくつかの石を拾っては捨てを何度か繰り返した。

「あつたあつた」

目当てのものを見つけたのか、爽汰ににやつと笑う。

「爽汰、見てろ」

言われるまま、爽汰は祖父が何をするつもりかと見ていた。

右足を一步引き、拾った石を持った右手を大きく横に構えた。

「そりゃ」

そうかけ声をあげ、右手を水平に動かして、石を川に向かって投げ入れた。

「おおお」

爽汰は思わず感嘆した。子どもの頃よく競った、水切りという遊びだ。

その石は、水面を弾けるように、二回、三回、四回、最後にもう一つ、全部で五回も跳ねて沈んで行った。

「じいちゃん、うまい！」

素直な気持ちでそう言った爽汰は、気づかないうちに立ち上がった。

適当な石を手に取り、徳二郎の見よう見まねで投げしてみる。

石は、五メートル程先で、ポチャという音と水しぶきをたてて落ちて行った。

「あれえ」

そう言つて首をかしげると、わっはっは、と徳二郎は笑った。

笑われて、爽汰はムキになって繰り返してみた。

手首のスナップをきかせてみたり、わざと遅い速度で投げてみたり。

何度も何度も石を投げ入れるが、どうやっても二回までしか跳ねさせる事ができない。

「おっかしいなー。俺、これ昔は得意だったような気がするんだけど……」

徳二郎は、もう一度手元の石を川へ投げ入れた。

今度は六回跳ねて沈んだ。

「覚えてねーが、爽快。おまえがまだ、小さな小僧だったころ、よくじいちゃん家の近くの川で、競ったっぺよ。どっちが多く飛ばせるかって」

「……あ」

爽快は思い出した。

四

小学校二・三年頃の夏休みだったろうか。

両親と帰省し、墓参りを済ませて祖父の家に居た爽汰は、早速暇を持て余していた。

「じいちゃん」

久しぶりに会った親戚達と話が弾んでいる両親の事は諦め、爽汰は祖父が昼寝していた畳の部屋にふらりと向かった。

「あれ、爽汰でねが。どうした？」

狭く開けたふすまの間から、遠慮がちに顔を出している孫を見て、祖父は体を起こした。

爽汰は、そろそろと部屋の中に入って来て、祖父の傍らに正座して言った。

「暇。なんかして遊ぼう」

見るからに退屈そうな顔をする孫のその台詞に、徳二郎は破顔する。

「わっはっは。そうか、暇か。わかった。じゃあ、じいちゃんと外さ遊び行くか」

雲が晴れたように、爽汰の表情がぱつと明るくなった。

「うん！」

網と、バケツと、祖母が作ってくれたおにぎりを持って、山を下って溪谷へ向かった。

自然の中でひっそりと続く、地元の人あまり使わないような道を通して、少しずつ聞こえてくる水のせせらぎを頼りに、進んで行く。

背の高さを有に超える、育ちに育った雑草をかき分けたその先には、切り立った崖の麓に、爽汰の存在など一切関係のない時間を刻み続ける清流が流れていた。

「わあ。綺麗な所だね、じいちゃん」

爽汰は喜んだ。

「んだべ。ここはな、じいちゃんが爽汰くらいの歳の頃よく来てた、じいちゃんの秘密の遊び場だ」

「へええ！」

キラキラした目を向ける孫息子に、とっておきの内緒話をするように徳二郎は耳打ちする。

「ここにはな、ザリガニがいんだで、爽汰。イワナもおる。取り放題だっぺ」

「本当に？　ねえ、獲ろうよ、じいちゃん」

「んだ。いくど？」

わああ、と大声で叫びながら、川に飛び込んで行く。

川の水深は徳二郎の膝くらいだが、流れが急で大人でも足をとられる。子どもの爽汰にとっては、まさにサバイバルだ。

「気をつけるんだで、爽汰！」

「うん、大丈夫。あ、ザリガニだ！」

網を使つて、数匹のザリガニを捕らえた。とても大きなハサミを持った一匹を、大将と名付けた。

「大将が、バケツから逃げそうだよ、じいちゃん」

心配そうに、その中を覗き込んでいる。

「バケツの上に、網さ被せておけばいい。あんまり近くで見ると、鼻さちよん切られっど？」

咄嗟に顔を離し、爽汰は自分の鼻を手のひらでゴシゴシと拭いた。そして、言われた通り、今までザリガニを捕らえるのに使っていた柄のついた網を、バケツにすっぽりと被せた。

大将は、今さっきまで脱獄を試みていたが、戦意喪失したのか、途端に動かなくなった。

はっは、と笑う祖父に、爽汰はふう、と息を吐いてから言った。

「網が使えないんじゃ、もうザリガニ獲れないよ、じいちゃん」

「じゃ、次は昼飯だ」

「えー。まだお腹空いてないよ」

確かに昼時にはもう少し時間があるが、徳二郎は違つ、と首を横に振った。

「そうでねえ。これから自分達で、昼飯のおかずを獲るんだ」

「ええ！」

爽汰は、大げさな程に驚いた。

「ばあちゃん握り飯を作ってくれてつから、ここでイワナさ獲つて、焼いておかずにすんだ。どうだ、爽汰。やってみつか？」

爽汰は、ブンブンと頷いた。

しかし、イワナはザリガニのように動きが遅くない。しかも、水の中を素早く泳ぎ回るので、網すらない二人は中腰で長期戦を余儀なくされていた。

「爽汰！ そつちにイワナさ、いたか？」

すでに半ズボンの裾もお尻も濡らしている爽汰は、真面目な顔で答える。

「居るけど、近づいて行くとすぐ逃げちゃうんだよー」

「よし、二人で力合わせんべ」

コクンと頭を上下させ、どうしたらいいかと祖父に仰ぐ。

徳二郎は、近くにある大きめの岩を何個も持って来て一カ所に集め、川の中に小さな堀をつくった。片側に狭く開けた隙間から、イワナを追い込む作戦だ。

「よし。爽汰、上流の方にイワナいるけ？」

爽汰は、素早く目を凝らして探してみる。

「あ、うん。いる、一匹」

「よし。じゃ、一度もつと上流に行つて、そのイワナさ、こつちに逃げるように追いかけてきてくんねが」

「わかった！」

爽汰は、パシャパシャと川の流に逆らつて歩いて行く。

「行くよー？」

爽汰は元気よく声を上げる。

徳二郎は手を振り返して返事をする。

爽快は、わざと水しぶきを上げながら、目当てのイワナを下流へと追いやる。

「よし、いいぞ、爽快」

手前まで来た所で、徳二郎も手伝いイワナの進路を狭めて行く。

そして、最後は二人して両手を川に入れ、徳二郎のつくった堀の中へなんとか入れる事ができた。

すぐに、入り口用を開いていた部分を、用意していた石でせき止めた。

イワナは即席で作られた囲いの中に、見事収まった。

全身がずぶ濡れになった二人は、息を荒げてその様子を確認してから、お互いを見合わせた。

「やったー！」

二人は大笑いしながら、その場で飛び跳ねた。着ている服の、僅かに残っていた濡れていない部分も、それで無くなってしまった。

大はしゃぎしていたら、腹が減るものだ。

イワナは一匹だけだったが、小さな火をおこし、徳二郎が焼いて二人が交代でかぶりついた。

「じいちゃん、これおいしいね！」

「だべ？ 自分たちで獲ったもんだから、尚更だっぺ、なあ？」

「うん！」

爽快は満面の笑みで、おいしそうにイワナにかぶりついた。

徳二郎は、とても嬉しかった。

今時、子どもに遊ばせるといえば、何か買ってこないとだめだと言う。それも、十円二十円ではなく、一つ何千円もするゲームをいくつも欲しがるのだと聞いた。それが普通なのだ、と。

しかし、徳二郎が小さかった頃は、自然が公園で、自然が遊戯物で、自然が遊び相手だったものだ。外にいただけで、何時間でも時間を忘れて遊べたのだ。

今の子どもが悪いわけではないが、せめて自分の孫には、こうい

う遊び方を知ってもらいたかったのだ。

自分の横で、口にご飯粒をつけて笑っている孫は、とても楽しそうにしてくれている。それが、たまらなく嬉しかったのだ。

食事を終えて、膝をかかえ、大将の様子を見ている爽汰に、徳二郎は言った。

「爽汰。これ、出来つか？」

徳二郎は自慢げに、河原の石を川に投げ入れてみせた。

「すっごい！ どうやるの？ 教えて！」

「これはな、実はコツがあるんだよ……」

「……じいちゃん、石だ。石を選ばないといけないんだった」

徳二郎は、ちよつと顎を上げ、やつとか、という表情で見た。

「思い出したか？ 平たい石じゃねーと、だめだで」

そう言っているうちにも、爽汰は良さそうな石を探すのに夢中だった。

「お、これならいけそう」

そう言つて、立ち上がり川辺で構えた。

「見てて、じいちゃん」

「ああ、見てるよ」

何度かフォームを確認してから、爽汰は石を投げ入れた。

ピシャ、ピシャ、ピシャ……。

「三回かよ……」

「わっはっは。お前も衰えたなや」

爽汰は何度も小首をかしげて、おかしいな、と呟いた。

「どれ。じいちゃんの投げ方、よく見とけ」

「うん」

結局昼をとづくに過ぎる時間まで、二人の川辺の特訓は続いた。

五

徳二郎の体が横たわっている病院の一室には、爽汰の母、幸恵の姿があった。

幸恵は、未だ昏睡状態で、意識の戻らない父の顔を、何をするでもなくただ見ていたのだった。

「あら？」

そのとき、幸恵は一瞬、父の顔に変化を感じたような気がした。ちょうど、階下で飲み物を買っていた拓治が戻って来た。

「どうかしたのか？」

後ろ手に病室のドアを閉めながら、拓治は聞いた。

夫の顔を一度振り向き、またすぐに横たわる父に向き直った幸恵は、そのまま言った。

「今、父さんが笑ったような気がして……」

「……笑った？」

拓治も、ベッドに近寄り、その変化を探し見る。

しかし、その目には、先ほどまでと何も変わらない、管を通され痛々しい顔の義父の姿しか映らなかった。

「何も、変わってないように見えるが。本当に笑ったのか？」

幸恵は、すぐに返事をせず、じっと父の顔を見据えた。

そして、ぽつりと言った。

「……そう、思ったのだけど。私の勘違いかしらね……」

乗り出していた体を、椅子の上に戻し、幸恵は、はあ、とため息を漏らした。

その様子を見て、拓治は片手を妻の背中に静かに置いた。

「……疲れているんだろう、幸恵。少し休んだらどうだ？」

幸恵は、小さく首を横に振る。

「大丈夫よ。なんだかね、こんな事になったっていうのに、父さん

の顔見ると、ほっとするのよ……なんででしょうね。父さんが幸せそうに、見えるのよ」

拓治は、ゆっくり幸恵の背中をさすって、言った。

「きつと、楽しい夢でも見てるんだろう」

幸恵は、薄く笑いながら答える。

「きつと……そうね」

その部屋には、一番空高くに差し掛かった太陽が、まっすぐな光を部屋に差し込ませていた。

六

爽汰と徳二郎は、日中散々遊んだり歩き回ったりが、何の変化も起こらなければ、解決策に近づけるような考えも浮かばず、ただ疲れただけだった。

理沙子を家に帰すのが、昨日も遅かったので、今日は早々に切り上げようと、夕日が落ち始める頃には、帰途につく事になった。

この時間なら、帰りの電車も余裕もって乗れる。それならばと、ここから理沙子の家との途中にある、全ての根源になったあの場所、球場へと足を向けてみる事にした。

駅を降りてすぐ目の前に、大きなドーム型の球場が見える。今日は、どこかの企業のイベントが行われていたらしく、昨日のように野球はやっていなかったようだ。

だからだろう、響くような応援団の音や、歓声は全く聞こえず、仕事帰りのサラリーマンの姿が目立つ、都会のオフィス街の様相を見せていて、昨日とは全く違う雰囲気を漂わせている。

それに加えて、たった昨日の事なのに、その間の思いが大きすぎて、一週間前だと言われても不思議に思わない気さえする。

「どう？　なんか、感じたりしない？」

中に入ることも出来ず、昨日と状況がだいぶ違うこの場所では、さすがにいい返事はないだろうと思って、爽汰は聞いてみた。

「なんも。悪いな、爽汰」

「じいちゃんが謝る事無いじゃない。きっと、すぐ元に戻るよ」

爽汰はなんの根拠も、自信もない事で祖父を慰めた。

そう言う事で、祖父だけでなく、自分自身にも暗示をかけてしまいたかったのだ。

爽汰は徳二郎の肩に、軽く手を置いた。

ふとタバコの匂いが爽汰の鼻をつく。

ちらりとその方向に目を動かすと、駅の建物の陰に隠れるように、数人の男達が地べたに座って大笑いしている姿が見えた。服装などからすれば、爽汰とそんなに変わらない年頃のようにも見えるが、全員がタバコを銜えているか、指に挟んでいる。

夏休みになれば、必ずあいつた光景はどこでも見られる。駅の前、コンビニの前、明るい所に群がる姿は、蛾のようだと爽汰は思う。喜んで集まって来ているのは自分達だけで、集まられた方も、それを見る方も、眉をしかめて避けていく。触ろうとすれば、有害な鱗粉をまき散らして威嚇する。

爽汰は正義漢でも、熱血漢でもない。どちらかと言えば、やりた奴は勝手にやればいいと、他人のする事には無頓着でいる。だから、別に彼らのような存在が居た所で、普段ならなんとも思わないのだが、気になるのは、その中の数人が、理沙子の事を見てなにやら話しているように見えるからだ。

実は、中身が田舎育ちの爺だとしても、傍から見れば理沙子は普通の、いや、普通以上に美人の高校生なのだ。

あまりジロジロ見ないように、それでいて警戒しながら、爽汰はこそこそと徳二郎に耳打ちする。

「じいちゃん。そろそろ帰らないと、また家族の人心配させたら申し訳ないから、石崎さん家」

そうか、と徳二郎は同意した。

踵を返して、駅へと歩き出そうとしたときに、爽汰はちらりと彼らと見たが、特に動く気配もないので、ほっと安心した。

「あ、そうだ。じいちゃん。これ」

爽汰は他の事に気をとられ、あやうく忘れそうになった。

そう言つて、持っていたショルダーバッグを開けて、クリアファイルを一冊取り出した。

「なんだべ、これ」

「きつと今日もお風呂入る時、石崎さんに代われる瞬間があるだろ

う？ だから、お風呂場に、これ持って行って欲しいんだ」

それは、濡れないようにビニールのファイルに入れた、メモ用紙とボールペンだった。

「これを持って風呂さ入るんだべか」

爽汰は、頷いた。

「石崎さんが、言いたい事、書いてくれるかもしれないだろう？」

もしかしたら、戻れる方法もわかるかもしれない。でも、その場に俺も、じいちゃんも居る事はできないから、本人にメッセージを残してもらうしかないかなって思ってた」

「はあ、なるほどなー。わかった、今日やってみっぺ」

「うん、お願い」

限られた条件の中で、どうにか元に戻るための方法を見つけようと頑張ってみるしかないのだった。

切符を買い、それじゃ、と改札へ徳二郎を送ろうとしたその時だった。

「ねえええ、お二人さーん」

もう改札口の前まで来ていたし、ここは電車に乗り降りする人でごった返している。まさか、こんな所で何かされるとは思っていなかった爽汰が甘かった。全く注意していなかったのだ。

突然、爽汰と理沙子に両肩をまわしてくる若者、さっきの仲間にいた一人だ。

爽汰も徳二郎も、あまりに大胆な行動に呆気にとられ、されるがままになっている。

「ちよつとこつちで、俺たちとあそぼうぜー」

その場に居たのは、この男ともう一人、側でニヤニヤしている男だけ。大声を出す訳でも、暴力を振るわれている訳でもないのに、誰ひとりとして周りの人は不審がっていない。友達同士だと思われるもおかしくないからだ。

何も抵抗をできないまま、彼らがもといいた駅の明かりの届かない場所へ連れて行かれる。

座っていたのは三人。金髪にしていたり、鼻ピアスをしていたり、あまり健康的ではない夏休みを謳歌しているような奴らだった。

「いらつしゃーい。おお、やっぱり相当かわいいじゃん」

その中の一人、白いキャップをかぶり、右手にビールの缶、左手にはタバコを持った、人一倍体の大きい男が言った。

肩に手を回していた男は、荒々しく爽汰と理沙子を前に突き出し、自分もその輪の中に入って二人を睨みつけた。

キャップの男は、理沙子を上から下までわざとらしく見て笑う。

「ねえ、彼女さあ、これ、彼氏なの？」

徳二郎は答えに困り、となりで同じく立たされている爽汰に目で問いかける。

しかし爽汰には、どっちと言ったほうがこの場を有利にできるのか、すぐにはわからなかった。

取り巻きの四人は、どうなんだよ、黙ってんなよ、などと脅しかけては、せき立てる。

二人ともが答えを言いあぐねていると、どうでもいいけど、とキャップの男が立ち上がり、理沙子の前へと進み寄る。

そして、手に持っていたビールの缶を、理沙子の鼻先に突き出した。

「飲む？」

爽汰は、さすがに黙ってられない。

「ちよつと、何すんだ」

すかさず取り巻きの一人が、襲いかかるように、爽汰を羽交い締めにして後ろから押さえる。

「何すんだよ！ 離せ！」

キャップの男は、爽汰など眼中にないように理沙子の顔を覗き込んでいる。

「飲みなつて。飲んだら帰してあげるからさ、ほれ」

ビールの缶が、鼻先に付いた。徳二郎は何も言わず、ひたすら爽汰の動きを見ている。どうするべきか、指示を待っている。

「止めるよ、その子に何させるんだ！」

爽汰は、締め付けられる腕を取り払おうとジタバタするが、後ろの男は手首をがっちり組んでいるようで、まるで動けない。

「うるせーな。おい」

その声で、取り巻きの一人が立ち上がり、爽汰の真横に立つ。

まだ固く締め付けられている爽汰は、その男を横目で見る。男はおもむろに爽汰の腹に一発拳を入れてきた。

「う……うつ」

「爽汰！」

つい徳二郎は声を上げる。

「こいつ腹筋ねえなあ、女みてえな体してるぜ」

わははは、と揃ってあざけわらう。

爽汰は、まさかパンチが飛んでくとは思っていなかったの、なんの防御もしてなかった。まともにダメージを食らった。

「ほら、彼氏がイキがってボコボコにされるより、俺らの酒に付き合ってくればいいんじゃない？」

キャップの男が笑い声で言う。

しかし、徳二郎は爽汰の様子が心配で、その男の駆け引きの言葉など聞こえていない。

「爽汰……」

腹が痛いというより、身動きが取れない方がきつかった。

しかし、こんなことでノビている訳にはいかない。彼らの魂胆がわかるからだ。

理沙子に酒を無理矢理酒に飲ませるのは、酔っぱらわせることが目的だ。飲んだら帰すなんて言っているが、嘘に決まっている。その後何をするつもりか、そんな事は考えたくもない。

とにかく、自分に意識をむけさせて、その間に徳二郎に逃げてもらおうと考えた。

「げほ……大体、なんで……俺たちが……こんな事されなきゃいけないんだよ」

男たちは、また顔を見合わせて吹き出し、笑う。

「なんで？ そんなの簡単だよ、なあ？」

キャップの男は、やっと理沙子の顔から離れ、爽汰の質問に反応した。意地悪そうな表情で、取り巻き達に目配せしている。取り巻きはニヤニヤするばかり。

「俺たちが女連れてないのに、お前程度の男が女連れて歩いてるなんて、生意気だから、だ」

ぎやははは、と下品な笑いが一斉に湧く。

要は、理由なんてないのだ。ただ、目についた爽汰達に因縁をつけて遊んでいるだけということ。

爽快だつて、世間知らずな訳ではない。遊ばれている事くらいはわかる。もちろん、さつきから腹が立って仕方がないが、いかんせん理沙子に何かがあつたらと考えると、何もできない。

キャップの男は、改めて理沙子へ向き直り、試すように言う。

「どうする？ 飲む？ それとも、もっと俺たちひどいことさせた
い？」

首を引いて精一杯その手を避けようとする徳二郎に、缶のふちを唇に押し付けて笑う。

「暇つぶしなら、俺を殴るなりなんなりすればいいだろう。その子は……家に帰してあげてくれよ」

今度はキャップの男の足が、爽快の腹に飛んで来た。

「ぐうつ……つ」

「うるせええ！ お前なんて興味ねえんだよ。黙つてろ」

今のはさつきのより、だいぶ効いた。胃液がこみ上げてきて、口から出て来そうだ。

キャップの男がまた理沙子にビールを突きつける。

「ほら、どうする？ ぐつといっっちゃえよ、ほらほら」

一步、また一步と後ずさる徳二郎は、とうとうもう一人の仲間に足止めをされた。前も、後ろも逃げ場はない。

「やめろ！ はなせ！」

爽汰は大暴れをしているが、手が届かない。

徳二郎は、かろうじて動く上唇だけで爽汰に聞く。

「爽汰、飲んだらダメなんだべな？」

徳二郎本人なら、あんなビールくらい、あつという間にかつくらうだろう。でも、いくら中身は立派な大人でも、体は未成年だ。

爽汰は苦しいながらも、徳二郎の目を見て、首を横に振る。

徳二郎は、うん、と一度頷く。

「おい、この女訛ってねえ？　だべな、だつてよ？　ダサくねえ？」
馬鹿にするかのようなその物言いに、徳二郎はむっとする。

「訛ってたらわりいか？　なんか迷惑でもかけるのけ？」

それを聞いた男たちは、また笑う。

「のけ？　だつてよお。なんだこの女！　ウケるんだけど！」

「おいおい、こいつら、田舎もんか？　夏休みで都会に上京してきちやっただつて事？　お上りさんかよ！」

得意げに言い分けのその姿は、徳二郎には腹立たしい以外の何者でもなかった。こいつらの言いなりになんかなるものか、と口をきつく閉ざして睨みつける。

しかし、それを遙かに超える怒りを現したのは、爽汰だった。

「ふざけんな！」

周囲数十メートルに聞こえ届きそうな声で、爽汰は叫ぶ。

男達はあまりの声に驚いて爽汰に注目してしまう。遠巻きにいた仕事帰りの大人達も、その声を聞いて立ち止まって見始めた。

爽汰は息の続く限りで、一気に思いのままに吐き出した。

「訛ってるからなんだよ、田舎から来たからダサいだと？　じゃあ自分達はどうなんだよ。え？　お前らのやってる事のほうがよっぽどださいって言うの！　夏休みだから、髪染めました、タバコ吸います、酒飲みますってか？　ダサすぎるんだよ！　昭和の不良か！　？　今時の高校生ならな、夏休みに遊びでＩＴ会社立ち上げてみたら億で儲かっちゃいました、くらいやって今時っていうんだよ！　勉強しろ勉強！　家帰って宿題やれ！」

言い終わった所で、爽汰は崩れ落ちた。
腹が痛い。

知らないうちに後ろで掴んでいた男の腕も解かれていた。
それでも、うずくまるほどの痛みがじわじわと押し寄せてくる。
正直、人に故意の暴力を受けたのは、これが初めてだった。

もっとひどい事をされるのではないかという怖さもあるが、とり
あえず言う事を言えたのは良しとしなければ……。

じいちゃんは。

地面に伏していた顔を、首を上げて探す。

そこに見えるはずの男達のスニーカーの代わりに、革靴がいくつ
か、それに女物のパンプス……。

腹を抑えながら、もっと上まで見えるように上半身を起こす。

「大丈夫かい？ 君」

「今交番に呼びに行ってくれてるからね」

「救急車は呼ばなくて大丈夫かしら……？」

爽汰の周りには、さっきの爽汰の大声の叫びで、十人以上の人が
集まって来てくれたのだ。その様子を見て、あの男達は走って逃げ
ていった。

爽汰は、みんなが心配そうな顔で覗き込んでくれているのを見て、
精一杯の平静を装って声を出す。

「大丈夫です。すいません、ご迷惑かけて。俺は大丈夫ですから」

あちこちで、安堵する声が聞こえ、爽汰はぺこりと頭を下げてみ
せる。

苦しかったので、地面に足を伸ばして座っていると、徳二郎が警
官を連れて走って戻って来た。

「爽汰！ 大丈夫か！」

すぐ側に来て、背中をさする。

「うん、大丈夫。じいちゃんは？」

「ワシは大丈夫だ、何もされてねえ」

警官がその会話をどう思ったかはわからないが、とにかく交番へ

連れて行かれ、色々聞かれる事になった。

「どうもありがとうございました」

爽汰は親切に対応してくれた警官に頭を下げた。徳二郎も一緒になつて礼を言う。

「気を付けて帰るんだよ」

「はい」

結局、爽汰が殴られたところも、暫く座っていたら痛みも無くなつたし、金銭を取られた訳でもなかったので、今回は事件として立件はしない事にした。

「本当に、大丈夫け？」

徳二郎はまだ心配そうだ。

「うん、本当にもう平気。ああ、こんな時間だ、早く帰らないとね」
駅からちかい場所にあつた交番から改札まではすぐだった。

切符を買い、爽汰は徳二郎がちゃんと電車に乗るのを見届けようと、ホームまでくつついて来た。

「ワシだって電車くらいは、乗れっぺよ」

「乗れるかどうか心配じゃないの。乗るかどうかを見てないと心配なの」

ぷつと、徳二郎は吹き出す。

「よっぽど信用ねえんだなや」

爽汰も笑う。

「そりゃそうだよ」

そこに、電車が到着する旨を知らせるアナウンスが聞こえる。

「お、来た」

爽汰は、徳二郎から目を離しその電車の来る方へと顔を動かした。

「なあ、爽汰？」

爽汰は見えてきた電車の正面を見ながら返事をする。

「んん？」

「さっき、カツコよかったで」

「ええ？」

驚いて振り向く。

電車がホームに入って来た。

「さすが、ワシの孫だで」

「はあ？　という顔の爽汰を見やって、徳二郎は電車の中へと進み行った。」

「じゃあな」

「あ」

目の前で閉まった自動ドアに爽汰は慌てた顔を映し出す。

「しまったー」

爽汰は誰もいなくなったホームに一人、残され呟く。

「覚えててくれてるかな、メモ用紙の事……」

携帯電話のかけ方も、受け方もわからない徳二郎には、いくら連絡を取りたくてもその手段がない。

かといって今時、自宅に、しかも異性の家に電話をするなんていう行為は、結婚を認められた仲でもないとならないのではないかと、爽汰は思ってしまう。

仕方がないので、徳二郎には、朝になったら爽汰の家に来るようにということだけは、しつこいぐらいに言っていた。くれぐれも、電車を使えと、忘れずに付け加えて。

しかし、先刻の事件の前に渡したメモの件を、徳二郎は記憶に残していてくれているだろうか。

今、理沙子の体を取り戻すために、少しでもヒントが欲しい。その為の作戦なのだが。

「頼んだ、じいちゃん」

しょぼく来てホームを歩きながら、我が祖父を信じた。

そして、二人はやっとそれぞれの家路につくことができた。

自分の家に着いた爽汰は、徳二郎が今夜も何事もなく過ごしてくれるか、心配でたまらないながらも、夜が空けるのをただ待つしか無かった。

三日目 一

また昨日と同じように、爽汰はベッドではなくリビングにあるソファでうたた寝をしてしまっていた。

そんな爽汰の睡眠に割り込んできた音は、どこかで聞いたようないや、音ではなく、この状況自体にデジャヴのような感覚を味わう。そして、それは何か嫌な予感すら運んできている。

起きたくないような、でも起きないと恐ろしいことになりそうな非常に寝起きの悪い朝を迎えた爽汰は、嫌々体を起こした。

気配を感じて、祖父が来たのかと家の外を覗いて見た。

すると、昨日と同じところに、昨日と同じくタクシーが停まっているのが見えた。

「いや、まさか違うよな……」

言った瞬間、玄関のチャイムが鳴った。

その瞬間、爽汰は体の血液が普段とは違うスピードで駆け巡っていくのを感じた。

こわばった顔のまま、鍵を開けドアを開けると、まんまとその人が立って笑っていた。

「おはよう、爽汰。わりーけんども、タクシー代、払ってくんねが。手持ちがなくなつて……」

「お金持っていないのに、なんでタクシーで来るの！ 家にだってもう、お金ないってば！ 電車で来てって言ったでしょう？」

「あああ、そうだったっけかな」

てへへ、と後頭部を手で搔いて笑っている徳二郎を、呆れるを通り越して、爽汰は感心してしまっていた。

「それで、お代の方はどうして頂けるんでしょうかねえ？ お二人さん」

気づかないうちに、徳二郎のすぐ後ろに、制服をきたタクシーの

運転手が冷ややかな表情で迫って来ていた。

「あ、あの……。えーっとですね、今、両親が居なくてですね……。僕も手持ちがないんです……。よ」

出来るだけ愛想よく言おうと努力するが、しどろもどろでそれどころではない。

ぎろりと睨んでいる運転手は、爽汰の慌てっぷりなど気にせず言う。

「いつ帰ってくるの、親御さんは？」

この二人に練り出すお金などないだろうと踏んだ運転手は、とにかく親に話をしようと思った。

徹夜勤務明けの運転手は、今日の最後の客のせいで、こんなところに足止めされるのを不愉快に思っていた。

とつと詰め所に戻って、家に帰ってゆつくり寝たいのだ。

しかし、目の前にいる若い男女は、何か隠し事でもあるような様子で、お互いを見合っては、きまり悪そうにするばかり。

イライラした運転手は、まだ朝の早い時間の静かな住宅街に響くような声色で言った。

「悪いけど、こっちも商売だからね。代金もらわないとここ動けないんだよ。親御さんが戻ってこないなら、お隣さんでも、友達でもいいから、借りてでも払ってもらわないと！」

玄関先の会話は、朝の散歩をする人や、ジョギングする人達の注目を集めている。

爽汰はこれが近所の噂にでもなったら困ると思えばなおさら、どんどんパニックになっていく。

どうにか切り抜けようと考えを巡らす、焦りが邪魔してうまくまとまらない。

自分の財布にあるのは、確か千円札一枚と、小銭が少し。貯金箱も持ってなければ、銀行に預けているものもない。

「あ……。あの、今は千円しかない……。残りした後で、必ず、絶対持って行きますから。それじゃ、ためですか」

「今払ってもらわないと困る。君ねえ、お金もないのにタクシー乗ったなら、知ってるかい？ 無銭乗車って、立派な犯罪……」

「俺が立て替えますよ。いくら？」

突然話しに入ってきたのは、顔を見た事もない三十代くらいの男性だった。

「あんたは？」

運転手は、後ろに立つその男性を見た。

男性は、色黒でさらっとした茶色い髪の毛に、白いシャツ。胸元にシルバーのネックレスをしていて、最近よく言う「ヤンエグ」みたいなの、おしゃれな感じの人だった。

爽快も、徳二郎も、誰だ？ という疑問符を頭の上に光らせたまま、その人を見ていた。

白い歯を見せながら、その男性は軽い感じで言った。

「俺？ 俺は越智、越智良樹。って、名前じゃないって？ ハハハ。俺、近所に住んでるんだけど、今仕事の帰りだね。ここを通ったら、何やら揉めてる声があったんで、何事かと思ってさ」

なんというか、イケイケというのだろうか。

どこまで真面目に話しているのかわからないような、気楽な感じだ。

運転手は、越智と言うその男の身なりを見て、安心したのか、爽快達にみせていた怒り顔を抑え、薄ら笑いを浮かべながら向き直った。

「まあ、こっちはどなたが払ってくれるんでも、構わないんでね。お宅さんが払ってくれるっていうなら、有り難いですわ。その代わり、うちは責任負いませんよ？ 立て替えてもらったのは、こっちのぼっちゃん達って事でお願いしますよ」

「オッケー」

どこまでも明るく、能天気さえ感じる程、あっさり承諾した。大人達のやり取りに、目と口を開いたまま固まっていた、少年と少女のふりした年寄りとは、とにかく成り行きにまかせて黙っていた。

都内の移動とはいえ、万のお金がかかるというのに、越智という男は財布から出したゴールドカードで特に金額に驚きもせず、支払いを済ませた。

運転手は、どうも、と越智に挨拶をして、自分のタクシーに乗り込み、やっとなりていった。

なんと切り出せばいいのだろうと、思っている二人の元へ越智は笑顔で寄って来た。

「あの……。どうも、本当にありがとうございました」

爽汰はぺこっと頭を下げる。

しかし越智は、自分の髪の毛を両手で前から後ろに撫で付けながら、話しかける爽汰に目もくれず、理沙子の顔から足までを何度も上下して見ていた。

「あのお、今はないですけど、必ず全額お返ししますので……あの、ご近所なら、お金直接持つて行きます」

「いいよ。お金は気にしない、気にしない」

まだ理沙子に目を向けたまま、越智は答えた。

「いや、それは困ります。結構な額でしたし、俺、バイトして稼いだらずく……」

「ねえ、君いくつ？」

「十六です」

即答する爽汰は、その質問が自分に向けられていない事にここでやっとながった。

「いくつ？」

越智は理沙子にもう一度聞いている。

徳二郎は、越智の顔と爽汰の顔を交互に目を動かし、助けを求めた。

爽汰が、思い切り背中を向けている越智に見えないように、口だけ大きく動かして教えた。

「じゅ、十六です」

「おお、女子高生か。いいねー、可愛い。名前は？」

これは知っていた徳二郎は、爽汰が後ろでパクパクしているのを、わかっているとばかりに睨ねつけてから、わざとらしくしおらしい声を出して答える。

「理、理沙子ですう」

尚も顔を上げしげと見続ける越智の視線を避けて、徳二郎は顔を下に向けるが越智は懲りずに目を向けたままだ。そして、越智はこう言った。

「理沙子ちゃんね、オツケ。じゃあ、バイトしてもらおうか」

爽汰と徳二郎は、同時に聞き返した。

「バイト!？」

越智はシャツの胸ポケットに入れていた、携帯電話を取り出してから、言った。

「そそ。さっきのタクシー代、バイトして返してくればいいからさ。いやあ、遠くから見ると、全然かわいいねえ。これなら十分価値あるよ」

「どついう意味ですか？」

爽汰は、越智と理沙子の間に体をねじ込み、存在をアピールしてから言う。

やっと理沙子以外の人間がいたことを思い出したように、爽汰を見て笑って答える。

「返してもらえる見込みもないのに、他人にお金貸すバカなんて居ると思う? 思わないでしょ?」

一瞬にして爽汰の頭の中で警戒音が鳴り出した。

昨日の事もあり、爽汰はナーバスになっている。

「じゃ、じゃあ、初めから、バイトさせようとしてお金貸してくれたってことですか」

あまり爽汰の話には興味なさそうに、携帯を操作しつつ越智は答える。

「まあ、そうだね。なんか朝から揉めてる声が聞こえたから見にきてみたら、なんかかわいい子が困ってるじゃん? かわいい子がト

ラブルに巻き込まれてるー、助けなきゃーってさ。なんちゃって、ハハハ」

そう言って越智は、二人から数歩離れて、誰かに電話をし始めた。どこまで本気なのか。掴めない。

信用してはいけない匂いがプンプンしていると感じてはいるが、決定的に下手に出なくてはならない理由が爽汰達にはある。お金を立て替えてもらったのは確かなのだ。

徳二郎は、何かしゃべって粗がでないようにずっと黙っている。

爽汰は侮られないように、男気を全面にだして聞いた。

「どんな、どんなバイトですか!？」

必死の爽汰を横目に、越智は大きなあくびをしていた。

「ふあ、ふあああ。簡単なバイトだよ。俺のところで作ってるDVDにちよつと出演してもらっただけだから。一日で済むからさ」

爽汰はこんな怪しい話はない、と思っていた。

理沙子の体をジロジロ見て、かわいいだのなんだのと散々褒めたえた上で、DVDに出て欲しいだなんて、絵に描いたようなうさん臭さがする。

恐る恐るだが、爽汰は正直に言った。

「あの、越智さん。なんだか、とても怪しい感じがするんですけど、なんかいかがわしいとかっていうなら……」

越智は大いに笑った。

「ハハハハ! なるほど。彼氏は、彼女を危ない目に遭わせたくないわけか。美しいね、結構な話だ」

笑われた事になんだか腹が立ち、むつとしながら爽汰は立っていた。

「そうは言っても、君たちは俺に借金があるんだよ、わかってる? そんな仕事選んでられる立場じゃないっしょ」

「それは……そうですね、俺ならなんでもやります。だから、そういうのは困ります……」

ほほう、と越智は爽汰の勢いの良さに興味を示した。

「オツケ。そんなに言うなら、彼氏も一緒に来なよ。それで、変なことしないか見張ってればいいっしょ？　それでオツケ？」

爽汰は、徳二郎の顔を一瞬見る。理沙子の表情から読み取れるのは、上等だと言わんばかりの戦意むき出しの徳二郎の意思だ。

それにしても、祖父の性格からして、この状況でよく何も言わずに黙っているものだ、と爽汰は感心していた。ここで、訛った言葉でとんちんかんな事を言われても、爽汰に庇いきれるかどうか自信がなかったので、丁度よかったと言えば、そうなのだが。

爽汰は、何かあればとにかく逃げ出そうと心構えし、越智に返事をした。

「……わかりました。一緒に行きます。それで、どこに行くんです？　今日一日で終わるんですね？」

越智は、につこり笑った。

「終わる終わる。っていうか終わってくれないと俺が無理。死ぬ、眠くて。あ、来た来た」

爽汰に話していた越智の視線が、瞬間遠くに向いたと思ったら、一台の黒いワンボックスカーが向かって来ているところだった。

「これ、俺んとこの、スタッフ。今日の撮影はね、山。山の上行くから、早いとこ用意よろしくー」

追い立てられるように、携帯や残り僅かしかない財布を取りに一旦家の中に戻った。

越智は、早速車に乗り込み、ちよつと寝ると言って車のドアを閉めた。

爽汰の後について、二階の部屋まできていた徳二郎が、後ろを振り返り、誰にも聞かれていない事を確認してから言った。

「なあ、爽汰。DVDって、なんだっぺ？」

爽汰は、漫画のようにずっこけてみせた。

「なんだよ、それがわかんないから黙ってただけかよ」

そう言われても、愛想笑いしかできない徳二郎はその先を聞いていた。

「ビデオの事だよ。ビデオはわかるでしょ？　そのちょっと進化したやつで、何かを撮影するんだって。でね、それに、石崎さんに出演してもらいたいんだってさ。石崎さんがかわいいから、あの越智って人、俺たちのタクシー代金肩代わりしてくれたんだって言うてるんだ」

あーあ、と納得した様子で徳二郎は頷いて、何かに引つかかったように爽汰に聞いた。

「……出演って、おい、爽汰。ワシは演技なんてできねーよ？」

それを聞いた爽汰は、さすがに怒って言った。

「じいちゃん。なんでこうなったか、わかってんの。じいちゃんが、金がない事忘れてタクシーなんか乗らなければ、じいちゃんが出来ない演技をする事もなかったんじゃないんですかね！？　え！？」
ずりずりと責め寄られ、壁に背中をぶつけた徳二郎は、その場は落ち込んだような顔を見せた。

そこで外の車がクラクションを鳴らして、急かしているのが聞こえた。

爽汰は、窓から外を覗いた。黒いスモークの張られた車内は見えないが、もう行かないとまずいだろう。

「とにかく、行こう。どうせ、今日どこかに行く予定がある訳でもないし。石崎さんに何かあるようなら、俺が絶対阻止する！」

力拳を右手で作って、小さく掲げた脇で、こちらに嫌ったらしく舌を出している徳二郎の顔が視界に入る。

爽汰は、ぎろつと睨む。

徳二郎はびくっとして、階段を走り降りて行く。

「たかだかあんくらいの金で、うるさい孫だべなあ！」

「なんだと……こら、じいちゃん！」

爽汰は追い掛けて駆け下り、残り五段あったところから滑って転げ落ちた。

「まったくもう！」

爽汰は癇癪を起こした。

二

車に乗り込むと、意外に広い車内には運転してきた男性と越智だけしかいなかった。

運転席に座っている、丸刈りで、越智よりは五分若そうな男性が言った。

「越智さん寝ちゃったんで、勝手に現地向かいますね」

「はい……お願いします」

そう言つと、丸刈りの男はエンジンをかけて車を走らせた。

一番近くにある入り口から、首都高速に乗った。そこからいくつかの出口を通り超して、分岐で群馬方面に向かう道路に入った。県境を超えて少し走っていたところだった。

徳二郎は、出発してすぐに寝入ってしまったが、爽汰は窓から見える景色がいくら変わって行こうとも、まったく目に映らなかった。時間にしては、家を出てまだ一時間程度だが、その間、寝ている越智はもちろん、一言も誰も言葉を発しない空間に、爽汰は耐えられなかった。

思わず爽汰は、口火を切ってしまう。

「あのお……」

ほんの僅か間があつて、運転席の男は答えた。

「はい？」

「山に行くつて、聞いてるんですけど、どこに行くんですか？ まだ結構ありますか？」

男は、まっすぐ前だけに目を向け、あまり感情を現さずに言った。
「群馬のスキー場の、武尊っていう所です。混んでなければあと一時間くらいだと思いますけど」

そうですか、と爽汰は一旦話を止めた。

しかし、またすぐに爽汰は落ち着かなくなる。

武尊という場所は、爽汰は知らなかったし、それが本当に必要な情報でもなかった。聞いてもいいものか、と思いながらも、それは口を割って出て来てしまう。

「あの……」

「はい？」

さつきとまるで同じ返事を、男はした。

この男が、どういう人物かわからないが、黙っているよりはマシだと、聞いてみた。

「もし、知ってるなら教えて欲しいんですけど。これから撮りに行くDVDって……どんな、DVDですか？ あの、どんなって、あの、そう言う意味じゃないんですけど……」

できるだけ気を悪くさせないように、と言葉を選んでいるつもり
の爽汰だが、それが逆に話をややこしくさせてしまっているようだった。

「……」

丸刈りは、聞いてはいるのだろうが、その質問に答えはしなかった。

その沈黙が、ますます爽汰の不安を煽る。

言えないような事って事か？

爽汰は変な汗が出て来た。

このまま、どこかに連れて行かれたまま帰してもらえなかったらどうしよう。もしも理沙子の身に、万が一の事をされたらどうしよう。

俺が阻止する、だなんて大見栄きつたのは良いが、高校生としては標準、いやそれよりちょっと劣るくらいの爽汰の体格と体力で、この大人二人に敵うのだろうか。

いや、自信があるうとなかろうと、守るしかない。万が一なんて、起こさせない。

ジェットコースターのように、上下する意気に自分でも疲れてくる。おもわずため息も出てしまう。

「……はああ」

黙っていた丸刈りは、バックミラーに映る爽汰の挙動を見て、容易にその不安を読み取った。そして、前置きなく話し始めた。

「今日くるはずだった女優さんが、突然キャンセルになったんですよ」

相手にされていないと思っていた爽汰は、突然話かけられた事に驚いた。

「え？」

「彼氏にフラれたとかで、もう仕事辞めたいって。それも昨日の夜遅くになって言ってきた。それで今日の朝方まで、他の女優さん探してたんですけど、誰もつかまらなくて。自分もずっと手伝ってたんですけど、もう朝になっちゃって。仕方が無いから今日の予定の撮影は諦めようって事で、家に帰ってた途中に、越智さんからいい娘が見つかった、って電話が来て」

丸刈りは、相変わらず無感情ではあるが、寝ている二人を起こす事のないような落ち着いた声で淡々と話した。

「それが、僕たちの事だった……ってことですか？」

丸刈りは、まっすぐ前を見たまま頷いた。

「そうみたいです。本当は、男優さんの方はまだキャンセルの連絡してなかったんで、連れて来ようと思えば出来たんですけど、朝一で断りも入れておきました」

「ん？」

待てよ、と爽汰は思った。

「共演者の方、断っちゃったんですか？ ……なんでですか？」

「越智さんが男優も見つかったからって事だったんで」

ほお、と爽汰は考えながら聞き返した。

「あのお……それって、誰の事ですか？」

丸刈りが答える。

「あなた、じゃないんですか？」

久しぶりに車酔いしたのだろうか。なぜこんなに胃液が出てくる

のだろう。昨日の後遺症だろうか。

ぜひ、今の話は丸刈りの勘違いであってくれと、爽汰は願った。

かえって聞かない方が良かったかもしれない情報を仕入れた爽汰を乗せた、そのワンボックスカーは順調に走り、予定通り一時間後には、とあるスキー場の前に停まっていた。

爽汰は夏のスキー場に來た事がなかった。見渡す限りに広がる緑の景色。冬であれば、真白に敷き詰められる雪の代わりに、今は芝生が夏の暑さを栄養に変えている。

この時期は、グラススキーもできるが、山の頂上付近までリフトで上って、この景色を楽しむこともできるらしい。

しかしこんな爽やかな風景でさえも、暗雲立ちこめる爽汰の気持ちをばらしてはくれない。

すつきりした表情になった越智は、ここを管理している事務所に行ってくると言って、消えて行った。

丸刈りは、車のバックドアを開けて、機材を取り出して組み立てたりしている。

同じくすつきりした様子の徳二郎は、両手を上に存分に伸ばしながら気持ち良さそうに言う。

「んんん、はあ。東京とは、空気が違うな」

「そうだね……」

具合の悪そうな爽汰に気づいた徳二郎は、爽汰の顔を覗き込む。

「なんだべ。車にでも酔ったか？ それとも、ああ、わかった、腹が減ったんだべ？ ワシもだ。腹ぺこだなや」

ここまで来ても、一体なにをさせられるのか聞かされていない事で、不安が膨らみ続けている爽汰には、祖父の無神経な話に相づちすら打てなかった。

「……よっぱど腹が減ったんだか、顔色が良くないで」

「少し、黙ってよ、じいちゃん」

徳二郎は、つまらなそうに口を尖らせた。

そこに、越智が戻ってきた。睡眠を取り元気がでたのか、走っている。

「おい。コレ食ったら、早速行こうか」

そう言っで差し出したのは、あんぱんと飲み物が人数分入ったビール袋。きつと事務所の近くに売店でもあつたのだろう。

楽しく歓談するような面子でもないの、その場に立つたまま、とりあえず食事を終え、四人はスキー場の中へ入って行つた。

三

「とにかく、上行こう、上」

ろくな説明も受けないまま、爽汰と徳二郎はリフトに乗せられて、山の頂上近くの小さな山小屋へ来ていた。

ここは、スキー場の職員が点検の際などに使うところらしく、飾り気のない木の机と椅子が一つずつあるだけで、他はリフトの操作板と、何かの計器が置いてあるだけだった。

しかし、冬の寒さを凌ぐためなのだろうか、窓も小さく、中は薄暗く、空気も湿っぽい。とても健全とは言えない場所のような気がする。

まさかここで撮影を？

さすがにここで聞かねばいつ聞くのだ、と爽汰は越智に詰め寄った。

「あのお！」

手に持った台本のようなものから顔を上げて、越智は爽汰を見た。「ん？ なに？」

爽汰は、左手で越智の背中を小屋のドアの前まで押して、右手でドアノブを掴み、二人を残して外へ出た。

「なに、どうしたの」

越智は、聞いた。

「まだ、聞いてないです。これから、どんな撮影するのか。そろそろ教えてもらわないと」

「ああ、そうだった？ そうか、俺、自分で問題解決したから、安心しちゃって、説明すんの忘れてたっけ。ゴメンゴメン」

あっけらかん、と言いのける越智を、爽汰はじつと見返して返事を待つ。

内容によっては、爽汰も覚悟がある。

ごくり、と喉が鳴った時、越智は言った。

「カラオケのイメージビデオなんだけど」

「カラ……オケ？」

「そそ。ほらー、カラオケ行くと、テレビに歌詞が映るでしょ？
そのバックでさ、なんかダサイイメージビデオ流れてるじゃーん。
アレアレ」

爽汰は体中から力が抜けて行く気がした。

「……そ、そうなんですか」

「俺、映像監督なんだよね。こんな仕事はあんまりやりたくないんだけど、ま、仕事は仕事だからね」

そんな仕事に付き合わされるこっちの身になってから物を言えと思うが、そこはなんとか抑えた。

とは言うものの、言い方はともかく、想像していたようなかわしいものではなかったようで、爽汰は心底ほつとした。

カラオケのイメージビデオと言えば、なにやら無駄に走ってみたい、踊ってみたい、どんな曲にでもなんとなく合うような、抽象的な雰囲気だ。

カラオケを歌っている人は、歌詞ばかり見ているものだから、誰が出ていようが気にする人も少ないだろう。

一つ安心したところで、もうひとつ。

「それと、あの、俺も出るんですか？ その、イメージビデオに……」

どこをバックに撮影しようかと周囲を見回していた越智は、きよるきよるしながら答えた。

「そうだよー。何？ 嫌なの？ 君が言ったんだよ？ 一緒に行きます、なんでもやりますって」

「まあ、そうですね……」

考えてみれば、いつか元に戻った理沙子に、この一件を謝る時が来たとしても、ここで自分だけ保身に走ったと思われるのも嫌だと思った。

「やってくれるでしょ？」

一瞬躊躇したが、爽汰は、はい、と言って答えた。

こうなったら、とつと済ませて、早く家に戻りたい。こんな山奥で、ビデオの撮影なんかしている場合じゃないんだ。

この思いだけで、爽汰はやる気を奮い立たせたのだった。

爽汰の心配事など、まったく知る由もない徳二郎は、ただで気持ちのいい場所に連れて来てもらったと、ご機嫌だった。

小屋を出て、まずは爽やかに晴れわたる空の元、理沙子一人で撮影に入った。

「理沙子ちゃん、じゃ、今度ははにかむように笑ってみて。そう！いいな、かわいい！そうそう、それで今度はにっこり。わあ、天使みたいよ」

カメラを抱えた越智は、どこからそんなに褒め言葉が産まれてくるのかという勢いで、理沙子の容姿を褒め続けている。

理沙子の周りを近づいたり離れたたり、左右に回ったりもすれば、後ろから追いかけたりと、躍動的な映像を撮っているようだ。

褒められていい気になっているばかりか、まさに悪のりしている徳二郎は、言われるがまま、大げさな笑顔をレンズに向かって大盤振る舞いしている。

「こうか？ もっと、こうか？」

昭和のアイドルみたいに、後ろに手を組み首を曲げて肩越しに振り返ったりしている。

「いいねー！ 理沙子ちゃん、本当に素人？ うまいなー！」

今日は、白いキャミソールの上に青と白のボーダーのワンピースを着て、足下には、白のスパッツ。山の上でマリンスラックとは、少々違和感があるが、それもあの笑顔で帳消しだ。

こんなに可愛い理沙子の中身が、実は白髪のじいさんだなんて、知らない方が幸せだ。

爽汰だって、これが本当に理沙子であるなら、一緒になって褒め

言葉の合いの手でも入れていただろう。

しかし、見えているうちに、若さ溢れる理沙子の顔が、どんどん白髪爺の顔に移り変わって見えてくるのを止められないのだ。

溜まらず自分の手で、理沙子を見ていた目を覆う。

見ている事もままならなくなった爽汰は、少し離れたところに腰を降ろし、向かいに見える大きな山の斜面をぼんやり見ていた。

繁々と見渡す限りびっしりの木々の緑で埋まったその景色は、ほんの少しの間、爽汰に安らぎを与えてくれた。

暫くした頃、遠くの空に黒い雲が迫っているのを見つけた。

「あら……、雨になるかもな」

夏の天気によくある、夕立の類いかもしれないな、と爽汰は思っていた。

そこに、丸刈りが歩いて呼びに来た。

「そろそろ、出番だそうです。リフト乗り場に居ます」

その声で現実に戻された爽汰は、自分こそが爺のように、よいしよと腰を上げた。

丸刈りの後を歩いて行くと、上って来た時と同じリフトの前に理沙子と越智が待っているのが見えた。

「はい、お待たせねー。じゃ、今度は二人でリフトに乗って降りて来て欲しいんだ。俺たちが君たちの乗る一個前のリフトから撮影するって感じでー」

ここのリフトは、一つのリフトに四人程乗れる、幅の広いタイプだ。

「声は聞こえると思うから、乗ってから指示するんで、よろしくね」「はい」

爽汰と理沙子は、素直に返事をした。

ここまでは、爽汰からみても、理沙子自身にとっても、ただビデオを撮影されているだけで、特別嫌な事をされている訳ではない。この調子で終わってくれるなら、きっかけはなんであれ、きつこの様子を見ている理沙子も、そんなに悪い気はしないのではないだ

ろうか。

こつそりと見上げた理沙子の頭上に、爽汰は苦笑いを浮かべてみせた。

「あ」

丸刈りが何かを言ったと思ったら、空を見上げていた。それにつられて他の三人も首を上げる。

それは、さつき爽汰も見えていた、黒い雨雲の姿だった。

「うわ。雨降る前に、さつさと撮影終わらせて、下行こう」

真上の真つ青な空とは対照的に、その黒い雲は、明るい光をすっかり遮断しながら、浸食を進めている。

徳二郎は、爽汰にしか聞こえない声で、ささやく。

「ありゃ、大雨さくるで」

「え？」

聞き返したときには、もう知らん振りで、徳二郎はスタスタと歩いて行ってしまった。

とにかく、こんな所に取り残されても良い事はない。早く終わらせてしまおうと、その事に意識を向けた。

四

カメラを持った越智と機材を抱える丸刈りは、回って来たリフトに乗りこんだところだった。

「それ！ 次のそれに乗って、乗って！」

越智達の次のリフトに急かされて、爽汰と、徳二郎はなんとか収まった。自動的に上から降りてくる安全バーを掴む。地面から足が離れ、宙に浮くのを感じた。

山頂へと上る時もそうだったが、このリフトの全長はとても長く、しかも景色を見せる為に、ゆっくりと動いているせいで、乗っている時間がとても長い。

このリフトの上で撮影をしようと言い出した越智も、この長さと同間があればこそだったのだう。

リフトが少し進んだところで、早速越智の指示が飛んで来た。

「おっけ。じゃあ、これからカップルの設定だから、もうちょっと二人、くっついて座って」

「カ、カップル！？」

爽汰はその言葉に過剰に反応した。

「ただの設定の話だっぺ？ このスケベが、はっはっは」

大声でなければ越智達には聞こえない事を良い事に、言いたい放題だ。

「わ、わかってるよ……」

足場がないリフトの上では、座っている位置を少し移動させるのも、そこそこ大儀だ。

じりじりと腰を滑らせ、なんとかカップルのように見えるくらいにまで近寄る事ができた。

中身は爺だとわかってはいるものの、僅かに触れ合う腕と腕の感触は、理沙子のものである。

爽汰はこの時点で、心臓の動く音が自分にも聞こえるほど、ときどきしていた。

球場で、一昨日隣同士に座っていたし、偶然ではあるが、手が触れる事くらいはあったが、そのときはなんて事なかったのに、たったの一言、「カップル」というお題目が付いただけでこの気持ちの変わりようは、爽汰自身もびっくりだった。

本当の理沙子には感づかれたくないの、このドキドキが外見にでてないといいな、と爽汰は思っていた。

「じゃ、カメラ回すんで、顔見合わせて、仲良くおしゃべりしてる感じ、まずくださいーい！」

越智の使う、どこことなく業界人っぽい言葉を聞くと、不思議とこちらもそれらしい気分になってくる。

「どれ、楽しそうにしてみっぺ」

この訛りのお陰で、目の前にいる可愛い女の子は、理沙子ではなく徳二郎だと思いださされる。それは、いまだに心臓が落ち着かない爽汰にとっては有り難いことではあった。

「そうだよ、これバイトだもんね。えっと、笑ってないと仲良く見えないよね」

ぎこちない笑顔で、理沙子の顔を見つめたまでは良いが、何を話したらいいかが全く思いつかない。

「じいちゃん、何か話してよ。俺、何にも思いつかない」

徳二郎も、さすがに笑い疲れてきたのか、引きつった笑い顔を作るのに必死のようだ。

「なんだべ、おめが何か面白い事さ、言ってくれねば、じいちゃんはまだ笑えねーよ」

「そんな、面白い事なんて普通、言おうと思って言えるもんじゃないでしょうが」

「そつたらおまえは、ずっとしかめっ面してたらいいべさ」

「なんでそんな意地悪言うんだよ……」

「ちよっと！」

撮影されている事をすっかり忘れて言い合いをしていた二人を、ずっと見せられていた越智は、怒鳴りつけた。

「喧嘩すんのは後にしろー、ばかー！」

「……喧嘩すんのは後にしろー……」

「だから素人は嫌なんだよー！」

「……だから素人は……」

越智の怒っている声が、山にこだまして数秒後に返ってくる。

それを聞いていた爽汰と徳二郎は、つい顔を合わせて笑ってしまった。

「ぶはは」

「わっはっは」

怒るのに一生懸命になっている越智を、丸刈りが腕でつつんと気がつかせ、とてもいい笑顔で笑う若いカップルを撮影する事が出来た。

そんな事をしていたらようやく、長いリフトも半分まで降りてきていた。

どうにか自然体で撮影される事にも慣れてきたその時、徳二郎がクンクンと鼻を利かせる仕草をした。

「どうしたの、じいちゃん」

「すごいのが来そうだなや」

何の事だ？　と思っていると、爽汰の鼻にも覚えのある匂いが届き始めていた。

「あ。これ、雨の匂い」

見れば、さっきまで明るかった空が、まだ日が傾く時間でもないのに、暗くなり始めて来ている。

徳二郎は、カメラを向けている越智達に、その雲を知らせようと指で空を指してみせた。

それに気づいた二人は、空を見上げ、怪しい雲行きに眉をひそめる。

この長いリフトの移動時間と、あの雲の動きの早さから考えると、

もう一度リフトに乗り直す時間はなさそうだ。それは、越智達にも、その後ろに乗る爽汰達にも想像できる事であった。

「おおーい、じゃ、次に最後のカット撮っちゃうから、よろしく頼むよー?」

最後と言われて、気が楽になった爽汰は元気に答える。

「わかりましたー!」

次は何を要求されるのか、と指示を待っている爽汰と徳二郎は、越智の言葉を聞いて目をむいた。

「それじゃ、ゆっくり見詰めあってからー」

越智が大声で叫んだ。

「その後、キスで終わりねー」

「キス!?!」

「ちっす!?!」

爽汰は、お腹の前にある安全バーに両手をかけて思わず乗り出した。

「無理だつて!」

「爽汰! 危ねえつてよ」

「……そんなの無理に決まってるじゃん。ねえ、じいちゃん?」

ひきつった顔をカクカクと徳二郎に向けた爽汰は、一気に顔が真っ青になっていた。

「ワシも、かわいい孫とはいえ、男とちっすはなあ……」

「……」

徳二郎の言う事には、いささか問題があるようにも感じるが、同意してもらえたのは、よかった。

「出来ないって言ってよ、じいちゃん……」

「こういうのは、男が言うもんでねえが?」

「じいちゃんだって男だろう」

「今は、うら若き乙女だつぺよ」

「都合の良い時だけ乙女になるなんてずる……」

「ちよつと!」

怒鳴る声が前方からまた聞こえた。もちろん越智の声だった。

「雨がもうそこまで来てんだから、さっさと終わらせないと、帰れなくなるよ？　それが嫌なら、巻きでよろしくたのむよ！」

爽他は何とか聞こえる様に声を出してみる。

「あのお！　……キス……キスつてのは、ちょっと……そんな事するなんて聞いてませんよ？」

「言っていないから、聞いてないだろうよ！　いいから早くしてくれ！」

越智はかなり苛立っているようだ。

「……でも……」

はつきりしない言葉に発狂しそうな越智の横でじつと構えていた丸刈りは、何も言わずに迫ってくる真つ黒の雨雲を見ている。

「そんな事言われても、できないよ……」

爽汰は焦燥感で一杯になって、落ち着かなくなっていた。

徳二郎は、そんな悩める孫息子を横で見えていて、自分の胸まで痛くなってきてしまった。

「わかった。これもそもそもワシが原因だ。ワシが責任取るから、かるーく、ほんのかるーくちっすして、終わらせっぺよ」

「責任つて、じいちゃんがどうやって責任取れるんだよ」

こんな会話をしている間も、越智の怒号は絶え間なく飛んで来ている。

「元に戻ったら、ちゃんと謝りにいくべさ」

「謝りつて……適当な事言っなよ」

そこで何か大きな音がして、前後のリフトに乗る四人は一斉にびくつとした。

「なんだ……？」

そう言うのが早いから、今度はまたさらに大きな音が一帯に鳴り響く。
「雷……か？」

それは、とんでもなく大きな木版を、真っ二つに折る時のような、バキバキという大きな音だった。

それが何の音かがわかった瞬間に、遠くで光る稲妻が見えた。

知らないうちに近づいていた雨雲は、すぐ向かいにある山の上で、その脅威を見せつけている。

「おい！」

越智は叫んでいた。

「リフトから降りる前に雨が来ちまう。そしたら、もうカメラも回せないんだ！ 頼むから早くしろ！」

急かす大声、もう視界に入ってきて来ているリフトの昇降所、黒い雲に飲み込まれる寸前の空。

普段の爽汰なら、入ってくる全ての情報を足し算しても、理沙子にキスをする為の理由には不十分だと思ったはずだ。

しかし、爽汰にかかるプレシャーはその計算式を狂わせていた。

もう、終わらせないと！

爽汰の焦りは、冷静な考えを遠のけた。

「ごめん、石崎さん！」

爽汰は、徳二郎の肩を右手で力強く掴み、無理矢理自分の方に向き直らせた。

「ん……！？」

徳二郎の、いや理沙子の口目がけて、目をつぶったままの爽汰の顔が素早く近づいた。

「いやあ！ 止めて！」

「……え！？」

驚いた徳二郎は、力一杯に体をねじらせて、鼻の先にあった爽汰の顔を避けてしまった。

「わああ！」

爽汰の体は、体重をかけた先のものが無くなってしまい、前のめに倒れかかった。

そして、リフトの上で急に体重が移動したせいで、バランスが一気に崩れる。

爽汰は、椅子部分と安全バーの間に足の方から滑り出してしまっ

た。

「爽快！」

腰から下がリフトから落ちた状態で、爽快は間一髪、手すりに右手を絡ませた。

「おい、大丈夫か！」

前方で見ていた越智と丸刈りも、口を真円に開けてその様子を見ている。

しかし、その問いかけに返事をする余裕はなかった。

ステンレスの手すりを握った右手だけで、体重を支えているのは、無理がある。

「爽快！ 待ってろ」

リフトは片方に大きく傾いた状態で、ただでさえ危険な状態だ。

それでも徳二郎は急いで爽快の腕を掴もうと、安全バーの下に体を潜り込ませた。

「……捕まれ！」

両手で握ってくれている徳二郎の腕を爽快の左手は、なんとか掴めた。

「……よし、離すんでねえぞ」

徳二郎も、相当無理な体勢だ。男一人を支え続ける事も容易ではない。

気持ちは体自慢の徳二郎でも、腕力そのものは理沙子のものだ。そうそう耐えられるはずもない。

それでも、絶対に離さないと、徳二郎は思った。

「だめだ……右手……が、もう……すべる」

「頑張れ！ 離すな！」

このままもしも、手を離したら、もちろん数メートル下に真つ逆さまだ。

「絶対に……離すんでねえ」

「じいちゃん……だめだ」

爽快の手のひらは、途絶えてくる力と汗の滑りで、既に指の第二

間接で支えているだけだった。

「やば……い。もう……無理」

「爽汰！」

その次の瞬間、爽汰の右手は、手すりからとうとう離れた。

「わああ」

爽汰と、その体に引きずられるようにした徳二郎は、真下に落ちこちて行った。

越智と丸刈りの叫び声が、その後を追ったが、無情にもリフトはその距離を離れて行くだけだった。

五

爽汰は、瞼に落ちて来た雨の刺激で目を覚ました。

「い……ってえ」

腰のあたりにじんじんと痛みを感じている。

爽汰はフラッシュのように、自分がここにいるいきさつを思い出した。

「いたたたた」

あれだけの高さから落ちたわりには、思いのほか上半身を起こす事は、それ程には辛くなかった。芝生がクッション代わりになってくれたのだろう。

見ると、肘や腕にかすり傷や切り傷のようなものもあるが、今まで体験した事の無い痛みではない。

爽汰は、自分の居場所を確認した。

すぐ上に見えると思ったりリフトは予想外にも少し離れた所に見える。

スキー場だけあって、傾斜で転がってきてしまったのだろうか。綺麗に整えられた芝生の上ではなく、コース外の林の中にいた。大きな木がその青々とした葉を傘代わりにしてくれていたので、意外に体が雨ざらしには無っていなかったのは幸いだ。

その時、爽汰ははつとした。

「じいちゃん？」

そう言えば、近くに理沙子の体が見当たらない。

爽汰は痛む腰を抑えながら、真横の大木を支えになんとか立ち上がる。

「じいちゃん？ じいちゃん、いる？」

あまりよくは覚えていないが、手すりを持つ手を離れた時、自分の腕を掴んでいてくれた祖父の、理沙子の手は、ずっと離れなかつ

たような気がする。一緒に落ちてしまったなら、怪我をしてしまった可能性もある。

それとも、それは自分の思い違いであればいいけど、と思いながらその場の辺りを少しずつ動いてみた。

「じいちゃん？」

ガサガサと草をかき分けて進む。

雨は強くなる一方で、少し木の陰から外れると一瞬でびしょぬれだった。

「じいちゃんいるの？」

そう言ってもう一步出そうとした足先に、何かが当たった。

「じいちゃん！」

もう少しで踏みそうになったのは、泥だらけで寝転がる理沙子の体だった。

「じいちゃん、じいちゃん！」

声をかけても全く動く気配がない。だらりと垂らした腕には、傷で血がにじんでいる。

爽汰は最悪の事態を瞬間に想定した。

まさか。

ゆっくり理沙子の鼻の下に指を近づける。

スー、と息を吐いているのを感じて、爽汰はまずほっとする。

「良かった」

しかし、安心している場合ではない。

爽汰の居た場所とは違い、ここには大きな木がなく、雨を遮ってくれてはいない。見るからにずぶ濡れになった理沙子の体は、腕を触るだけでも冷たさが伝わってくる。

「よし」

このままでは良くないと思い、爽汰は理沙子の体を自分が居た所まで連れて行こうと思った。

理沙子の体を抱きかかえると、思ったよりも力を入れずに浮いた。
「軽い……」

一人眩きながら、雨を凌げる木の下へ運んで行った。
ゆつくりと理沙子を寝かせ、枕になるものを探した。

しかし、夏の軽装では服を代用する事もできない。かといって、
揺れた草の上にそのまま髪の毛を乗せるのも、どうかと思う。

結局、爽汰は自分が足を伸ばした上に、理沙子の頭を乗せること
にした。早く言えば、膝枕だ。

まずは落ち着いたところで、誰かに助けを呼ばないといけないと
考えた。

ズボンの後ろポケットに入れていた携帯電話を取り出す。

二つ折りタイプの電話を、ぱかっと開くが、電源が落ちている。

特に気にもせず、電源ボタンを押して画面を見て待つ。

しかし、数回やっても画面が光らない。

落ちた時の衝撃で電池がズレたのかと思い、電池パックを一旦外
した爽汰は、あるものを見つけた。

どの携帯電話もそうだが、こういう通信機器の最大の敵は水だ。
水が内部に入れば、たとえ少量であっても、電流とともに全ての
機能を腐敗で麻痺させていってしまう。

そうになった時、わざわざドライバーで筐体を開けて調べなくても
わかるように、水濡れシールというものが電池パックの下にあるも
のだ。

水玉のシールの柄が、濡れると溶け出してピンク色に染まるのだ
が、爽汰のそれは、真ピンクだった。

「まじかよ……」

こうなったらどうしようとも、もう直らない。

母が一度、食事の支度中に、電話をされていてそれを鍋の中に入れ
てしまったことがあった。その時、一緒に携帯電話ショップに行っ
て説明を聞いたから確かだ。

すぐに違う事を思いつく。

理沙子の携帯があるはずだ。

しかし見る限り、理沙子の洋服には、胸にある飾りのような小さ

なポケット以外は見当たらない。

「どこだろ…… あ、鞆か…… ああああ！」

爽汰は頭を抱えた。 鞆は撮影の邪魔になるため、丸刈りに持
つていてもらったのだ。

「と、言う事は……」

連絡を取る手段がない、と言う事だ。

越智達が何かしら、助けを呼んでくれるのではないかと思うが、
この雨と視界の狭さから考えて、すぐに来るとするのは難しいかも
しれない。

動ける自分が助けを呼びに行く、ということも爽汰は考えたが、
ここに理沙子を置いていくことだけは、どうしてもできない。 かと
いって、理沙子を雨に濡らしながら移動するのは避けたい。

雨が少しでも弱まるのを待つしかないのか。

爽他は唇を噛んだ。

「ん」

ふと爽汰の目に何かが止まる。

理沙子の来ているワンピースの胸ポケット、とても小さくてマッ
チ箱の大きさのものしか入らないような、飾りの類いのものだが、
そこから何かメモ紙のような物が滑りでているのが見えた。

雨に濡れていてよれてしまっているが、落とさないように、とそ
と取り出してみた。

トランプ大に切り取られている白い紙は二つ折りにされていて、黒
いペンで何かメモ書きがされているのが、裏からも見えた。

「なんだろ」

爽汰は、深い考えもせずその紙を見つめていた。

「あ、これ、もしかして……」

爽汰は思い出す。 昨日の夜、別れ際に徳二郎に渡した紙とペン。
もしかしたら、理沙子が元に戻る方法を書いてくれるのではな
いか、と爽汰が徳二郎に託したもの。

慌てて爽汰は、紙を開いて中を見る。

そこには、やはり祖父の字ではなく、滲んではいるが、よく授業のノートを借りた時に見慣れていた理沙子の字が書かれていた。

『私は大丈夫だから、仲良くし』

文の途中で切り取ってしまったのだろうか。それともこれ以上書く余裕が無かったのか。文章は途中のように見える。

「どういう、意味だ？」

これだけでは、理沙子を元に戻す為に何をしてあげられるのかはわからない。それどころか、言いたい事も伝わりづらい。

きつと、文字を書く事も簡単ではなかったのだろうか、やむを得ないとも思う。

とはいえ、大丈夫だからと言われて、そうですかと何もしないで居る訳にもいかない。

それに気になるのは、後半の『仲良くし』の後はなんと続くのか。爽汰は続く言葉を考えてみたが、理沙子の性格をふまえてたどり着くのは、一つだ。

「仲良くしてね？ って、誰と」

爽汰は、思わず声を出して聞いてしまう。

だが、もちろん返事をしてくれる相手はなく、とりあえずメモを自分のポケットにしまい込み、爽汰は一人こぼす。

「とにかく雨がやまない事にはな……」

まずは、雨が遠のいていつてくれるのをここで待とう、と思った。膝の上に乗った理沙子は、あまり顔色が良くないようで心配だ。静かに頬の上に手のひらを乗せると、ひんやりとした感触が伝わって来る。

「冷たい……」

急に心配になり、理沙子の体に異変はないか、注意深く見てみる。いくつかの擦り傷が腕と足に見つかった。血は滲む程度で、転がったときに芝生で擦れたのだらう。

見る限りは、命に関わるようなものはなさそうで、とりあえず安堵する。

他には何もできない爽汰は、なんとか暖めてあげたいと思って、理沙子の顔を両腕で包み込んだ。

理沙子がこの体に戻って来られたら、体がこんなに傷だらけな事に、怒るだろうか。それとも、悲しむだろうか。

爽汰を責めるだろうか。

嫌いになるだろうか。

聞いてなどもらえない事を承知でも、謝らずに居られなかった。

「ごめん、石崎さん。石崎さんの体、こんなに傷つけちゃって……、俺のせいだ。俺が、ちゃんと守ってあげられなかったから、こんな事に……俺が、もっと早く元に戻してあげられれば……」

爽汰は、今までの色んな事を思い出し、自然に涙が出て来た。

大好きな理沙子の為に自分がした事は、全て裏目にでている気がして、胸が痛くて仕方なかった。

早く謝りたいと思うのに、その理沙子は目に見えるのに、居ないのと同じで伝える事ができない。

「ごめん……」

爽汰は謝罪の言葉を繰り返しながら、涙を止められずに居た。

その涙は、理沙子の顔の上に静かに、ポタポタと流れていく。

「ごめん、本当にごめんね……」

その時、かすかに爽汰の顔に息がかかったような気がした。

「泣かな……いで……」

耳元で、とても小さな声だが、理沙子の口から言葉が聞こえた。

「じいちゃん……?」

爽汰は顔を上げて、理沙子の顔を覗き込む。

「大丈夫!?!」

しかし、理沙子の目は開いていない。

「じいちゃん!」

もう一度叫んだ時、また理沙子の口だけが、ゆっくり動いた。

「泣か……ない……で、青や……ま君」

爽汰は一瞬固まった。

今のは……。

「石崎さん……？　ねええ、石崎さん！？　石崎さん！」

爽汰は必死に叫んだ。

しかし、それきり理沙子は先ほどと同じように、弱々しい呼吸を繰り返すだけ。

爽汰は何か見逃してはいないか、と理沙子の顔を必死に見たが、表情を見る限り、目が覚めた様子はない。

でも、確かに今のは。

うわ言だったのだろうか。

爽汰は、混乱していた。

うわ言だとしても、今の話し方。それに、爽汰を「青山君」と呼んだ。

「石崎さん……」

間違いないと思った。今一瞬とはいえ、石崎さんの言葉だった。

息が荒くなつた爽汰は、気持ちを抑えようと深呼吸を繰り返した。戻ってくれた。

先ほどの衝撃で理沙子は体を取り戻したのだ、爽汰は喜んだ。

「良かった……！」

偶然のアクシデントではあったが、それがきっかけになったのだ。結果としては好転したと言える。

理沙子の負った傷が心配ではあるが、見た所それほど深刻そうなものは見当たらない。手当さえすれば、問題はなさそうだ。

そうなれば、出来るだけ早く人のいる所に連れて行ってあげたい。ここから無事に、助け出して上げなきゃ。

その為には、自分がしっかりしていないといけない、そう思う。はやる気持ちを胸に、爽汰は林の中でじっと空を見上げる。

やっと落ち着いて来た雨音が、テレビのノイズのように爽汰を囲んで鳴り続けていた。

六

時間にすれば、三十分くらい経ったのだろうか。

突然のように雨が弱くなり、木の間から差し込む太陽が見えたときには、爽汰もほっとした。

暗い時にはわからなかったが、辺りが明るくなると、林の向こうに見える景色が抜けている方向がわかった。

一刻も早くという思いで、爽汰は理沙子を抱えて林を抜けた。

ゲレンデに出ると、びっくりするくらい近くに、スキー場の経営する休憩所が見えた。

これなら雨が止むのを待つこともなかった、と悔やむ気持ちと、これでもう安心だ、という気持ちで足を進めた。

休憩所までの距離、理沙子を抱えて歩くのは、爽汰にとって容易ではなかったはずだが、爽汰は自身も傷を負っているのに、辛いと思ひもしなかった。

それほど、必死だったのだ。

息を上げてロツジ風の建物の目前まで来た所で、中から越智と丸刈りが飛び出して来た。

「おい、大丈夫か!？」

越智が入り口から叫ぶ。

爽汰はその声に返事をする事もできずに、一步一步足を進め続けた。

丸刈りは、タタタと走って来て爽汰の側で立ち止まる。

「代わるよ」

そう言つて、理沙子の体を静かに爽汰の腕から取り上げた。

「すいません……」

丸刈りは何も言わないが、爽汰は心配してくれていたのだろうと、そう言つたのだった。

休憩所の人に、タオルを借り、爽汰は自分の体を拭いていた。

「いつ……」

つい傷口を自分でこすりつけてしまった。

「痛そうだな……」

越智はその傷を見て、顔をしかめてた。

肌の出ている部分は、殆どがすり切れている。

「まあ、見た目は派手ですけど、そんなに痛くは……」

自分の事よりも、心配なのは理沙子の方だった。

爽汰は、従業員のおばさんが暇だから手伝うと申し出てくれたので、理沙子の体を出来る限り綺麗に拭いてもらえる様に頼んだ。

濡れているばかりではなく、たくさん泥や木の葉が付いていて、消毒も必要だったからだ。

おばさんが、屈みこんでタオルやガーゼをとつかえ引返していた手を止めて、片づけをはじめた。

「これで、だいぶ綺麗になったと思うけど。ごめんなさいね、洋服の代えを貸してあげたいけど、何もなくて……」

「いえ、とんでもないです。どうもありがとうございます。本当に助かりました」

どう致しまして、と言って汚れたタオルや薬箱を持って、おばさんは奥へと引っ込んでいった。

「いや、でもびっくりしちゃったよー、ほんと。俺なんてさ、カメラを通して見てたから、臨場感あって、こっちまで手に汗かいたよ。助けたくても、手も足もでないしさー」

爽汰は、なんとなく居心地の悪さを感じていた。

「すいません、ご心配かけて……」

「いやあ、いいんだけどね。いい画が撮れたしさ！ 逆に感謝って感じ？」

爽汰はその言葉に反応した。

「ちょっと待ってください。まさか、さっきの映像、仕事に使う

つもりですか？」

越智は、平然とした顔で答えた。

「え？　なんで？　だって、別に恥ずかしい映像じゃないっしょ？」
爽汰は、カチンときた。

しかし、心配させ、待っていてくれたのに、ここで怒るのは、悪いのではないかとぎりぎりで我慢し、黙って聞いていた。

「それにね、君は知らないかもしれないけど、こういう場合の映像も、著作権は俺に発生するんだよ。だから、俺が、あの映像をどう使おうと、君たちが文句言えないの。わかる？　例え、このままこの娘が死んじゃったとしても、ね」

「何だと？」

爽汰は我慢できなかった。

「ちよつと！　人が困ってる所を親切顔して近づいて来て、詐欺まがいの方法で無理矢理俺たちを働かせたあげく、死んでも映像は仕事で使うだ？　お前は何様だ！」

爽汰の大声は、休憩所にいた数人のお客さんと、従業員の視線を一手に引き受けた。

突然の爽汰の怒声に、面食らった顔の越智は、周りに聞こえるようにと、わざと大きめの声で、なだめ始める。

「ちよつと、ちよつと。冗談じゃん。ただの例えだよ、例え。確かに、落っこちた時はびっくりしたけどさ、大した怪我もなかったんだから、良かったじゃーん。ね？　そうでしょ？　怒るなよー」

しかし、爽汰の怒りは収まらなかった。朝からの無理強いにずっと耐えて来て、怪我までした上に、理沙子を軽んじるような言い草に、我慢の糸が切れ飛んだのだ。

「大した怪我もなくて良かった？　当たり前だ！　石崎さんに大した怪我なんてさせようものなら、こんな所に連れて来たお前に俺が大した怪我させてやってるところだ！」

「おいおい、それはちよつと言い過ぎじゃないのか？」

大人しく聞いていた越智もさすがに頭に來たのか、座っていた椅

子を蹴り捨てて爽汰に向かって来た。

その時、理沙子の寝かされていた長椅子から、小さな声がした。

「……ん」

越智の蹴飛ばした椅子が床に倒れ、その大きな音と振動で、理沙子の目がゆっくりと開いていったが、今の爽汰にはその事に気づく余裕は無かった。

「黙って聞いてりゃ、調子にのっちゃってさー。金借りについて、態度でかいってのは、どういう事だ？ ああ？」

越智が爽汰に責めよって来た。

爽汰も怒りを顔にあらわにして、にらみ合いに応じていたが、その時だった。

ずっと黙って聞いていた丸刈りが、出口に一番近い席からすっと立ち上がった。

スルスルと歩いて来て、手に取ったのは、ずっと越智が撮影をしてきたハンディカメラだった。

その動きに気づいた越智は、咄嗟に丸刈りを呼び止める。

「おい、何してんだ。それに触るなっていうも言ってるんだろー！」「爽汰との言い合いで熱くなっている口調のまま、丸刈りに怒鳴りつけている。

しかし、丸刈りはまるで何も聞こえていないような様子で、素早くカメラのカバーを開け、中に入っているDVDを取り出した。

「おい！ それは……」

越智が言い終わる前に、丸刈りは越智の見る前で真っ二つに折り曲げて床に殴り捨てた。

越智は、急いで床に落ちたディスクを拾って元に戻そうとしているが、くつきりと折り目がついている。もう復元は無理だろう。

ゆっくりと立ち上がってどすをきかせた声をだす。

「お前、なにしてくれてんだよ、あ？」

越智は今度は丸刈りにも迫っていった。

しかし、すぐに越智はその場でにやりと笑ってみせる。

「でも、詰めが甘いんだよねー。こういうカメラにはね、ハードディスクっていうのがあるの。まだカメラの中にも、映像の記録は残ってるんだよ。バカだねー！ 前から使えねー奴だと思ってたけどな、お前はよ」

丸刈りは顔色一つ変えずに、越智の罵倒を聞いている。

爽汰もさすがに丸刈りの行動に驚いて口を開けてみていたら、越智は怒りの矛先をまた爽汰に向けてきた。

「今、ざまみろとか思ってたでしょ。ねえ、思ってたんでしょ？

ああ？ ふざけんなって言うの！ 大人をナメてんなよ？」

爽汰の肩を掴み、今にも拳をぶつけてきそうになったとき、後ろで響いた破壊音が越智の動きを止めた。

ガッシャーン！

爽汰も越智の肩越しに音のした方を覗く。

休憩所のドアが開けられていて、その外、地面の上に何か黒いものが落ちていた。

「ぎゃあああ！ 俺のカメラ！」

越智は叫びながら飛び出していく。

「これいくらすると思ってるんだよおー！」

そこには、越智のハンディカメラが、大雨で出来た大きな水たまりの上で、半壊になっていた。

その姿を目で追いかけていた爽汰は、やっと状況を飲み込む。

ドアの前には丸刈りが立っていて、何も知らない顔をして爽汰に声をかける。

「帰りましょう。送ります」

相変わらず感情のない声だったが、ほんの少しだけ、爽汰に笑いかけてくれたような気がした。

「彼女も起きたみたいだし」

「え？」

爽汰が急いで振り返った先には、少し戸惑った様子ではあるが、はつきり目を開けた理沙子が上半身を起こしてこっちを見ていた。

「石崎さん！」

爽汰は理沙子の元に駆け寄った。

「よかった、目が覚めたんだね。歩ける？」

そう聞くと、コクンと頷いて、肩を差し出した爽汰に背負われるようにして立ち上がり、ロッジを出て行った。

無惨に破片と化したその黒いものを拾い集めている越智は、そこでうずくまっていた。

少し可愛そうな気もしたが、それ以上にいい気味だとも思えた。

爽汰は、黙ってその後ろを歩いて通り過ぎ、振り向きもしなかった。

車の置いてある所まで行くと、理沙子に乗せるのを丸刈りが手伝ってくれた。

理沙子は疲れている様子だったので、暫くはそっとしておこうと後ろの座席に寝かせた。

そして、越智を待つことなく、車は朝来た道を、家に向かって向かい出した。

空は、もたつく空気を洗い流したように、すっきりと晴れていた。

七

「大丈夫？ 石崎さん。どうか痛くない？」

「……ええ」

爽汰は心からほっとした。

「かすり傷が結構あるみたいだから、これからお風呂とか入るとき、ちよっとしみるかもしれないけど」

理沙子は軽く笑って答えた。

「大丈夫」

爽汰も笑い返してから前の席へと注意を移し、丸刈りに話しかけた。

「あの、さっきは、ありがとうございます」

丸刈りは、顔色を変えるでも無く、運転しながらさらりと答えた。

「いえ、別ににも」

「でも、越智さんにあんな事しちゃって、あの、大丈夫なんですか？ 俺が言っつのは変ですけど、めちゃくちゃにしちゃったし……怒らせちゃったし。しかも、置いて来ちゃったし……コレからのお仕事とか……」

鼻から大きな息を一つ吐いてから、丸刈りはいつものトーンで言った。

「いいんです。元々自分も、いつか辞めてやろうと思ってたんで、ちよつと良かったです」

「え？ 本当ですか？」

丸刈りは、口を歪ませてわざと意地悪そうな顔で笑った。

「あんな男、自分も大っ嫌いですから」

それを聞いて、爽汰は驚いたが、いい人だな、としみじみ感じて笑ってみせた。

「あ、すいません。今までお名前も聞いてなくて。俺、青山爽汰で

す」

さっきまでの嫌な雰囲気捨て、一気に楽しい気持ちになれた爽汰は、明るく聞いた。

高速に乗り、まっすぐの道を軽快に進みながら、仮名、丸刈りは名乗った。

「マルカリです。丸バツの丸に、稲刈りの刈りで、丸刈」

爽汰は意表を突かれ、一瞬返事に困った。

「……珍しい、お名前ですね」

帰りの道中も、渋滞に遭う事もなくスムーズに帰って来られたので、二時間程で自宅前に送り届けてもらえた。

「ありがとうございます、丸刈さん。本当に感謝してます」

爽汰は、理沙子が車から降りるのを手伝いながら言った。

「いえ。彼女と仲良くね」

お互いを笑って挨拶しながら、爽汰は車の後ろのドアを閉めた。エンジンをかける音して、黒いワンボックスはまっすぐ先に消えていった。

ふう、と息を吐いて爽汰は理沙子に向き直る。

「気をつけて」

ゆっくりと、倒れないように気をつけながら、爽汰は理沙子を家に連れ入れた。

玄関の鍵を開け、ドアを開けようとした時に、理沙子は言った。

「すまねえな、爽汰」

「……え？」

爽汰は目が点になった。

「ええええ！」

「そんなにがっかりすんでねーよ」

爽汰は家のソファで、うつ伏せになってふて寝していた。

「しょうがねっぺ？ 言うタイミングさ、無かったんだから」

爽汰は顔だけ横に向けて反論する。

「だってさあ、帰りの車に乗るときにも、女の子みたいな喋り方したじゃない。あれは何よ」

「あれは、あの丸刈り君に聞かれてると思ったからよ、わざとだ。どうだ、爽汰も騙されたか」

「俺まで騙してどうすんだよ！」

思わずソファーから乗り出してしまった爽汰は、肩を落としてまゝ座り直す。

「とにかく。石崎さんがまた一瞬だけ出て来たんだ。やっぱり、衝撃を体に受けたのがきっかけだった」

ふん、と徳二郎はその時の事を思い返す。

「んで、お嬢ちゃんは何んて言ってたんだ？」

「うんとね……うぐっ！」

思わず言われたまゝを口にしてしまうそうになり、寸で詰まる。泣かないでと言われたと話せば、泣いていた事もバレてしまう。それは、困る。と言うより、嫌だ。

「うぐ、ってなんだべ？」

「え、ええ？ ああ、えっと、大したことは……」

慌てて違う事を言おうとしたが、思いつかずにはぐらかしてしまつた。

「大したことなくはねえっぺ。きっと何か……」

「あああ、そうだあ！」

いきなり大声を出すので、徳二郎も驚いて話を止めてしまった。

「そう言えば、これ、これ何よ」

爽汰はズボンのポケットから、林の中で見つけたあのメモを取り出した。

「これ、さっきじいちゃんが倒れてたとき、胸ポケットから落ちて来たんだ。これって、俺が昨日渡した奴でしょ？」

徳二郎は、そのメモを覗き込んで何度か頷く。

「なんだ。爽汰に言われた通りに、風呂場さこれ持ってってよ。」

前の日と同じように、記憶がなくなっただけと思ったら、目の前にこれがあったよ」

「書いてあったのは、これだけ？　なんかさ、これ文の途中みたいじゃない」

徳二郎は横に首を振った。

「なかった。切り取られたその紙だけだ。余白の部分は、側のゴミ箱に入っただけなんだけど、なーんも書いてなかったで」

「うーん。『私は大丈夫』ってのはわかるんだけど、『仲良くし』って方がね。どういう意味だろうって」

「さあなあ……」

「だよねえ……」

うーん、と二人はそれぞれに考えてみる。

元にもどる為のヒントを。

二人とも必死に考える。

故に、自然と沈黙が流れる。

……。

……。

……ぐうう。

「寝るな、じいちゃん！」

徳二郎は、ちよっとお疲れだった。

「むにゃ、ちよっとだけ……」

「……まったくもう」

そう言いながら爽汰は笑ってしまっていた。

今日は朝から結構動いたし、怪我もして、大変な一日だった。

まだ夕日も沈んでいない時間だが、少しくらい休ませてあげよう。

何も言う前に、もう寝息をたてている徳二郎を見ると、なんとなく爽汰もあくびがでてくる。

「俺もちよっと寝よつと」

爽汰と徳二郎は、束の間の休息をとることにした。

八

電話の呼び出し音が鳴る機械的なメロディーが、家の中に響く。爽汰と徳二郎は、二人ともその音に起こされた。

気がつくのと辺りはうす暗くなってきた。

あれから、小一時間寝ていたようだ。

のろのろと爽汰が玄関の前にある電話を取りに行く。

しつこくなり続ける呼び出し音に、うるさそうにしながら爽汰は受話器を取る。

「はい、もしもし青山です」

「あ、爽汰？ 俺、悟だけど。どーしたんだよ、お前、携帯繋がんねーよ？」

深夜な訳でもないのに寝ていたとも言えず、極力普段通りを装って話してみる。

「悟か。ああ、そうなんだよ。水没させちゃってさ。だめになっちゃったんだ。新しいの買う金もないから」

「なんだ、そうか。携帯ないと、不便だなー」

爽汰は頭をポリポリしながら聞いた。

「で、どうしたの？ 何か用があつたんじゃないの？」

「そうそう！ そうだよ、お前、一昨日の理沙子ちゃんとのデートの報告してこないんだもん。何かあつたのかって、どうしても気になってさ。今日、昼頃お前の家行ったんだけどさ、誰もいないし」

爽汰は少し憂鬱になった。

悟は、大好きな友人だ。

だから、本当の事を話したいとも思うが、これは自分だけの問題ではない。

理沙子も悟とはクラスメイトなのだ。

勝手に自分の判断で、理沙子にこれ以上面倒な思いをさせたくない

い。

「もしも、理沙子が元に戻って、事が落ち着いたら、ちゃんと話そう。」

信じてもらえるかはわからないけど。

『もしもし？ もしもし、爽汰聞いてるか？』

「あ、ああ。ごめん。その事は……今度会って話すよ。今は、勘弁してくれ」

話しながらない爽汰の口調を読み取った悟は、数秒の間を開けて、思いついたように話した。

『なあ、爽汰。今日、熊野神社のお祭りだって知ってたか？ さっき通ったら、結構人も来てた。よかったら、気晴らし……あつと、そうじゃなくて、暇なら行かないかと思ってさ』

悟の気遣いに、優しく笑いながら、爽汰は返事をする。

「ありがとう。もし気が向いたら行くよ」

『……そうか。じゃあ、また、連絡するよ。おい、早いとこ新しい電話買えよ？』

「うん、オッケー。またな」

受話器を置いて、爽汰はため息をつく。

いつになったら、笑ってこんな不思議な事を話せるときがくるんだろう、と思った。

本当にそんな時がくるのかな、と。

「誰から電話だ？」

徳二郎が、黙って立ち尽くしている爽汰の様子を見に来た。

「友達、学校の」

「そうか、とそれだけ言って、徳二郎は部屋へ戻ろうと後ろを向いた。」

でも、その後ろ姿が、なんだかとても切なくて、それは祖父ではなく理沙子の背中なのに、まるで、小さい頃によく見た景色のように、爽汰はなぜかとても胸が締め付けられた。

「じいちゃん」

爽快は呼び止めた。

「ん、なんだ？」

徳二郎は、ゆっくり振り向いた。

「お祭り、行かない？」

じつと爽快の顔を見つめた徳二郎は、見た事もない、くしゃくしゃの笑顔で答えた。

「ワシは、祭りっこさ大好きだ」

九

「とんだお盆になっちゃったわね。あなた」

徳二郎の病院に見舞いに行った帰り、拓治と幸恵は病院からバス停への道をゆつくり歩いていた。

病院がある以外にこの近辺には、数件のお店がポツポツとあるだけで、日の暮れたこの時間になると、殆どが店じまいをしている。

唯一開いているのは、コンビニエンスストアという名の個人商店だけで、それもあと三十分したら閉店時間だ。

これでもここは市街地と呼ばれ、この地域では栄えている場所だった。町の人たちにはなくてはならないメインストリートなのだ。

「お陰で多めに休みをもらえたんだ。お義父さんさえ良くなってくれたら、最高のお盆さ」

幸恵は静かに笑った。

「……そうね」

道路の所々で灯る街灯が、力なく町を照らす。夜空の月と星の輝きのほうがよっぽど明るい。だから、それで十分なのだろう。

すれ違う人も、走りさる車も一切ない、耳の痛くなるような静けさに、自分たち二人の足音が、小気味よく繰り返す。

「ねえ、あれ見て」

幸恵が立ち止まって指差したのは、商店街の先に見えて来たバス停の向かい。この町の唯一の神社の明かりだった。

「お祭りだったのかしら」

「ああ、そうみたいだな」

近くに行くにつれ、塀や柱にぶら下がる提灯が、夏の夜を飾り立てているのが見えて来た。

「ほら、やっぱりお祭りね？」

幸恵の顔が楽しげに笑う。

「ねえ、行ってみましょう？」

「やってるのか？」

「わからないけど、バスが来るまで、ね？」

そう言うが早いかな、幸恵は走って行ってしまう。

お祭りならば、お囃子や人の賑わいが聞こえて来てもいいと思うが、拓治の居る場所には、その雰囲気は伝わって来ていない。

しかし、妻のその走る姿は、はやる気持ちを抑えられない少女の様で、つい拓治は微笑んだ。

「お義父さん、そっくりだな」

それは決して悪い意味ではなかった。

神社の前まで来てみると、やはりお祭りはやっていなかった。

追いついた拓治は、妻の姿を探しながら一歩ずつ奥へ進む。

幸恵は、正方形の石畳を進んでいった先にどつしりと建つ、赤い大きな鳥居の下で立っていた。

「幸恵」

拓治は静かに呼びかける。

社をぼんやり見ていた幸恵は、その声に振り返る。

「終わっちゃったみたい。昨日までだったのかしら、全然気がつかなかったわ」

境内は、まだその名残のあるものの、あとは片付けを待っただけのように見えた。

「仕方が無いさ。ずっとお義父さんの看病しっぱなしだったんだから」

「……ええ」

幸恵は、社の方に向き直り、賽銭箱の後ろの階段に腰をおろした。ゆっくりと拓治も隣に座る。

「ここのお祭り、よく父さんと小さいころ来たの」

肘をたて、手に顎をのせて幸恵は思い出しながら話した。

「父さんがね、お祭り大好きで。あ、知ってるわよね。ここのお祭

りは、大体お盆あたりに二日間あるんだけど、仕事も休みだから、必ず二日とも連れて来てくれたのよ。でも、本当は自分が来たいだけなの」

くすくす、と幸恵は笑う。

「爽快がまだ幼稚園の頃だったっけな。連れて来てもらったよ、俺も、お義父さんに。爽快連れて」

「ああ、そうだったわね。そう、そうだった。喜んでたわ、父さん」
拓治も笑う。

「大はしゃぎでさ。あんず飴の屋台の前で突然立ち止まって、ワシはどれが一番好きだと思っちゃって、真剣に聞くんだよ。そのお店にはあんず飴とみかん飴が売ってたんだけどさ、俺はなんて言っているかわかんなくて、あんず飴でしようか、って言ったんだ。そして、お義父さん、怒りだしちゃってさ」

話しながら、拓治は笑いがこみ上げてくる。それを見て、幸恵もつられて増々笑う。

「なんで？」

「リング飴にきまってんべ！　ってさ。地元の名産が一番に決まってる、こんなもんは邪道だべ、って。あんず飴売ってる屋台の前で、だぜ？　俺、もうどうしていいかわかんなくて……」

拓治は笑ってしまつて先が話せなかった。

幸恵の方は、ついにはお腹を抱えて笑い出し、目頭を抑えて肩を上下させていた。

「可笑しいよな、本当。でも、そういうの、俺はすぐく見てて気持ちいいんだよ。なんでかな。お義父さんの、なんか、まっすぐに、ねじれてないところ、大好きなんだ」

ようやく笑いの収まった幸恵は、深呼吸をしてから付け加える。

「ただ、田舎の人なのよ、父さんは」

「そうなんだろ？　な、きつと。でも……」

拓治は小さい頃に父を亡くしていた。

それを寂しいと感じた事が無かった訳ではないが、大人になるに

つれてそれは母への感謝に代わって消えていった。

しかし、幸恵と結婚し、父と呼べる存在が出来、それが徳二郎のような人間であったことに、素直に感謝していたのだ。

空を仰ぎ見て、大きく息を吸って拓治は言う。

「俺にしてみれば、男として尊敬できる人だ」

幸恵は、自分の父親を好きだと言ってくれる夫を、暖かく、嬉しく思った。

「ねえ、そう言えば」

思い出は、またその続きを思い出させる。

「お父さん、また爽汰とお祭り行きたいって、言ってたわよね」

拓治も、覚えがあった。

「ああ、そう言えば。あれ？ 爽汰は、あれからここのお祭り来てないんだっけ」

幸恵は頷いた。

「そうなの。爽汰が小さい頃は、夜になるまで待つてられなくて。ほら、昼間は山で散々遊んじゃうから、疲れてねちゃうのよ。それで、今年は絶対行こうって言ってた時には、あなたの仕事がなかなかお休み取れなくて、帰省がお祭りに間に合わなくて」

あー、と拓治も思い出す。

「それで、じゃあ来年こそは、って言った次の年から、爽汰が田舎来るの嫌だっけ言い出して、それっきり」

「……そうか。そうだったな」

小さなすれ違い。

素朴な祖父の願いと、思春期を迎えた孫息子の気持ち。

夫婦はそのどちらにも共感できる立場だからこそ、胸がわずかに痛む。

目に残る祖父の寝込む姿が、更に切ない気持ちに拍車をかける。

拓治は誓うように手を顔の前で組む。

「お義父さん、元気になったら……みんなで一緒に行こう」

夫を改めて見ながら、幸恵は一度大きく頷く。

「……そうね」

夏の暖かい空気を纏いながら、遠くから最終バスの走ってくる音が聞こえるまで、二人はその場でただ黙って座っていた。

十

「遅いぞ、爽汰」

言われた爽汰は、急いで徳二郎に走り寄り、耳元でささやいた。

「だめだってば、爽汰と言ったら！ それに今のたった二言でも、思い切り詭りでてたよ」

「そんな訳ねーべ……あ」

「もう。しっ！」

爽汰は目を細めて、人差し指で口を抑えてみせた。

徳二郎の方は一瞬、ぶすつとしたものの、またすぐにご機嫌にもどる。

「わかったわよー、青山くーん」

「気持ち悪いなあ、もう！」

「わっはっは」

家を出た時から、徳二郎はこんな調子だった。

二人は、神社に来ていた。

赤い提灯が隙間なく飾られた境内には、おいしそうな食べ物やおもちやを売る屋台が連なり、誰も彼もが次に何をするかを楽しげに考えている。お祭りならではの賑わいだ。

しかし、爽汰は徐々に、ここに祖父を連れて来た事を後悔し始めていた。

なぜあの時、突然お祭りに行こうなどと言い出したのか、自分でもよくわからなかった。

でも、なんとなく徳二郎が喜ぶんじゃないかな、と思ったのだ。

案の定、徳二郎は終始ご機嫌なのだが、爽汰はその様子に手を焼いていた。

「それで、何に使うのかちゃんと考えてるんでしょねえ？」

手持ちのない二人は、合わせてもたったの三百円しかないお小遣

いを何に使おうかと、屋台を一通り見ている最中だった。

徳二郎は、また爽快に怒られないように、気をつけて小さい声で答えた。

「今、検討中だで。そんなに急かすんでねえ」

徳二郎は腕を組み、真面目な顔で考える。

「しっかし、焼きそばもたこ焼きも一個で四百円だべ。イカの丸焼きなんて、五百円も取んだ。昔はよ、爽快、百円さ持ってたなら、腹一杯になるまで食べれたもんだで。世知辛い世の中だべなあ」

所持金が三百円しかなくなったのは、世の中のせいではなく、誰かさんが無駄にタクシーをお使いになったからです、と爽快は喉まででかかったが、ぐっと抑えた。

「……それで？ どうするの？」

一際大げさに困った顔をしてから、徳二郎はもう一度辺りを見渡す。

「ワシ、もう一度向こう側の屋台見に行つて来てもいいが？ お前も一緒に行くか？」

「いや、いいよ。俺はここで待つてるから、行つて来て」

そう言つて爽快は、明るく電気の届く場所から少し離れた、水手舎の脇にを段差見つけ、そこに腰をおろした。

飛び跳ねるようにして人ごみに消えていった理沙子の背中を見ながら、爽快は一つため息を吐く。

その姿は、理沙子であつて、理沙子ではない。ずっと理沙子を見ているのに、とても理沙子が懐かしく感じる。

なんでこんな事になったのだろう。爽快はこの三日間の事を思い返していた。

ああすればよかった、こうしなければよかった。

そんな思いはつぎからつぎに思いつくのに、これからどうしたらいいのかと考えると、何も浮かんでは来ない。

人格だけが入れ替わる、そんな非科学的な事は、爽快自身でさえ目の前で実際に起こるまで信じる事はなかったと思う。それ故に、

誰かに聞いて答えをもらえるわけのないこともわかる。

自分でどうにかするしかない。

その結論に達するまで、そんなに時間はかからなかった。

爽汰は自分のポケットに仕舞っておいた、理沙子が書いたメモを引っ張り出した。今、爽汰が持つ唯一の糸口。

理沙子がかしも近くで見えていてくれているのなら、このメモは元に戻る為のヒントに違いないだろう。

四つ折りにしてあつた紙を丁寧に開いていく。

『私は大丈夫だから、仲良くし』

どうしろと言うのだろう。

これを見て、まず思つたのは、『仲良くして』だった。

理沙子が発しているという事を踏まえても、続きはそう書きたかつたのではないかと考えた。

しかし、その相手が、徳二郎の事を意味しているのであれば、その言葉に違和感を覚える。

理沙子が、爽汰と徳二郎とのやり取りを見ているのなら、あえてそれを伝えなければならぬように本当に見えたのだろうか。

そうは思えなかった。自分でも、祖父とはそこそこうまくやっていたと思うのだ。

爽汰はもう一度考え直してみた。

理沙子は大きな身体的ショックを受けて、意識を失い祖父と入れ替わった。

しかも、入浴を見られたくないといった、精神的なプレッシャーが強くなったときも、徳二郎を体から追い出せた。

共通するのは……強い刺激。

痛みや嫌悪といった、肉体的、精神的に大きな刺激が加わることで、なんらかのスイッチが入っている。

爽汰の心臓が一度大きく鼓動する。一瞬にして、体中に熱い血が巡る。

「もしかして……」

爽汰の頭の中で、一つの考えがまとまった。

『仲良くし』ないで。

徳二郎は、爽汰に会いたがっていた。

自分の命が危険にさらされた時、最後に顔を見たいと思う程に。

実際、徳二郎は爽汰と一緒にいることができ、とても喜んでいる。

もしも理沙子のメモの続きが『仲良くしないで』だとしたら、それはもちろん祖父、徳二郎とのことだろう。

そして、もし爽汰が徳二郎に突然辛く接したら、大ダメージを与える事になるのは、間違いない。きっと徳二郎はショックを受け意気消沈するだろう。

ここまで考えればもう十分だ。

爽汰と一緒にいたなくなつた徳二郎は、理沙子の体を自ら去るだろう。

「……でも」

自分で行き着いた思考なのに、爽汰はとても気分が悪かつた。

理沙子がこんな事を伝えようとするだろうか。

理沙子の人としてをどれだけ知っているという訳ではない。しかし、少なくとも自分の好きになつた人が、誰かを不幸にすることを促すような人ではないと思いたい。

しかし、これしか方法がないのだとしたら、仕方がなかったのかも知れない。

そして、これしかないのなら、やってみるしか無い。

爽汰しか出来ない事なのだから。

徳二郎の事を考えれば、気持ちが揺らぐ。理沙子を元に戻す事だけを、それだけを目的として、心を鬼にするのだ。

「嫌だな……」

爽汰は、こんなことはしたくない、と自分はちゃんと思っているんだと確認するかのように、口にだして言ってみる。

「何が嫌なんだ？」

知らぬ間にすぐ目の前に徳二郎が戻つて来ていた。

「ああ、じいちゃん。いつ戻って来たの……？」

爽汰は動揺した。ただ頭で考えていただけの事だが、徳二郎には聞こえていたのではないかと心配だったのだ。

「いつって、今だべ。どうした、なんだか様子がおかしいな……ああ、わかったで」

爽汰は飛び上がりそうな勢いで立ち上がる。

「な、なに、なに？ 何が、わ……かったの？」

徳二郎は、不思議そうに首を傾けてから、笑って言う。

「腹さ減ったんだべ？」

爽汰はすぐには何も言えなかった。

わからないように、一人肩をなで下ろし、いつものように祖父の冗談を諷めようとする。

「そんな訳ないだろ……」

ちがう。

爽汰は今さつき心に決めた事を既に忘れていた。それだけ、意識をしないと自然とできる事じゃない。

胸を張る仕草をし、改めて爽汰は言い直す。これしか、道はないのだ。

「……う、うるせーよ。じじい」

「へ？」

徳二郎は、目をパチパチとさせている。

「うるせーって言うてんだよ！ うぜーから、どっかいけよ」

爽汰は言うだけは言ったが、その目を見る事が出来ない。見たら、全て打ち明けてしまいそうだ。

「……爽汰？」

どう見ても様子のおかしい孫を、単純に心配をする徳二郎は、右手を伸ばし、横を向いて強張る爽汰の左腕を優しく掴んだ。

「どうしたんだ、爽汰？ 何かあったんだべ？」

心配なんかしないで！ もっと腹を立ててよ！ あんなに生意気な事、じいちゃんに言ったのに！

爽汰は胸の内が張り裂けそうになる。

拳をぐつと握り、ありったけの罵声を吐き出すように口から連ねる。

「い……一体いつまで、その体で居るつもりだよ！ 若い体で満足か？ 自分の老いぼれた抜け殻はもういらなくて事かよ、一生そのままでいるつもりかよ！ なんだよ、こんな事になってるのに、平気な顔して祭りで騒いでてさ。恥ずかしくないのかよ！ 石崎さんに悪いと思わないのかよ、かわいそうだと思わないのかよ！ 出てけ！ その体から出てけよ！」

その苦しい顔は、徳二郎が掴む腕に更に力を入れさせた。

「おい、爽汰？」

パンツ！

明かせない気持ちだが、その腕を思い切り振り払う。

「はなせ！」

爽汰はそこで初めて徳二郎の顔を見返した。

体ごと飛ばされた理沙子の軽い体は、バランスを失ってその場に手をついていた。

「爽汰……どうしたん……」

「うるさいよ！」

爽汰は叫んだ勢いで、その場を立ち去ろうと足を上げる。

しかし踏み込んだ足下に転がる何かが、一瞬その勢いを妨げた。爽汰はそれを見て、心がぐらりと傾く。

その視線の先を同じく見つめる徳二郎は、静かに呟く。

「一個しか……買えねがつたんだ……」

それは大きくて、まるで飾り物のようにピカピカの、りんご飴だった。

土にまみれて、もう食べられない、りんご飴。

祖父が買って来てくれた、りんご飴。

十一

爽汰は神社からずっと走っていた。

立ち止まったら、胸が苦しくて泣いてしまいそうだったから、とにかく走った。

どこに行けばいいのかなんて、考えもしないまま気がつくと、昨日徳二郎と来た河川敷に来ていた。

「はあ、はあ、はあ……」

喉が熱い。乾き切った息が器官を痛めつけめるようだ。

人気のない、暗やみばかりが広がる砂利の上に、爽汰はへたり込んだ。

「……うう」

爽汰は、呼吸を整える前に嗚咽がこみ上げて来た。

体はこんなにも水分を欲しているのに、これだけの涙はどこにストックされていたのかと思う程、ぼろぼろと大粒の雫が、どこにもぶつからずに地面に吸い込まれていく。

爽汰には、わかつていたのかも知れない。

あんな事を言っただくらいで、徳二郎が爽汰を見放す事などあり得ないと。

ずっと側にいる両親とは違う形の愛情で、いつも恋しがっていてくれた祖父が、爽汰の側を離れたがる理由などないのだと。

「う……う、うああああ」

この涙には、それともう一つの気持ちが混じっていた。ずっと負い目を感じていたのだ。

この数年、爽汰の帰省を待ちわびているのを知っていながら、たわいもない自分の気まぐれでその気持ちを裏切ってきた。ほんの数日、ゲームを我慢するだけで、喜ばせて上げられると知っていて、それすら面倒がっていた。

あんなに可愛がつてくれていた、大好きな祖父なのに。

自分は祖父の期待をずっと裏切っている、と心の奥底で申し訳なさを感じていたのだ。どれだけ残念がつているかを知りながら、それを見て見ない振りをしていた事に、ずっと心苦しさを感じていた。わかつていながら、挙げ句の果てには、理沙子を元通りにしたいから、結局は自分の責務を果たしたいから、また、自分のわがままの為に、祖父を傷つけてしまった。

「……俺……いやだ」

人を好きになつてみて、初めてわかった。

何かしてあげたいと思う気持ちともう一つ。

ただ、側にいる事がとても嬉しいと言うこと。

「ごめん……じいちゃん」

弱々しい声は、川の流れのさわさわとした音に、消されて流れ行く。

いつまで泣いていたのだろう。

膝を抱え、顔を埋めていた爽汰の耳に、なにか遠くの空から伝わってくる音が聞こえた。

初めは気にならない間隔で聞こえていたその音が、どんどん大きく、そして早くなる。

あるものを思い浮かべた爽汰は、顔を空に向けてみる。ほどなく次ぎの音がしたとき、その音源が夜空に現れる。

「……花火」

とても遠くて、見物するような距離ではないが、どこかこの川の上流で花火大会が行われているらしかった。ぼんやりと、そちらの空を見上げていた。

やっと涙が引いていき、少しずつ落ち着きを取り戻していく。色々考えるべき事がある。

結局、徳二郎を相手に、芝居を打ってやろうとしたのは大間違いで大失敗だった。最後に徳二郎の言った言葉は、明らかな東北弁だ

ったからだ。

その時の様子をもう一度思い返していた爽汰は、また一つ映像を浮かべてみる。

瞬間に、とても小さい頃に味わった楽しい思い出が、色を持たずに頭をよぎった。

あのとき足に当たった物を見て、自分は何か懐かしい様な気持ちになった。あの気持ちは一体なんだったのか、と。

りんご飴。お祭り。じいちゃん。神社。

爽汰は連想ゲームのように、その気落ちの元をたぐり寄せようとした。

二、三の間違った思い出を切り捨てた後、爽汰は思い出す。

「……父さんで行った……お祭り」

言い終わる前に、また涙が頬をつたうのを嫌々感じていた。

写真のスライドショーのように、一ページずつの景色が後から後から頭の中に映写されていく。

それはとても昔のようにも感じるし、そうでもないようにも感じる。夢のような記憶の断片。

父と祖父に両手を握られ、くぐった鳥居。

りんご飴が好きだと、大声で言う祖父の背中。困り果てる若い父の顔。

また来ような、と境内を後にする時に笑いかけてくれた祖父の笑顔。

「わああああ……」

もう堪えきれなかった。

大好きなはずのりんご飴を、たった一つ買って来た。

誰の為のものかなんて、考える必要は無い。爽汰の為に買って来た。

それを見せたときの孫の喜ぶ顔を見たくて。

子どもの様な素直な気持ちだけで。

「……じいちゃん」

溢れ出る気持ち、うまく体外に放出できない。溜まっていくばかりで大声で叫びたくなった。

頭を抱えてその欲望を堪えていた時だった。

「呼んだか？」

爽汰の脚と脚の間から、白いスニーカーがこちらを向いて立っているのが見えた。ゆっくり顔を上げていく。

「男は一人でも、泣いたらだめだ」

理沙子の姿、徳二郎がそこに立っていた。

「……どうして……ここが」

徳二郎はすぐに返事をせずに、爽汰から少し離れた所に座った。

「さあなあ。何となく、ワシもここに来たくなってな。そしたら、お前が居た」

徳二郎は軽口でも叩く様な口調でそう言った。まるで何事もなかったように気を使っているように見える。

まだ引きつる呼吸を整えられない爽汰は、ばつの悪い気分が邪魔して、素直になれないでいる。

二人は黙ったまま、花火の乾いた音を聞いて、そこで座っていた。話す事ならいくらでもあるはずの二人なのに、どうやって伝えたいのかがわからない。

思えば、丸二日間一緒にいたのに、話した事と言えば、その場の出来事やたわいない事ばかりだったような気がする。

久しぶりに会った事を喜びあう事すら、することもせずに。

川上の花火大会が、山場を迎えたのか、その音が絶え間なく鳴り響き出した頃、徳二郎はすっと立ち上がる。

その姿を目で追っていた爽汰のすぐ前まで近寄り、屈んで腕を掴み爽汰を立たせた。

「爽汰」

何をするつもりなのかと呆然としている爽汰にくるりと背を向け、徳二郎は川岸へと進んで行く。

「勝負をしねか？ 爽汰」

一瞬、誰に言っているのかと思わせるタイミングだった。

「……勝負？」

徳二郎は膝を折り、そこに転がっている石を手に持った。

「勝負つて、また水切り？」

この場所で、石を使った勝負、昨日のあれしかないと思った。

徳二郎には伝わる。

「んだ。ほれ、用意しろ」

どうしたものかと戸惑いはしたが、ゆらりと体を前に進め、爽快も石を手に川辺に立った。

バババババ、と弾ける様な耳に残る音のする方を見てやり、徳二郎はその花火に向かって言った。

「あっちでやってる花火の、最後の一発が落ちて消えるまでに、何段飛びまで出せるか、だ。いいか？」

「……ああ、うん」

すぐさま投げた徳二郎の一頭目は四回跳ねた。暗くて小さな石の行きつく先までは見届けられないので、音で判断するしかない。

爽快の一投目を待たずに、徳二郎は二投目を投げ入れる。

「ちよつと、俺まだ……」

自分で言い出して、その気になっている自分に恥ずかしさを感じる。さつきまでわんわん泣いていたのに、もう忘れて遊んでいるなんて、滑稽だからだ。

「ぼやっとしてっからだつぺ。ほれ、投げてみる」

このまま黙っていても、どうなる訳でもない。

そんな気持ちで、爽快も石を投げ入れる。

ピシャン、ポチャ。二回。

徳二郎が投げる。今度は五回。

隣に立つ理沙子の横顔をちらつと見て、爽快はまた石を投げる。

今度は三回。

次の徳二郎はまた五回。

二人は黙々と投げ続けた。その川の中に住む生物がいたとしたら、

大迷惑だったろう。それくらい、次から次へと石の跳ねる数を競った。

徳二郎は、何度投げてても四回は下らず、最高は六回。対する爽汰は、最高が三回と、振るわない。

「……またかよ」

三回目で水に飲まれた石を見て爽汰は毒づく。

仕方なく始めたその対決に、爽汰はどんどん熱中しはじめ、血の気のなかったさっきまでの顔から、次第に普段通りの顔に戻っていた。

徳二郎は、それまでと変わらぬ様子のまま、川に向かって語り出す。

「久しぶりに、たくさん遊んだなあ、爽汰」

「え？」

理沙子の手から投げ出された石は、蛙のように水面を跳ね飛んで行く。

その軽快さに暫し見とれてしまったから、思い出したように爽汰が一投し、すぐ手前で跳ねずに落ちた。爽汰は、その場で徳二郎に向き直る。

それに気づいていないように、徳二郎はまたシュツツという音をさせて、石を投げる。

「ほれ、爽汰の番だぞ」

いいから聞いている、と言われてるように感じたので、爽汰は渋々とつま先を川へとむける。

「爽汰とまたこうやって、川で遊んだり、祭りに行ったり出来るなんて、思ってたかったからよ。本当に楽しかったなや」

爽汰は何もせず、祖父の話を立ったまま聞いていた。徳二郎は、うつすら笑みを浮かべながら続ける。

「毎年、夏になると、爽汰の事を思い出すんだあ。まだ小さかった頃の、あんのかわいい顔。真っ黒に日焼けして、じいちゃん、じいちゃんって転がるみてえに走って来てなあ。どこさ連れて行っても、

大喜びでな……」

爽汰は、うなだれてそれを聞いていた。
楽しかった頃の、一番鮮やかな祖父との思い出。少しずつ、忘れかけていた思い出。

「……じいちゃん、俺……」

「ほんつとくに、楽しかった」

徳二郎は、爽汰の言葉をあえて遮った。まるで今言っておかないといけない事でもあるかのように、強く、意思を持った言葉で。

「死ぬかもしれないと思ったら、どうしても爽汰の顔が見たくて、こつたらとこまで来てしまったけども、その甲斐があったなや」

「ねえ……」

「しかし、このお嬢ちゃんには、とんだ迷惑さかけてしまったなあ。ほんつとに申し訳ねーと思ってる、本当だ。もつと簡単に出て行けるもんだと思ってたんだ。許してくんれ」

徳二郎は、やっと投げ続ける手を止める。だが、隣にいる爽汰へは顔を向けなかった。

佳境に入ってきた花火大会の、弾けるような音たちが、爽汰と徳二郎にも届いていた。

爽汰はつい何か言いそうになるが、止める。今はしてはいけない、と意識下で感じていたのかもしれない。

「爽汰」

「……ん」

「爽汰は、ワシが覚えていたままの爽汰だった。もしかしたら、変わってしまったっているんでねえがと、ちよつと心配した事もあったけども、そんなことなかった。ワシと一緒に田舎で遊んでいた頃の爽汰のまんまだった」

そんな事ない。爽汰は咄嗟に思った。

自分は、小さい頃の素直な自分ではない。

ポチャ、ポチャ、ポチャ、ポチャン。

徳二郎の投げる石の音がする。

「ねえ、じいちゃん……」

「早く、次投げろ」

なぜ、これでお別れのような、もう会えないような、最後のメッセージのような、そんな事を、言う。

爽汰は息を詰まらせる。

もしかして、自分の体に戻れる方法がわかった……？ だからこんな事を言い出しているんじゃない。

まさか。どうやって。

でも、だとしたら、爽汰にだって、言いたい事はある。爽汰は混乱していく思いを巡らせる。

徳二郎は、爽汰が次の石を投げる素振りがないのを見てとり、それから、と言って続けた。

「もしも、ワシが爽汰だったら、やっぱり爺の見舞いより、お嬢ちゃんとの約束を守らねばと、思ったで」

「……じいちゃん？」

「だから、気にするんでねえど？」

そのとき、一際大きな花火が打ち上げられた事をその音の大きさで知る。あまりの破裂音に、ついその空へ目を奪われる。

それは、花火大会の最後を飾る、大花火の音だった。

今まではうつすらとしか見えていなかった夏の風物詩も、その大きさと迫力で、遠く離れる川辺で見上げる瞳にも美しさを見せつけた。

僅かな時間、爽汰もその彩りに見とれていたが、すぐさまその目を徳二郎へと移した。

そこには、さきほどまでと変わらず、石を投げようとする理沙子の横顔があった。

だが、爽汰はその横顔を見て、たまらず声を出す。

「……泣いて……る？」

静かに、鼻をすする音がする。どうしていいかわからず爽汰はそのまま、その姿を見続ける。

そんな爽汰の耳に、徳二郎の投げる石の音が、また一つ聞こえて来た。

「ぼちゃ、と一度きり。」

「……え!？」

その異変に爽汰は気がついた。

「……ねえ」

確かに理沙子の声で、むせび泣く声が聞こえた。爽汰の足は自然に動き出す。

「ねえ、もしかして……」

爽汰は、竦める肩を小さく揺さぶる。

「石崎さんなんでしょ？」

顔をまっすぐに向けたまま、流れる涙は流れ落ちているだけで、それを気にするでもない。

「だって、じいちゃんが投げた石は、一度だって一回で沈んだりしない……」

「……ああ、わああああ」

大きな口で、子どものように泣きすさぶ様を、爽汰はじっと見守っていた。

十二

すぐ足下まで水の押し寄せている川辺から、もつれる足を支えながら、爽汰は岸に少し上ったところへ理沙子を座らせた。

理沙子は、やっと話ができるくらいにまで息が追いついてきていた。

「青山……くん。私……私……」

まるでぜんまいで動く古い人形のように、角々しい動きで爽汰に向いた。

「石崎さん、落ち着いて。ゆっくりでいいから」

震えるように頷いてから、理沙子は人差し指で右目の涙を拭った。

「私……ずっと、あの球場で倒れてからずっと、自分の姿を、自分じゃないみたいに見てたの……まるで、私がもう私でないみたいに……」

また涙がこぼれ落ちていく。

「いつ、石崎さんに戻ったの？」

苦しそうに、息と息の間を縫って答える。

「今、大きな……花火があがった……瞬間」

「そう」

爽汰は黙って聞いていた。理沙子が理沙子のペースで話せるように、と。

理沙子は大きく息を吸う。

「あの球場の医務室で寝かされていた時、私意識を失っていたんだと思うんだけど、驚いた。私、天井から、自分の寝ている姿を見てたんだもの。咄嗟に感じたの、このままじゃいけないって、直感的に思った。早くあの体にもどらなきゃって。でも、どうしたらいいかわからないの。何度やっても体を通り抜けていつてしまってた」

理沙子はまた一粒流れ出た涙を、今度は手のひらでこすった。

「そのときよ、青山君のおじいちゃんが居たのが見えた。私と同じだって、すぐにわかったわ。この人も戻れない人だって。そしたら、私に言うの。ワシの孫だって。すぐ下で、私の事を心配そうな顔して見ていてくれる青山君を指して、そう言うの」

爽汰はその光景を想像して、口角を僅かに上げた。目に浮かぶ、祖父のその姿。

「おじいちゃん、体に戻る方法、教えてくれたの。強く強く願うんだって。絶対にこの体に戻るんだっていう強い思いだけが、元に戻る方法だって」

祖父は本当にそれを知っていたのだろうか。そうだとしたら、どうやって知り得たのだろう。いや、きっと知らなかったに違いない。ただ、困っている理沙子を元気づける為に、でまかせを言ったのではないだろうか。祖父らしい、爽汰はそう思った。

「とっても優しくかった。不安で一杯の私に、大丈夫だから、って。だから、爽汰によく伝えてくれて、ちょっと寂しそうなおじいちゃんの顔を見てたら、どうしてもこのままお別れじゃ、忍びない気がして……。きっと、青山君も会いたがってるだろうって思ってた」

「それで、石崎さんの体を貸すって、じいちゃんに言い出してくれたんだね？」

理沙子はこくと頷いた。

「すっごく喜んで、数年ぶりだって。少し話したらすぐ戻るからって。でも、その途端、とても強いバリアみたいなものが、私の体を包んでしまったようだった。いくら私が意識を集中させても、跳ね返されるような何かが」

ずっとどこかに引っかかっていた、この出来事は実は夢なのではないかと言う気持ちを、理沙子の話す言葉の一つ一つが覆していく。やはり、容易には信じられなかった事は、本当にあったことだったのだ。

「それなのに、どうやって戻れたの……さっき」

静かに爽汰は聞いた。理沙子は自分にも説明しづらいと言った様子で答える。

「突然、そのバリアが無くなったような気がしたの。目に見えない何かが薄れていったような……」

「何かが薄れていった……？」

理沙子は一瞬言いよどんだ。そして、思い切るように話した。

「たぶん満足したんだと思う」

「満足？」

爽汰は聞き返す。理沙子も、わからないけれど、と付け加えて一度口をつぐむ。

「おじいちゃんは、とても青山君に会いたかった。とっても強い気持ちでそれを望んだ。だから、体に戻りたいと思う私の意思でさえ敵わない程、傍にいたいと思った」

「じいちゃんの気持ちが……邪魔してたって事？」

「わからない。でも、おじいちゃんの願いを叶えて上げる事、その思いを満たしてあげることが、体を返してもらう為には必要なんだって感じたの。だからきつと、おじいちゃんは、青山君と過ごせて満足できたんじゃないかって……思う」

「そうだったのか……」

思ったとおりだった。どんなに爽汰が、徳二郎へ酷い事を言い並べても、それは理沙子の体を明け渡すきっかけにはならなかったのだ。問題はそこじゃなかった。

「それと……多分、青山君が苦しんでいる姿を見て、これ以上そんな思いをさせちゃいけないって思ったのもあったんじゃないかな」

この騒動の発端も、終わりも、全ては徳二郎の孫への想いがつよかったから、ということだったのだ。その気持ちを思うと爽汰の胸は、強く締め付けられた。

「一つ聞いていい？」

本当は聞きたい事は一つなんかではないのだが、とにかく爽汰はそう言った。

「うん？」

「石崎さんには、じいちゃんの思ってる事がわかったの？ それとも、話ができるの？」

理沙子は左手で右のこめかみにかかる髪の毛を、後ろへとなでた。「ううん。わかる訳じゃない、話す訳でも。そうだなあ。感じるってというのが一番合ってるのかな」

「感じる？」

理沙子はまだ濡れている頬を両手で包み込んで、すっと顔を滑らせる。

「たまに自分の体に戻れた時に、僅かだけど記憶の中におじいちゃんの気持ちも残ってた。何を考えてたか、少しだけわかるの」

「記憶に気持ちが……残る？」

「言葉でいうのは難しいのだけど、感情のかけらだけが体に残ってるって感じ。それで、私が感じたのは、おじいちゃんが青山君と楽しい思い出を作りたいっていう気持ちだった。もっと青山君と、色んな事がしたいっていう気持ち。そして、その気持ちが強すぎて、私を遠ざけているんだって事も」

「それで、あのメモに、仲良くしてって残したんだね。じいちゃんとか一杯楽しい思い出を作れば、じいちゃんの願望も弱まるって」

まだポケットに仕舞われているあのメモには、そういう意味があったのだ。やはり、理沙子は爽汰の考えたようなひどい事を、書いてはいなかった。

「さつき、涙が止まらなかったのもそう。あんなに悲しい気持ちで、どうやったら涙を流さずに話をする事ができたのかって思うと、信じられないわ。はち切れそうに胸が苦しくなったの。とても耐えきれなかった」

「じいちゃんの、涙……」

ならば、今見た理沙子の涙は、本当は徳二郎が心で流した涙。爽汰を思うが故に溢れた涙。理沙子は、爽汰の顔を優しい目で見つめる。

「おじいちゃん、青山君の事を、とても愛していた。それだけは、私にもとてもわかったわ」

知らない間に、爽汰の頬にひとつ、またひとつと涙の粒が流れていった。

爽汰の手に優しく自分の手をおいた理沙子の瞳にも、また溢れるものが光っている。

花火の音のしなくなった夜の空に、静かな川と、静かな涙の流れる音が聞こえるようだった。

その同じ頃、見舞いから帰った拓治と幸恵は東北の徳二郎の家で、夕食をとっているところだった。

チリリリ。

未だ現役の黒電話が、小気味いい呼び出し音を鳴らしている。

「いい、私が出ます」

箸を置こうとする拓治を制するように言ってから幸恵は席を立つ。食卓のある部屋を出て、広い板張りの廊下にある電話台の前に歩みより、受話器をとった。

「もしもし。高橋でございます。……ええ、娘ですが……え!？」

十三

理沙子を駅まで送りながら、二人はこの三日間に起きた色々な事を話した。

理沙子は、その殆ど全てを見ていたという。もう一人の石崎理沙子の行動に、おかしくもあり、恥ずかしくもあり、時に腹立たしい事もあったが、嬉しかった事もあったと言った。

「嬉しい事？ そんな事あったわけ……？ なんか、怪我させたり、大変な思いしかさせてないような」

街頭に照らされる住宅街を通る道は、とても静かだった。

電気のまったく付いていない家が多いのを見れば、それぞれの故郷へと家族で帰省していて、誰もいないのかもしれないかった。

その道のまっすぐ先には、大通りが見えていて、車のヘッドライトが右から、左からと通り過ぎていく。あそこまで出れば、駅はもうすぐだ。

「ほんと。青山くんのおじいちゃん、見てて飽きなかったもの。次は何するつもりだろうって、ハラハラしっぱなし」

ふふふ、と理沙子は笑った。

久しぶりに理沙子の笑顔を見た。これまでも、何度となく徳二郎の笑う顔は見ていたが、どことは言えないが、何かが違って見えた。「ずっと守ってくれてたでしょう、私の事」

「え？」

爽汰は足を止めた。気にせず、理沙子はそのままゆっくり歩いている。

「病院でも、駅でも、スキー場でも、私が危ないときは、ずっと側に居てくれて、一生懸命守ってくれた」

「そんな。守ってあげたかったけど、だめなことばかりで……」

「そんな事ない……嬉しかった。とっても」

理沙子は離れた爽汰を待つように、くるりと振り返って笑った。

「石崎さん……」

爽汰は、顔が真っ赤になるのを自分でも感じた。それを隠したくて、わざと下を向いて歩いていった。

「それに……」

いたずらっぽい目を爽汰に向けて、続ける。

「青山君の、泣いた顔、見ちゃったもんね！」

ポカンとした爽汰は、さすがに声を出す。

「ちょ！ それはないよお」

あはは、と笑いながら口を両手で押さえている。

「石崎さん、ひどいなああ」

「うそ！ ごめん、もう言わない！」

爽汰は鼻で息を吐き、興奮した呼吸をもとに戻す。

「ほんとに？」

「ホント！」

「ならいいけどさ」

ふと爽汰は不思議に思った。

「じゃ、お詫びにいつこ質問に答えて」

「うん、なに？」

「スキー場の林の中で、石崎さん、一瞬からだに戻ったでしょ？」

「うん」

「……その直前にも、一度戻らなかった？ ほんの一瞬だけ。リフトから落ちる前に」

実は、あのスキー場のリフトから落ちる直前、爽汰が暴拳に出たとき、聞こえた理沙子の言葉がどうしても気になっていたのだ。

だがそれは、徳二郎の言ったことなのか。それとも、理沙子本人の言葉なのか、分からなかった。

理沙子は、爽汰に背中を向け一言で答える。

「戻った」

ああああ。

爽汰は正直がっかりした。

爽汰が聞いたのは、唇を近づけたときに理沙子の言った、『いやあ！ 止めて！』という言葉だったのだ。

理沙子はそのまま少し先へと進んでいった。

状況が状況とはいえ、好きな人にキスを拒まれたという事実は、なかなか悲しい思い出だ。散々痛い思いをさせた理沙子に、そんな事まで期待するほうが愚かだったと思うことにした。

とき。

頬に、何か柔らかいものが触った。

「ん、ん！？」

理沙子の顔が爽汰の頬から離れていく。

「いやって言ったのは……私じゃない私と、先にキスされるなんていや！ って言ったの」

「え……」

恥ずかしいのか、理沙子はまた数歩先を歩き出す。

爽汰は、しばらくその場から動けなかった。

今のは、もしかして……。

「青山君！ いつまでそこにいるつもり？」

そう叫んだ理沙子は、もう笑顔だ。

「あ……えと……」

タタタと、理沙子の駆け寄る音がして、ふわっと何かが爽汰の手に触れる。

驚いてその手を見ると、理沙子の白く、擦り傷の残る手のひらが、優しく掴まっていた。

爽汰は慌てて理沙子の顔を見る。その顔は微笑んでいた。

「いや？」

「いやなわけ……ないよ」

「よかった……」

そう言って、二人はすごすごとまた歩き出す。

「色々あったけど、私にとっては、結構発見が多くて楽しかったか

も知れないな」

「発見？」

理沙子は繋ぐ手を前後に小さく振って遊ぶ。

「青山君のいいところ、たくさん見れたから」

「や……やめてよ……からかうの」

「からかってなんかいないわ！ 本当よ」

爽汰はどうしていいかわからなかった。

さっきまでの不思議な体験より、大好きな理沙子と、手を繋ぎ、仲良く話ができている事の方が、何かの間違いであるかのように感じてきてしまった。

「そうだ」

何かを思い出したように理沙子が跳ねる。

「ん……なに？」

「球場で言いそびれたこと、まだ言ってなかった」

もう何日も前に感じる、あの球場での出来事。

「何？」

「言っていい？」

ちょうど、駅前の大通りに出たところだった。

爽汰の手をパッと離し、走り出して一度止まって振り返る。

「私、青山君のこと、す……」

そこに大型トラックのクラクションが耳を劈くような大きさで、鳴り響く。

「なに？ 聞こえな……」

「おやすみ！ またね！」

笑いながら、手を振り走り去る理沙子。

その姿を呆然と見送る爽汰は、また一人呟く。

「すっぽんに似てると思う、って言いたいだけかもしれないしな…

…」

自分を甘やかしても、いいことはないのだ。

そう言っ、また自分の家へと今来た道を戻りだす。

今の理沙子とのやり取りを思い出すと、少々照れるが、とにかく、無事に理沙子が戻って来てくれたことに肩を撫で下ろした。

しかし、何かを忘れているような気もする。

「あああ！」

その後、徳二郎は一体どうなったのだろう。

「電話！」

言うなりポケットをまさぐるが、水没して使えなかった事をすぐ思い出す。

「ああ、そうじゃん。使えねー！」

すぐさま、周囲を見回して公衆電話を探そうとしたが、電話番号がわからない。

「携帯のメモリ」

携帯電話が使えないから、公衆電話でかける為に電話番号が知りたいのに、その番号は携帯電話でしか見られない！

「本末転倒！？」

焦っているときに、よくなるパニック状態になり、一人身悶えた爽汰は、やっと家にさっさと帰るのが一番の早道だと気づき、ダッシュで住宅街を抜けていった。

十四

「はああ、はあ、はあああ」

爽汰は、玄関のドアノブに手をかけ、息も絶え絶えに鍵を開けた。その瞬間に家の電話が鳴り出したので、留守番電話に繋がる前にと倒れこむようにして受話器を取り上げた。

「もしもし！」

思わず大声で答えてしまった。

『もしもし？ 爽汰？ どこ行つてたの！ 携帯に何回電話しても留守電だし、家に電話しても出ないし！』

母だった。まさに、家に帰ったらすぐにでも電話をかけたい相手だった。

「そんな事いいから、じいちゃん？ じいちゃん、どうなった？」
『それがね……』

爽汰は、家に一人きりでいることが出来ず、また外に出てきてしまった。

もう人出のある時間でもないのに、どんなにぶらぶらと進んだり、止まったり、座り込んだりしたところで、誰にも不審がられない。それがとても快適だった。

今日は蒸し暑いいつもの夜よりも、風が涼しく感じる。湿度が低いのか、べたつくような気持ち悪さもない。

急に空気が変わったような気がして、前を見る。
気が付けば、またあの川辺に来てしまっていた。

「また来ちゃったな……」

自嘲するようにこぼす。

川は、徳二郎がここにまだいたときと全く同じ流れを繰り返している。

まるで爽汰も、徳二郎も、理沙子も、この世界のどの人間でさえもが、いようが、いまいが、そんなことはなんの関係もないと言いながら流れているように見えた。

「どっかで……」

同じことを感じたことがあった気がする。

これと同じような気持ちに。

ザザザ、と少し大きな音がしたときに、思い出した。

徳二郎に連れて行ってもらった、あのヒミツの遊び場だ。

草や山に守られて、あそこも人との関係をもたないで、存在しているようだった。

ただ水が流れるから川があり、川が流れているから魚が棲む。水があるから、草木が育ち、水が削って崖が出来る。

人間にすればすごいことのように見えるが、

「たったそれだけのこと」

そう言いたそうにしている。

川に、徳二郎は似ている。爽汰はそう思った。

自然であることは、かつこ悪いことではない。色々着飾ることが多すぎて、丸裸でいることに不慣れになっているだけだ。

でも、徳二郎は堂々と自然体だ。隠すことがないから、飾ることもない。

「すごいのかもな。じいちゃんって、実は」

爽汰には、まだ真似できなさそうだ。

なんとなく、爽汰は適当にその辺の石を手を持った。丸くて、軽石のような感触。

『そんなんじゃ跳ばねえぞ』

徳二郎のそんな声が聞こえてきそうだ。

「そう、こんなんじゃダメなんだよな」

一人で話すことが、なぜか心地よい。

「平たくって、つるつとして……」

『重すぎても、軽すぎてもダメなんだぞ』

「ちょうどいい重さの……あ、これいいかも」

『んだな、それがいい』

拾い上げた石を、両手の手のひらでゴシゴシ擦る。川のすぐ傍まで歩み寄り、爽汰は口から、すーっと息を吐く。

「とりゃ」

右手から投げ出された石は、水面にほぼ平行に飛んでいく。

ピチャン、ピチャン、ピチャン、ピシャ、ポチャン

「おお、すごい」

小さくガッツポーズを作る。

徳二郎にはまだ及ばないが、少しだけ近づけた。

「来年までに練習して、見せに行かないとな、じいちゃんに」

キャンキャン。

「ん？」

爽汰の言葉に返事でもするようなタイミングで、犬の泣き声がすぐ近くで聞こえた。

左右に目を凝らしてみる。すると、橋の下のとて暗い場所に、小さな茶色いものが動いたような気がした。

爽汰は気になって、その近くまで行ってみる。

「子犬……？」

そこには、柴犬のような小さな犬が、腰を下ろしてしっぽを振っていた。よく見ると、とても痩せていて、動くことも難しいのか、その場で鳴くことが精一杯のようだった。

「お前、一人なのか？」

キャン。

「痩せてんな……。腹減ってんのか？」

キャン。

爽汰は、弱弱しいその子犬を見て、なぜかとてもいとおしく感じた。

爽汰は、ふわりと笑って言う。

「お前、言葉わかるみたいだな」

キャンキャン。

「ははは、すげーな」

嬉しそうに爽汰を見上げる子犬をそっと抱き上げて腕の中にはぐくむ。

「家、来るか？」

キャン。

「俺と一緒に暮らしたいか？」

キャンキャン。

「わかった、決定」

子犬との出会いは、その夜だった。

数週間後

「爽汰！ 今日はどこか行くんじゃないの？」

幸恵の声が、台所から二階にいる爽汰にまで聞こえる程に響いた。自室に居た爽汰は、また何を着ていくかで頭を抱えていた。

今日は、日曜日。

理沙子が、またデイゲームを見に行こうと誘ってくれたのだ。

「どーしょー」

悩む爽汰に追い討ちをかけるように、母の声が続く。

「爽汰、聞いてんの？ 出かけるんだったら、小二郎の散歩行つてからにしてよ？」

そうだった、と思い出し、尚更あわてる。

「わかった、今行く！」

あの日拾った子犬は、めでたく爽汰の家の家族になった。

動物病院に連れて行ったところ、だいぶ弱っていて、まだ命があったのが不思議なくらいだと言われたが、その後めきめきと回復し、今では立派な健康優良児だ。

名前は小二郎。祖父の亡くなった日に拾ったので、徳二郎から二

文字もらった。小さな徳二郎という意味だ。

とりあえず、今着ている服のまま、先に散歩に行くことにした爽快は、バタバタと音をさせ、階段を降りてゆく。

「ほら、もうリードつけてあるから。はい！ 行つてらっしゃい！」
散歩に連れて行つてもらえると分かっている小二郎は、大はしやぎだ。

キャンキャン、キャン！

「わかったよ、行くからそんなにジャンプすんなって。んじゃ、ちよつと行つてくる」

「行つてらっしゃい、気をつけてね！」

どっちが散歩させられているのか、わからない主従関係を思わせるスピードで、慌しく出ていく。

少し呆れ顔でその姿を見送った幸恵に、奥から拓治の声がした。

「なんだ、爽快、散歩か？」

玄関からリビングに戻りながら、幸恵は笑う。

「ええ。大騒ぎで」

拓治は、ソファアの上に座りながら、コーヒーを口に運び、ゴクンと喉を鳴らした。

「しかし、爽快が犬を拾ってくるなんて、びっくりだったな」

拓治の横に腰掛け、幸恵が自分のコーヒーを持って座る。

「本当に。昔、うちの実家でザリガニを拾ってきたことがあったけど、東京に持つて帰るんだって大騒ぎしたくせに、すぐに死なせてしまつて。それ以来ペットなんて要らないって言っていたのにねえ。なんて言つたかしら、あのザリガニの名前……」

幸恵は、うーんと天井を見上げて思い出そうとする。

「大将」

拓治がぼそつと言う。

「そう、大将、そうだわ、大将つて名前だった。父さんと一緒に捕りに行つたんだっけ」

祖父の話がでて、夫婦は、しばらくそれぞれに思いをはせた。

「ねえ、あなた」

「ん？」

「父さんが最後に言った言葉、あれ、なんだったのかしら」

拓治も同じことを思っていた。

「さあ、何か伝えたかったのか、それとも夢でも見ていたのか……」

あの日、爽汰の前から徳二郎が消えた夜、祖父は永い眠りについた。

家で待機していた夫婦のもとに電話が掛かってきたときには、もういつ息を引き取ってもおかしくない状況だったが、二人はなんとか息のあるうちに会うことができた。

そして、祖父の、最後の力で口にした言葉を聞いた。

「爽汰になら、わかるかしらね」

「どうだろう？」

「帰ったら聞いてみようかしら」

徳二郎が最後に言った言葉。

それは他の誰にもわからないものだったのかもしれない。

『この子犬にすっぺ……』

終わり

G・ガール！ 28（後書き）

いかがでしたでしょうか。

とあるラノベ小説賞で二次まで進んだ作品です。

なんとか小説と呼べるものとして、プロの方に認めていただいた初めての作品になります。

ご感想など、お気軽にお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0908d/>

G・ガール！

2010年10月8日15時03分発行